

福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告

雀居9

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第748集



馬鐸  
Bell as Horse Trapping

2003

福岡市教育委員会

# 『雀居9』正誤表

頁	行	Fig.	誤(斜体文字は修正指示)	正(太文字が修正部分)
IV	左下3	Fig. 48	SP1181の遺物(縮尺1/4)	神入 Fig. 48 SP1181他の遺物(縮尺1/4)
	左下2	Fig. 49	SP1181の遺物(縮尺1/4)	神・削 Fig. 49 SP1181他の遺物
	右16	Fig. 66	SJ01の遺物(縮尺1/4)	削除 Fig. 66 SJ01の遺物
	右18	Fig. 68	SJ01の遺物(縮尺1/4)	削除 Fig. 68 SJ01の遺物
	右下22	Fig. 78	Ⅲ面検出の遺物(縮尺1/4・1/2)	Fig. 78 第Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/4・1/2)
	右下21	Fig. 79	Ⅲ面検出の遺物	神入 Fig. 79 第Ⅲ面遺構検出面の遺物
V	右下20	Fig. 80	Ⅲ面検出の遺物(縮尺1/2)	Fig. 80 第Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2)
	左下14	Fig. 139	SRO1実測図(縮尺1/20)	Fig. 139 SRO1実測図(縮尺1/20)
	左下13	Fig. 140	SRO1の遺物(縮尺1/4・1/1)	神入 Fig. 140 SRO1の遺物(縮尺1/4・1/1)
	左下12	Fig. 141	SRO1検出作業	訂正 Fig. 141 SRO1検出作業
	左下11	Fig. 142	SRO1	Fig. 142 SRO1
	右13	Fig. 165 の「F」が太文字なので標準文字に訂正		
VI	右17	Fig. 170	SK078・SK086～088実測図(縮尺1/40)	神入 Fig. 170 SK078・SK086～SK088実測図(縮尺1/40)
	右18	Fig. 171	SK078・SK086～089の遺物(縮尺1/4・1/2)	神・削 Fig. 171 SK078・SK086～SK087の遺物(縮尺1/4・1/2)
	右19	Fig. 172	SK078・SK086～088	神入 Fig. 172 SK078・SK086～SK088
	右22	Fig. 174	SK088	訂正 Fig. 174 SK093
	左1	木製品……………123	木製品	
	左下9	SD02出土遺物(縮尺1/4)	神入 Fig. 44 SD02出土遺物	
VII	左下3	Fig. 50 SD02出土遺物(縮尺1/4)	神入 Fig. 50 SD02出土遺物	
	左下23	Fig. 128 SD03出土遺物(縮尺1/4)	神入 Fig. 128 SD03出土遺物	
	2 下3	室内作業員 清水啓子	訂正 室内作業員 清水啓子	
	4	整然と並び疊かな	神入 整然と並び、疊かな	
	5 7	月形丘陵が南西に延び	訂正 月形丘陵が南東に延び	
	8	弥生時代の甕棺墓	神入 弥生時代の甕棺墓地	
VIII	7 7	所見から中世の	神入 所見から古代～中世の	
	26	Fig. 48 SP1181の遺物(縮尺1/4) 出土遺構名を赤白部分に挿入	Fig. 48 SP1181他の遺物(縮尺1/4) 1:SP1111 2:SP1077 3:SP1152 4:SP1139 5:SP1181 6:SP1241	
	Fig. 49	SP1181の遺物(縮尺1/4)	神・削 Fig. 49 SP1181他の遺物	
	Fig. 66	Fig. 66 SJ01の遺物(縮尺1/4)	削除 Fig. 66 SJ01の遺物	
	Fig. 68	Fig. 68 SJ01の遺物(縮尺1/4)	削除 Fig. 68 SJ01の遺物	
	下14	残っていることが	残っていること	
IX	下8	がたままの姿で	神入 がたままの姿で	
	下1	今に蘇った	訂正 現代に蘇った	
	46	Fig. 78 Ⅲ面検出面の遺物(縮尺1/4・1/2) 遺物番号「9」の断面図を斜かけに訂正	神入 Fig. 78 第Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/4・1/2)	
	47	Fig. 79 Ⅲ面検出の遺物	神入 Fig. 79 第Ⅲ面遺構検出面の遺物	
	48	Fig. 80 Ⅲ面検出の遺物(縮尺1/2)	神入 Fig. 80 第Ⅲ面遺構検出面の遺物(縮尺1/2)	
	50	Fig. 83 スケールの下に挿入	(1~6は縮尺1/6)	
X	54	左上:草寫の右下に「SP0841」の文字を挿入 右上:草寫は「SB13 SP0999」で複数箇所の誤り		
	58	左上:草寫の右下に「SP0823」、右上:草寫の右下に「SP1029」、左下:草寫の右下に「SP0830」の文字を挿入		
	59	Fig. 100 1:SP828出土	神入 1:7:SP0828出土	
	60	Fig. 102 7:SP823出土	神入 1:7:SP0823出土	
	62	Fig. 104 遺構番号「SK1110」を「SE03」に訂正		
	下15	第10次調査区で	訂正 第13次調査区で	
XI	Fig. 112	出土遺構名を赤白部分に挿入	1:SP1031出土	
	Fig. 139	Fig. 139 SRO1実測図(縮尺1/20)	Fig. 139 SRO1実測図(縮尺1/20)	
	Fig. 140	Fig. 140 SRO1の遺物(縮尺1/4・1/1)	Fig. 140 SRO1の遺物(縮尺1/4・1/1)	
	Fig. 141	Fig. 141 SRO1検出作業	Fig. 141 SRO1検出作業	
	Fig. 142	Fig. 142 SRO1	Fig. 142 SRO1	
	下欄外	「SRO1検出作業」の文字の削除		
XII	85	スケールの単位が不明なので「0」「1m」の文字を挿入		
	86 1	第49号土壙SK043	訂正 第49号土壙SK049	
	88 1	第51号土壙SK050	第51号土壙SK051	
	89	Fig. 169 出土遺構名を赤白部分に挿入	1(SK52) 2(SK57) 3(SK81)	
	90	Fig. 170 SK078・SK086～088実測図(縮尺1/40)	神入 Fig. 170 SK078・SK086～SK088実測図(縮尺1/40)	
	91	Fig. 171 SK078・SK086～088の遺物(縮尺1/4・1/2)	神・削 Fig. 171 SK078・SK086～SK087の遺物(縮尺1/4・1/2)	
XIII	92	Fig. 172 SK078・SK086～088	神入 Fig. 172 SK078・SK086～SK088	
	Fig. 174	Fig. 174 SK088	訂正 Fig. 174 SK093	
	101 下14	第105号土壙(SK105)	第105号土壙SK105	
	151 Fig. 44	SD02出土遺物(縮尺1/4)	削除 Fig. 44 SD02出土遺物	
	156 Fig. 50	SD02出土遺物(縮尺1/4)	Fig. 50 SD02出土遺物	
	177 1	SK08 (Fig. 84～90)	神入 SK08 (Fig. 84～90, 98)	
XIV	183 下11	SK12 (Fig. 96～103)	神入 SK12 (Fig. 95～97, 99～103)	
	197 Fig. 128	SD03出土遺物(縮尺1/4)	削除 Fig. 128 SD03出土遺物	
	211 21	〔神園番号帳〕 19	神入 13 19	
	222 22	〔神園番号帳〕 13 20	削除 20	
	222 6	前回報告・今回未報告分	神入 前回報告・今回未調査済で未報告分	

福岡市博多区

# 雀居 9

雀居遺跡第13次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第748集



遺跡名	雀居遺跡 第13次調査		所 在 地	福岡市博多区大字雀居正フリ川	
調査番号	9819	遺跡略号	SAS-13	開発面積	31,000m <sup>2</sup>
調査対象面積	1,700m <sup>2</sup>	調査面積	1,700m <sup>2</sup> × 3面	調査期日	980415～981225

平成15年

福岡市教育委員会

## 序

海に開かれた福岡市は、21世紀を迎えアジアの拠点都市を目指して近代都市の建設が進んでいます。福岡市の発展は、古代以来海外からの新しい文物や刺激を受容するだけでなく、どこにもない独自の文化や風土を作り上げてきた福岡市民の気質や意欲が基盤になっていることは言うまでもありません。

しかし、都市建設は、残念ながら地下に眠っている遺跡を破壊することになります。遺跡は、先人たちが私たち現代人に残してくれた貴重な歴史、文化的遺産です。発掘調査で記録保存を行い、永く後世に伝えることは、私たち現代人の責務と考えています。

本書は、福岡空港内で平成10年に実施した雀居遺跡第13次調査の成果をまとめたものです。雀居遺跡はこれまでに数々の重要な遺構、遺物が発見され、考古学研究者だけでなく市民の関心を集めています。第13次調査でも弥生時代の掘立柱建物群や馬蹄などが発見され、雀居ムラの様子やムラ人の暮らししぶりを具体的に想像するようになりました。

発掘から整理、報告に至るまで、国土交通省九州地方整備局（旧　運輸省第四港湾建設局）、特に福岡空港関係者の皆様には、さまざまな面でご協力をいただきました。また各分野の研究者や発掘作業員、整理作業員をはじめ多くの皆様からご協力、ご指導をいただきました。心から感謝申し上げます。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、さらに学術研究の資料としても活用いただければ幸いです。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生



Fig.1 空から見た福岡市

## 例言・凡例

1. 本書は、国土交通省九州地方整備局（旧 運輸省第四港湾建設局）による福岡空港内西側整備の建設工事に先だって実施した博多区雀居遺跡第13次調査の報告書である。
2. 検出遺構は、次のようなローマ字をつけ、遺物を取り上げている。本書では、遺構の内容が分かるように、遺構名称とローマ字二文字の記号（遺構名英文の略号ではない）とを併記して第1号井戸 SE01、第12号土壙 SK12のように表し、各遺構番号は、各次で完結させている。なお各遺構は、次のような縮尺で統一している。  
 穴立柱建物跡 SC (1/60) 堀立柱建物跡 SB (1/60) 土 壙 SK (1/40) ピット SP (1/40) 井 戸 SE (1/40) 離棺墓 SN (1/20) 木棺墓 SA (1/20) 土壙墓 SH (1/20) 溝 SD (1/40)  
 離地（凹地）SW (1/100) 土器窯 SJ (1/80) 土器群 SG (1/40) 方形周溝 SR (1/60) 円 形溝 SS (1/40) 水田跡 SF (1/400) 杭列 SX (1/40) 自然流路 SL (1/100)
3. 本書に掲載している地図、遺構図は、すべて磁北（真北より西に約6°20' 傾っている）である。またグリッド南北線は磁北より西に59° 傾っている。
4. 遺物のうち石製品、木製品等については、遺物実測図の断面に網かけをしている。また実測図の基本縮尺は、土器・土製品・木製品1/4、石製品・土製品（紡錘車）・金属品1/2である。紙面より大きかったり、逆に小さな遺物については、例外的に縮尺を変えている。なお、出土遺構や遺構面ごとに通し番号としているが、各次に渡っての通し番号にはなっていない。また木製品については、測定数値（単位:mm）を図に記入している。
5. 実測した遺物についてはすべてを掲載したが、個別記述については十分でない。このため観察表を別冊にしている。また御笠川東岸の低平地に位置する雀居遺跡の性格究明、さらに初期水稻耕作の農業技術を解明する上で特に重要な意味を持つ雀居遺跡第4次調査の木製品についても下村智別府大学助教授のご尽力で本書に収めることができた。
6. 遺構・遺物撮影、原稿執筆、削付・編集は、主に力武が担当し、古墳時代土師器については、西堂将大調査員が担当した。発掘現場での遺構実測から資料整埋の遺物実測、分類、登録、さらに報告書作成のトレースなどの各作業については、主に瀬戸啓治、北村幸子、羽方誠、境聰子、野田和美、西堂将大調査員と分担して行った。この他、馬鍔や漆製品の実測は、福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏にお願いした。また石製品の実測、作図、及び土器削付図のトレース業務のうち一部を外部委託した。
7. 木製品、漆製品、金属器、およびガラス製品など特殊遺物については、保存処理やクリーニング、分析などを福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏と片多雅樹嘱託員にお願いした。その結果報告も掲載することが出来た。
8. 英文要約は林田憲三氏にお願いした。
9. 今回の発掘調査で得た出土遺物、実測図や写真などの記録類は、福岡市埋蔵文化財センター（福岡市博多区芦畠2-1-9 5092-571-2921）に収蔵、保管する。誰もが検索し、実見することができる、考古学などの学術研究だけでなく、学校教育や生涯学習など多方面での活用を期待している。

# 本文目次

<b>第1章はじめに</b>	.....	1
第1節 調査にいたるまで	.....	1
第2節 発掘調査、整理報告の組織と構成	.....	2
第3節 駒鹿遺跡の位置と環境	.....	5
<b>第2章発掘調査の記録</b>	.....	7
第1節 調査の概要	.....	7
第2節 グリッド設定と基本層序	.....	7
第3節 第T面（古代～中世）の調査	.....	9
1. 水田跡		
第4節 第II面（弥生時代後期～古墳時代前期）の調査	.....	11
1. 概要	.....	11
2. 井戸	.....	12
3. 土壙・ピット	.....	18
4. 自然流路	.....	28
5. 土器窯	.....	33
第5節 第III面（弥生時代中期～前期）の調査	.....	45
1. 概要	.....	45
2. 自然流路	.....	49
3. 挖立柱建物跡	.....	51
4. 墓陪塚	.....	69
5. 上塙墓	.....	80
6. 土壙・ピット	.....	81
第6節 第IV面（弥生時代早期～前期）の調査	.....	117
1. 円形溝	.....	117
<b>第3章おわりに</b>	.....	122
1. 小結	.....	122
<b>第4章駒鹿遺跡の木製品</b>	.....	123
木製品観察表	.....	217

## 挿図目次

Fig.1	空から見た福岡市	I	Fig.51	SP1008実測図（縮尺1/30）	27
Fig.2	空から見た福岡空港	VI	Fig.52	SP1008の遺物（縮尺1/4）	27
Fig.3	完成した福岡空港国際線ターミナル	1	Fig.53	SP1008の遺物	27
Fig.4	発掘作業員の皆さん	2	Fig.54	ピットの遺物（縮尺1/4）	27
Fig.5	空から見た福岡空港	3	Fig.55	SJ01上面実測図（縮尺1/80）	28
Fig.6	雀居跡周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）	4	Fig.56	SJ01下面実測図（縮尺1/80）	29
Fig.7	空から見た福岡平野（板付遺跡上空から）	5	Fig.57	SJ01上面（南東から）	30
Fig.8	発掘区全景（航空レーダーから）	6	Fig.58	SL01（南東から）	30
Fig.9	北壁土層	7	Fig.59	SJ01の検出作業	31
Fig.10	北壁土層図（縮尺1/30）	7	Fig.60	SL01の遺物実測図（縮尺1/4）	31
Fig.11	水田跡全体図	8	Fig.61	SL01の遺物実測図（縮尺1/4）	32
Fig.12	水田跡の遺物（縮尺1/4）	9	Fig.62	SL01の遺物（縮尺1/4）	32
Fig.13	水田跡の遺物（縮尺1/2）	10	Fig.63	SJ01の遺物（縮尺1/4）	33
Fig.14	第II面検出作業	11	Fig.64	SJ01の遺物（縮尺1/4）	34
Fig.15	第II面の構造分布図（縮尺1/300）	11	Fig.65	SJ01の遺物（縮尺1/4）	35
Fig.16	SE01実測図（縮尺1/40）	12	Fig.66	SJ01の遺物（縮尺1/4）	36
Fig.17	SE01	12	Fig.67	SJ01の遺物（縮尺1/4）	37
Fig.18	SE01の遺物（縮尺1/4）	12	Fig.68	SJ01の遺物（縮尺1/4）	38
Fig.19	SE01の遺物実測図（縮尺1/2・1/4）	13	Fig.69	SJ01の遺物（縮尺1/4）	39
Fig.20	SE02実測図（縮尺1/40）	14	Fig.70	SJ01の遺物（縮尺1/4）	40
Fig.21	SE02の遺物（縮尺1/4）	14	Fig.71	SJ01の遺物（縮尺1/4・1/2）	41
Fig.22	SE02の遺物実測図（縮尺1/4・1/2）	14	Fig.72 a	SJ01の遺物	42
Fig.23	SE03実測図（縮尺1/40）	14	Fig.72 b	SJ01の遺物（縮尺1/4・1/2）	43
Fig.24	SE03	15	Fig.73	SJ01の遺物・馬蹄実測図（縮尺1/2）	44
Fig.25	SE03の遺物実測図（縮尺1/4）	15	Fig.74	馬蹄の出土状況	44
Fig.26	SE03の遺物（縮尺1/4）	16	Fig.75	馬蹄	44
Fig.27	SE03の遺物	17	Fig.76	馬蹄透過X線写真	44
Fig.28	SK006実測図（縮尺1/30）	18	Fig.77	第III面検出作業	45
Fig.29	SK006の遺物実測図（縮尺1/4）	18	Fig.78	III面検出の遺物（縮尺1/4・1/2）	46
Fig.30	SK015の遺物	18	Fig.79	III面検出の遺物	47
Fig.31	SK015の遺物実測図（縮尺1/4・1/2）	19	Fig.80	III面検出の遺物（縮尺1/2）	48
Fig.32	SK042実測図（縮尺1/30）	20	Fig.81	SL02（北より）	49
Fig.33	SK042の遺物実測図（縮尺1/4）	20	Fig.82	第III面構造全景	49
Fig.34	SK044・82・90の遺物実測図（縮尺1/4・1/2）	20	Fig.83	SL02の遺物（縮尺1/4・1/2・1/1）	50
Fig.35	SK056実測図（縮尺1/30）	21	Fig.84	SL02の遺物	50
Fig.36	SK056遺物	21	Fig.85	掘立柱建物跡	51
Fig.37	SK056遺物実測図（縮尺1/4）	21	Fig.86	掘立柱建物跡配置図（縮尺1/400）	51
Fig.38	SK108実測図（縮尺1/30）	21	Fig.87	SB03の遺物実測図（縮尺1/3）	52
Fig.39	SK108上部	22	Fig.88	SB03実測図（縮尺1/60）	52
Fig.40	SK108下部	22	Fig.89	SB03の遺物実測図（縮尺1/4）	53
Fig.41	SK108の遺物実測図（縮尺1/30）	22	Fig.90	SB03の柱穴	54
Fig.42	SP1034実測図（縮尺1/20）	23	Fig.91	SB03の礎板物実測図（縮尺1/4）	54
Fig.43	SP1034	23	Fig.92	SB03の礎板	55
Fig.44	SP1034	23	Fig.93	掘立柱建物跡の礎板実測図（縮尺1/4）	55
Fig.45	SP1034の遺物（縮尺1/4）	24	Fig.94	SB06実測図（縮尺1/60）	56
Fig.46	SP1034の遺物	25	Fig.95	SB06の遺物（縮尺1/4・1/2）	57
Fig.47	SP1181実測図（縮尺1/30）	26	Fig.96	SB06の遺物	57
Fig.48	SP1181の遺物（縮尺1/4）	26	Fig.97	SB07実測図（縮尺1/60）	58
Fig.49	SP1181の遺物（縮尺1/4）	26	Fig.98	SB07の柱穴	58
Fig.50	SP1008構造写真	27	Fig.99	柱穴実測図（縮尺1/40）	58

Fig.100	SB07の遺物実測図（縮尺1/4）	59	Fig.153	SK008の遺物（縮尺1/2）	84
Fig.101	SB07の縁石	59	Fig.154	SK025実測図（縮尺1/40）	85
Fig.102	SB07の遺物実測図（縮尺1/4）	60	Fig.155	SK025の遺物（縮尺1/4）	85
Fig.103	SB07の縁石と柱根	61	Fig.156	SK026実測図（縮尺1/40）	85
Fig.104	SB13実測図（縮尺1/60）	62	Fig.157	SK026の遺物（縮尺1/4）	85
Fig.105	SB13の遺物実測図（縮尺1/4）	62	Fig.158	SK033実測図（縮尺1/40）	85
Fig.106	SB13	63	Fig.159	SK033の遺物（縮尺1/4）	86
Fig.107	SB13の柱穴	63	Fig.160	SK033の遺物	86
Fig.108	SB13の遺物（縮尺1/4）	64	Fig.161	SK049の遺物（縮尺1/4・1/2）	86
Fig.109	SB14 の遺物（縮尺1/4）	64	Fig.162	SK049実測図（縮尺1/40）	87
Fig.110	SB14実測図（縮尺1/60）	65	Fig.163	SK049の遺物	87
Fig.111	SB14	65	Fig.164	SK035の遺物（縮尺1/2）	87
Fig.112	SB15の遺物（縮尺1/4）	66	Fig.165	SK051実測図（縮尺1/40）	88
Fig.113	SB15実測図（縮尺1/60）	66	Fig.166	SK051の遺物（縮尺1/4）	88
Fig.114	SB23実測図（縮尺1/60）	66	Fig.167	SK052実測図（縮尺1/40）	88
Fig.115	SB23の遺物（縮尺1/4）	67	Fig.168	SK052 他の遺物（縮尺1/2）	89
Fig.116	SB25の遺物（縮尺1/4・1/2）	67	Fig.169	SK052 他の遺物	89
Fig.117	SB25実測図（縮尺1/60）	68	Fig.170	SK078・SK086～088実測図（縮尺1/40）	90
Fig.118	SB27実測図（縮尺1/60）	68	Fig.171	SK078・SK086～088の遺物（縮尺1/4・1/2）	91
Fig.119	廐棺墓分布図（縮尺1/50）	69	Fig.172	SK078・SK086～088	91
Fig.120	廐棺墓	69	Fig.173	SK088の遺物（縮尺1/4・1/2）	92
Fig.121	SN01実測図（縮尺1/20）	70	Fig.174	SK088	92
Fig.122	SN01実測作業スケッチ	70	Fig.175	SK093実測図（縮尺1/40）	93
Fig.123	SN01（東から）	71	Fig.176	SK093の遺物（縮尺1/4）	93
Fig.124	SN01上、下棺実測図（縮尺1/4）	72	Fig.177	SK093の遺物	94
Fig.125	SN01の遺物（縮尺1/4）	73	Fig.178	SK094実測図（縮尺1/40）	94
Fig.126	SN01上、下棺	73	Fig.179	SK094	94
Fig.127	SN02実測図（縮尺1/20）	74	Fig.180	SK094の遺物（縮尺1/4）	95
Fig.128	SN02上、下棺	74	Fig.181	SK094の遺物	95
Fig.129	SN02	74	Fig.182	SK096実測図（縮尺1/40）	96
Fig.130	SN02上、下棺実測図（縮尺1/4）	75	Fig.183	SK096の遺物（縮尺1/4・1/2）	96
Fig.131	SN03実測図（縮尺1/20）	76	Fig.184	SK096の遺物	97
Fig.132	SN03	76	Fig.185	SK097実測図（縮尺1/40）	97
Fig.133	SN03上、下棺（縮尺1/4）	77	Fig.186	SK097の遺物（縮尺1/4）	97
Fig.134	SN03下棺	77	Fig.187	SK098実測図（縮尺1/40）	98
Fig.135	SN04実測図（縮尺1/20）	78	Fig.188	SK098	98
Fig.136	SN04上、下棺	78	Fig.189	SK098の遺物（縮尺1/4・1/2）	99
Fig.137	SN04	78	Fig.190	SK101実測図（縮尺1/40）	100
Fig.138	SN04上、下棺（縮尺1/4）	79	Fig.191	SK101の遺物（縮尺1/4・1/2）	100
Fig.139	SR01実測図（縮尺1/20）	80	Fig.192	SK102実測図（縮尺1/40）	101
Fig.140	SR01の遺物（縮尺1/4・1/1）	80	Fig.193	SK102の遺物（縮尺1/4）	101
Fig.141	SR01検出作業	80	Fig.194	SK105実測図（縮尺1/40）	101
Fig.142	SR01	80	Fig.195	SK105の遺物（縮尺1/4）	102
Fig.143	第Ⅲ面検出作業	81	Fig.196	SK105の遺物	102
Fig.144	第Ⅲ面土壤分布図（縮尺1/800）	81	Fig.197	SK109実測図（縮尺1/40）	103
Fig.145	SK003土壤実測図（縮尺1/40）	82	Fig.198	SK109の遺物（縮尺1/4）	103
Fig.146	SK003の遺物（縮尺1/4）	82	Fig.199	SK109の遺物	103
Fig.147	SK005実測図（縮尺1/40）	82	Fig.200	SK111実測図（縮尺1/40）	103
Fig.148	SK005の遺物（縮尺1/4・1/2）	83	Fig.201	SK111	103
Fig.149	SK005の遺物（縮尺1/4）	84	Fig.202	SK111の遺物（縮尺1/4）	104
Fig.150	SK005の遺物（縮尺1/4）	84	Fig.203	SK114実測図（縮尺1/40）	104
Fig.151	SK007の遺物（縮尺1/2）	84	Fig.204	SK114	104
Fig.152	SK008実測図（縮尺1/40）	84	Fig.205	SK114の遺物（縮尺1/4）	105

Fig.206	SK116実測図（縮尺1/40）	105
Fig.207	SK116の遺物（縮尺1/4）	105
Fig.208	SP0613実測図（縮尺1/40）	105
Fig.209	SP0613	105
Fig.210	SK120実測図（縮尺1/40）	106
Fig.211	SK119・SK120の遺物（縮尺1/4・1/2）	106
Fig.212	SK119・SK120の遺物	106
Fig.213	SK117実測図（縮尺1/40）	107
Fig.214	遺物取り上げ作業	107
Fig.215	SK117・SK118の遺物（縮尺1/4・1/2）	107
Fig.216	SK121の遺物（縮尺1/4）	108
Fig.217	SK122の遺物（縮尺1/4）	108
Fig.218	SK122実測図（縮尺1/40）	108
Fig.219	SK123の遺物（縮尺1/4）	108
Fig.220	SK123実測図（縮尺1/40）	109
Fig.221	SK124の遺物（縮尺1/4・1/2）	109
Fig.222	SK124・SK125の遺物	110
Fig.223	SK125実測図（縮尺1/40）	110
Fig.224	SK125の遺物（縮尺1/4・1/2）	111
Fig.225	SK126の遺物（縮尺1/4）	112
Fig.226	SK127実測図（縮尺1/40）	112
Fig.227	SP814ピット実測図（縮尺1/40）	112
Fig.228	ピットの遺物（縮尺1/4）	113
Fig.229	ピットの遺物（縮尺1/4・1/2）	114
Fig.230	ピットの遺物	115
Fig.231	ピットの遺物（縮尺1/2）	115
Fig.232	ピットの遺物（縮尺1/2）	116
Fig.233	実測作業	116
Fig.234	円形溝の検出作業	117
Fig.235	円形溝の分布図（縮尺1/300）	117
Fig.236	SS01実測図（縮尺1/40）	118
Fig.237	SS01	118
Fig.238	SS02実測図（縮尺1/40）	119
Fig.239	SS02	119
Fig.240	SS03実測図（縮尺1/40）	120
Fig.241	SS03	120
Fig.242	SS04	121
Fig.243	SS04実測図（縮尺1/40）	121
Fig.244	中国貴州省のブタ小屋（鳥丸貞恵氏撮影）	122
Fig.245	炭屑の塗い（鳥丸貞恵氏撮影）	122



Fig.2 空から見た福岡空港

第4章 徒歩道路の木製品	123	Fig.53 SD02出土遺物（縮尺1/4）	157
Fig.1 駕道跡周辺の遺跡	123	Fig.54 SD02出土遺物（縮尺1/2・1/4）	158
Fig.2 調査区遺構平面図（縮尺1/300）	124	Fig.55 SD02出土遺物	158
Fig.3 調査区全景（北から）	125	Fig.56 SD02出土遺物（縮尺1/4）	159
Fig.4 調査区全景（西から）	125	Fig.57 SD02出土遺物	159
Fig.5 包含層出土遺物（縮尺1/2・1/4）	126	Fig.58 SD02出土遺物（縮尺1/4）	160
Fig.6 包含層出土遺物（縮尺1/4）	127	Fig.59 SD02出土遺物（縮尺1/4）	折込
Fig.7 SD01出土遺物（縮尺1/4）	127	Fig.60 SD02遺物出土状況	折込
Fig.8 SK32遺構実測図（縮尺1/30）	128	Fig.61 SD02出土遺物（縮尺1/4）	161
Fig.9 SK32遺物出土状況	128	Fig.62 SD02出土遺物	161
Fig.10 SK32出土遺物（縮尺1/4）	129	Fig.63 SD02出土遺物（縮尺1/4）	162
Fig.11 SC05遺構実測図（縮尺1/150）	130	Fig.64 SD02遺物出土状況	163
Fig.12 SC05出土遺物（縮尺1/4）	131	Fig.65 SD02出土遺物	163
Fig.13 SC05出土遺物（縮尺1/4）	132	Fig.66 SD02出土遺物（縮尺1/4）	164
Fig.14 SC05出土遺物	133	Fig.67 SD02出土遺物	164
Fig.15 SD02遺物出土状況（北から）	134	Fig.68 SD02出土遺物（縮尺1/4）	165
Fig.16 SD02遺構実測図	135	Fig.69 SD02出土遺物（縮尺1/4）	166
Fig.17 SD02遺物出土状況	136	Fig.70 SD02出土遺物	167
Fig.18 SD02出土遺物（縮尺1/4）	136	Fig.71 SD02出土遺物（縮尺1/4）	168
Fig.19 SD02出土遺物（縮尺1/4）	137	Fig.72 SD02出土遺物（縮尺1/4）	169
Fig.20 SD02出土遺物	137	Fig.73 SD02出土遺物（縮尺1/4）	170
Fig.21 SD02遺物出土状況	138	Fig.74 SD02出土遺物（縮尺1/4）	170
Fig.22 SD02出土遺物（縮尺1/4）	138	Fig.75 SD02出土遺物（縮尺1/4）	171
Fig.23 SD02出土遺物（縮尺1/4）	139	Fig.76 SD02出土遺物（縮尺1/4）	172
Fig.24 SD02遺物出土状況	140	Fig.77 SD02出土遺物（縮尺1/4）	173
Fig.25 SD02出土遺物（縮尺1/4）	140	Fig.78 SD02出土遺物（縮尺1/4）	174
Fig.26 SD02出土遺物	141	Fig.79 SD02出土遺物（縮尺1/4）	175
Fig.27 SD02出土遺物（縮尺1/4）	142	Fig.80 SD02遺物出土状況	175
Fig.28 SD02遺物出土状況	143	Fig.81 SX04遺物出土状況	176
Fig.29 SD02出土遺物	143	Fig.82 SX04遺物出土状況	176
Fig.30 SD02出土遺物（縮尺1/4）	144	Fig.83 SX04出土遺物（縮尺1/4）	176
Fig.31 SD02出土遺物	144	Fig.84 SX04遺物出土状況	177
Fig.32 SD02遺物出土状況	145	Fig.85 SX08出土遺物（縮尺1/4）	177
Fig.33 SD02出土遺物（縮尺1/4）	145	Fig.86 SX08出土遺物	178
Fig.34 SD02出土遺物	146	Fig.87 SX08出土遺物（縮尺1/4）	179
Fig.35 SD02出土遺物（縮尺1/4）	146	Fig.88 SX08出土遺物	179
Fig.36 SD02出土遺物（縮尺1/4）	147	Fig.89 SX08出土遺物（縮尺1/2・1/4）	180
Fig.37 SD02遺物出土状況	148	Fig.90 SX08出土遺物（縮尺1/4）	181
Fig.38 SD02出土遺物	148	Fig.91 SX11遺物出土状況	181
Fig.39 SD02出土遺物（縮尺1/4）	148	Fig.92 SX11出土遺物（縮尺1/4）	182
Fig.40 SD02遺物出土状況	149	Fig.93 SX11遺物出土状況	182
Fig.41 SD02出土遺物（縮尺1/4）	149	Fig.94 SX11出土遺物	183
Fig.42 SD02出土遺物（縮尺1/4）	150	Fig.95 SX12遺物出土状況	183
Fig.43 SD02遺物出土状況	151	Fig.96 SX12出土遺物（縮尺1/4）	184
Fig.44 SD02出土遺物（縮尺1/4）	151	Fig.97 SX12遺物出土状況	184
Fig.45 SD02出土遺物（縮尺1/4）	152	Fig.98 SX08出土遺物（縮尺1/4）	折込
Fig.46 SD02出土遺物	153	Fig.99 SX08遺物出土状況	折込
Fig.47 SD02出土遺物（縮尺1/4）	154	Fig.100 SX12出土遺物（縮尺1/2）	折込
Fig.48 SD02出土遺物	155	Fig.101 SX12遺物出土状況	折込
Fig.49 SD02出土遺物（縮尺1/4）	156	Fig.102 SX12出土遺物	185
Fig.50 SD02出土遺物（縮尺1/4）	156	Fig.103 SX12出土遺物（縮尺1/4）	185
Fig.51 SD02遺物出土状況	156	Fig.104 SX13出土遺物（縮尺1/4）	186
Fig.52 SD02出土遺物（縮尺1/4）	157	Fig.105 SX13遺物出土状況	186

Fig.106	SX13出土遺物（縮尺1/4）	187
Fig.107	SX13出土遺物（縮尺1/4）	187
Fig.108	SX13出土遺物（縮尺1/4）	188
Fig.109	SX13出土遺物（縮尺1/4）	189
Fig.110	SX13出土遺物	189
Fig.111	SX13出土遺物	190
Fig.112	SX13出土遺物（縮尺1/4）	190
Fig.113	SX13出土遺物	191
Fig.114	SX13出土遺物（縮尺1/4）	191
Fig.115	SX13出土遺物（縮尺1/4）	192
Fig.116	SX13出土遺物	192
Fig.117	SX13出土遺物（縮尺1/4・1/2）	192
Fig.118	SX13出土遺物（縮尺1/4・1/2）	193
Fig.119	SX13出土遺物（縮尺1/4）	194
Fig.120	SD03遺物出土狀況（北東から）	195
Fig.121	SD03実測図（下層①）（縮尺1/150）	196
Fig.122	SD03実測図（下層②）（縮尺1/150）	196
Fig.123	SD03出土遺物（縮尺1/4）	折込
Fig.124	SD03遺物出土狀況	折込
Fig.125	SD03出土遺物（縮尺1/4）	197
Fig.126	SD03遺物出土狀況	折込
Fig.127	SD03出土遺物（縮尺1/4）	197
Fig.128	SD03出土遺物（縮尺1/4）	197
Fig.129	SD03遺物出土狀況	197
Fig.130	SD03出土遺物（縮尺1/4）	197
Fig.131	SD03出土遺物（縮尺1/4）	198
Fig.132	SD03遺物出土狀況	198
Fig.133	SD03出土遺物（縮尺1/4）	199
Fig.134	SD03出土遺物（縮尺1/4）	200
Fig.135	SD03出土遺物（縮尺1/4）	201
Fig.136	SD03出土遺物（縮尺1/4）	202
Fig.137	SD03出土遺物（縮尺1/4）	203
Fig.138	SD03出土遺物（縮尺1/4）	204
Fig.139	SD03出土遺物	204
Fig.140	SD03出土遺物（縮尺1/4）	204
Fig.141	SD03出土遺物	204
Fig.142	SD03遺物出土狀況	205
Fig.143	SD03出土遺物	205
Fig.144	SD03出土遺物（縮尺1/4）	205
Fig.145	SD03出土遺物（縮尺1/2・1/4）	206
Fig.146	SD03出土遺物	206
Fig.147	SD03遺物出土狀況	206
Fig.148	SD03出土遺物（縮尺1/4）	207
Fig.149	SD03遺物出土狀況	208
Fig.150	SD03出土遺物	208
Fig.151	SD03出土遺物（縮尺1/2・1/8）	208
Fig.152	SD03出土遺物（縮尺1/4）	209
Fig.153	SD03出土遺物	209
Fig.154	SD03出土遺物（縮尺1/4）	210
Fig.155	SD03出土遺物	210
Fig.156	SD03出土遺物（縮尺1/4）	211
Fig.157	SD03出土遺物（縮尺1/4）	211
Fig.158	SD03出土遺物（縮尺1/4・1/8）	212
Fig.159	SD03出土遺物（縮尺1/4）	折込
Fig.160	SD03出土遺物（縮尺1/2）	213
Fig.161	SD03遺物出土狀況	213
Fig.162	SD03出土遺物（縮尺1/2・1/4）	213
Fig.163	SD03出土遺物	213
Fig.164	SD03出土遺物（縮尺1/4）	214

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査にいたるまで

福岡空港の歴史は、昭和19年（1944）旧陸軍による席田（むしろだ）飛行場の建設に始まる。北部九州の製鉄工業、炭田、都市を防衛する目的で600mの滑走路が作られた。戦後占領軍が接收し板付飛行場として再スタートし、その後は長く米軍の基地として使用されてきた。昭和26年（1951）には国内線が開設され民間飛行場となり今日に至っている。アジアの玄関口としての役割を果たしている福岡空港は、着実に発展を続けてきた。最近のデーターでは、国内線40路線、国際線22路線、年間乗降者数1,958万人（国際線230万人、国内線1,728万人）で羽田、成田に次ぐ国内3位、年間発着回数は143,074で羽田に次ぐ2位と急増している。滑走路1本の空港としては日本一である。ここ数年で空港機能が飽和状態に達すると予想されることから、運輸省第四港湾建設局（現 国土交通省九州地方整備局）は国際線ターミナル、駐機場（エプロン）、国内、国際貨物などの各施設を空港西側に移動する「福岡空港西側整備」を計画した。

御笠川右岸の低平地に位置する福岡空港内には、周辺の遺跡分布から見て弥生時代以降の重要な遺跡が眠っていると期待されていたが、空港関係者以外の立入禁止であったために埋蔵文化財については空白地帯であった。運輸省第四港湾建設局の空港整備計画を受けて埋蔵文化財課では、平成3年（1991）6月15日～8月3日、西側全域において39か所の試掘トレンチを設け遺跡の確認調査を行った。この結果、整備計画地の3か所で遺構、遺物が集中することを確認し、字名から雀居遺跡と名付けた。その後協議を重ね平成3年10月から発掘調査に着手し、平成10年まで継続した。

最終年の第13次調査は、対象面積1,700m<sup>2</sup>で試掘によって2面の遺構面が確認されていたことから3,400m<sup>2</sup>を6か月間で発掘することにした。



Fig.3 完成した福岡空港国際線ターミナル

## 第2節 発掘調査の組織と構成

( ) 内は複数

調査委託	運輸省第四港湾建設局 (国土交通省九州地方整備局)
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 西憲一郎 (生田征生)
調査総括	福岡市教育委員会 埋蔵文化財課
	課長 荒巻輝勝 (山崎純男) 調査第2係長 山口譲治 (田中壽夫)
	事前審査係 松村道博 田中壽夫 榎本義嗣 長家伸 (池崎謙二 大塚紀宜)
調査庶務	小森彰 (御手洗清 中岳圭) 調査担当 力武卓治
発掘調査員	瀬戸啓治 北村幸子 羽方誠
発掘作業員	池田省三 池田福美 石屋四一 岩永嘉雄 梅崎元 浦伸英 榎田信一 越智信孝 大谷政道 甲斐康完 蒲池雅徳 亀井薰 川井田明 黒木良太郎 高着一夫 早川章 河野一一 木原保生 楠林司朗 古林茂夫 酒井次憲 真田弘三 柴田博 平井武夫 高嶋章浩 田上智雄 玉田重人 堤篤史 豊丸秀仁 中尾良藏 中川祥一 長野嘉一 野田淳一 西川謙 二宮白人 野村道夫 羽岡正春 萩尾政士 平松永七郎 福田幹雄 別府俊美 松永正義 三浦力 安高精一 山田正治 吉田博明 吉住政光 吉原琢 吉峰勤 脇坂勇 阿部幸子 穴井加菜子 石川洋子 伊藤美伸 岩本三恵子 古賀典子 江崎ヒサ子 内山和子 大端由美子 金子二三枝 川井田ムツ子 草場博子 小松富美 桑原美津子 小島キサ 幸田信乃 澄川アキヨ 世利陽子 田原キヌエ 坂本よし子 砥板泰美 西山裕子 富田千栄子 中川原美智子 中野裕子 中村フミ子 鍋山治子 福場真由美 西田文子 播磨千恵子 林厚子 林田和子 福田美星 藤野トシ子 藤原道子 松岡芳枝 松浦滋子 松尾文江 水田ミヨ子 持丸玲子 握川ゆかり 渡辺淑子 森敬子 森田祐子 脇坂サツキ 安高久子 小路九嘉人、小路良江 水田優子 指原始子 花田則子 池聖子 中村幸子 小池温子 大音輝子 田端名穂子 吉川暢子 村本義夫 増田ゆかり (九州大学) 金宰賢 大森円 益原祐介 (早稲田大学) 篠原律子
室内作業	清水啓子 山野祥子 生垣綾子 安部国恵 桑野ひろみ 桑野由美子
整理調査	坂本幸子 羽方誠 境聰子 野田和美 西堂将夫
整理作業	池田由美 宮崎まり子 渡辺敦子 柴田志乃 城後渡 生垣綾子 岩隈香鶴里



Fig.4 発掘作業員の皆さん



Fig.5 空から見た福岡空港

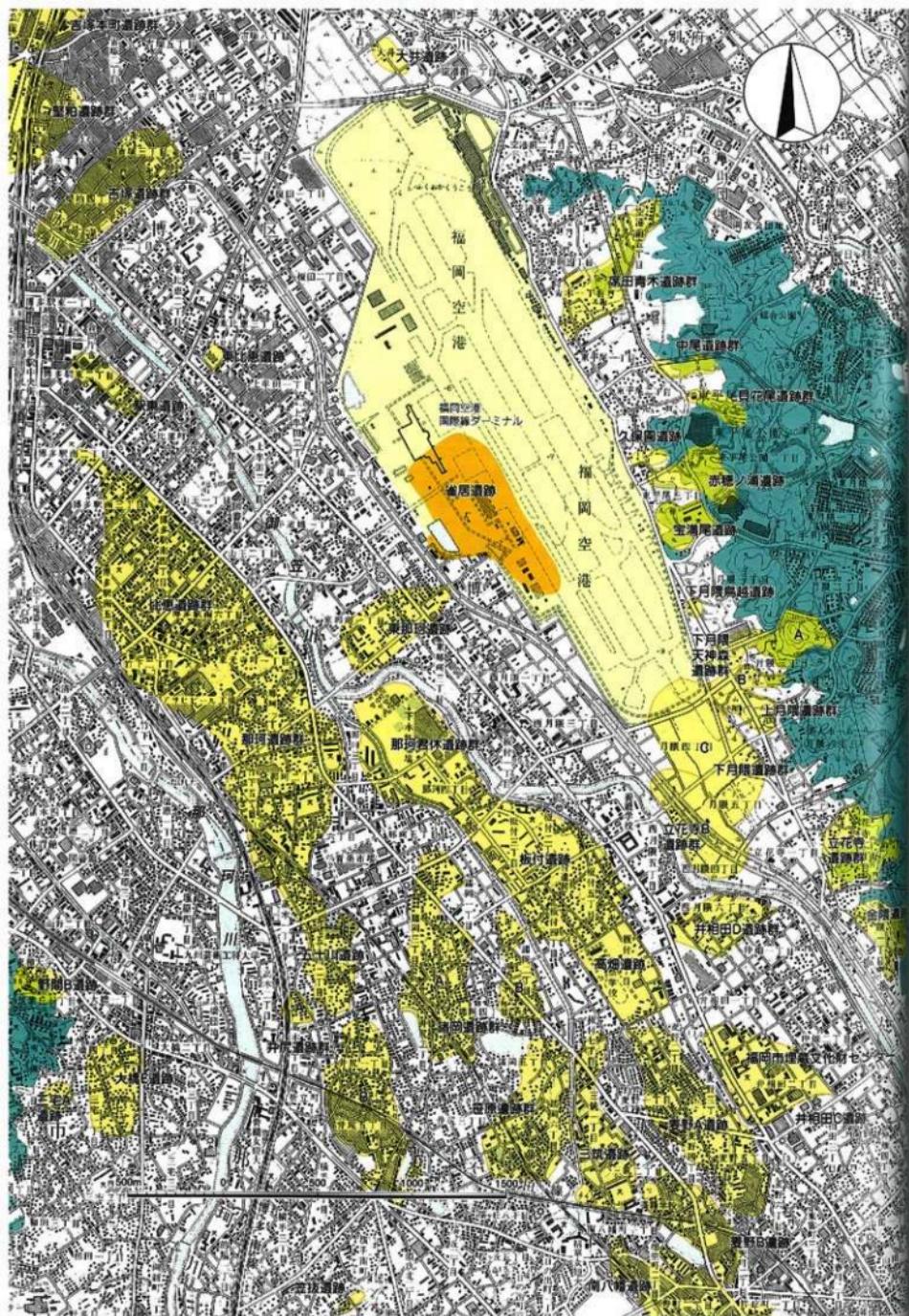


Fig.6 雀居遺跡周辺の道路分布図 (縮尺 1/25,000)

### 第3節 雀居遺跡の位置と環境

雀居遺跡は御笠川東岸の低平地に位置している。昭和19年席田飛行場以来、板付飛行場、福岡空港と名を変えながらも60年近く飛行場として利用されてきた。かつては「むしろだ」の地名の由来となつたと言われている長方形に区画された水田が塚のように整然と並び豊かな収穫量を誇る田園地帯であった。御笠川を挟んで西側には弥生銀座と呼ばれる遺跡密集地帯の郡河、比恵丘陵が対峙している。弥生時代の環溝集落である板付遺跡や那珂遺跡は、半径約1,800m内の指呼の間にある。一方東側は、月隈丘陵が南西に延び、弥生時代中期の大型掘立柱建物跡が見つかった久保園遺跡、土壙墓に漢式鏡が副葬されていた宝満尾遺跡、そして弥生時代の堀柵墓である金隈遺跡などが点在している。このように弥生時代を代表する遺跡に取り囲まれた福岡空港は、弥生時代以来の重要な遺跡が眠っていると期待された。平成3年から着手した発掘調査によって毎年目を見張るような事が現れ、十分に期待に応える成果を上げてきた。特に御笠川の氾濫原に当たり過酷な自然状況にもかかわらず、板付遺跡とはほぼ同時期に水稻耕作を開始した集落が形成されていることは驚きである。雀居遺跡の存在が明らかになった事によって、水稻耕作開始期における遺跡相互の関係や農耕技術の段階などの解明に迫れるとさらに期待が膨らんだ。



Fig.7 空から見た福岡平野（板付遺跡上空から）



Fig.8 発掘区全景（航空レーダーから）

## 第2章 発掘調査の記録

### 第1節 調査の概要

第13次調査対象地は第7、9次調査区の北西35m、第10次調査区の北東5mに位置している。対象面積は1,700m<sup>2</sup>で福岡空港の機能支援施設用地に予定されている。調査前は国際線ターミナルの建設各社のプレハブ事務所が建ち並び、これらの移動を待って平成10年5月から発掘を開始した。標高は6.3m前後。試掘では遺構面は黒色粘質土と青灰色粘質土の2面と予想されたが、第10次、12次の発掘所見から中世の水田跡も残っている可能性があり、パワーシャベルで約1.6mの深さまで掘り下げ、水田跡の検出作業から取りかかることにした。また予算、期間の許す限り第10次の間を通る道路下も調査することにし、第10、12次調査で確認した微高地が北側にどこまで拡張するのか、また第7、9次の微高地との間に窪地が存在するのかなどの確認を主要な目的とした。

ところが表土剥ぎを始めて間もなく米軍基地時代の埋設管や空港レーダーのケーブル線などが見つかり、安全確保を優先して作業を中断した。いずれも現在使用していることが分かり撤去できないことから、土手として残し発掘区を西から1~3区に分割することになった。

ところで第13次の調査期間中も「雀居遺跡週刊ニュース」を毎週発行し続け第101号まで達した。発掘調査の経過や遺構、遺物の出土時の様子などを詳しく記録しているので、調査概要は週刊ニュースに譲りここでは記述しない。

### 第2節 グリッド設定と基本層序

**グリッド設定** 第9次調査で設定された5mグリッドを踏襲した。東端はE列、西端はM列、北端は35列、南端は27列である。

**基本層序** 発掘区四壁で柱状土層図を作成したが、最も基本的な層序を示している北壁で実測した柱状土層図で第13次調査区の土層を説明する。

1~7層は席田飛行場以降の整地層でアスファルトやバラスが数層ごとに見られる。8層は約10cmと薄いが席田飛行場で強制的に埋められた昭和



Fig.9 北壁土層

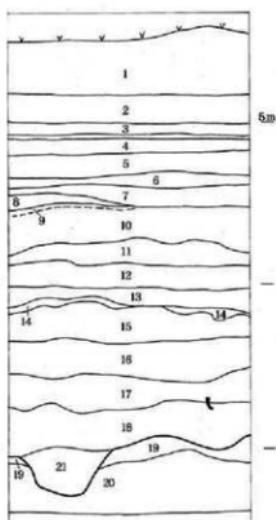


Fig.10 北壁土層図 (縮尺 1/30)

土層名 1~7. 塗地層 (パラス、1、6はアスファルト) 8. 水田耕作土 9. 黒土 10. 黄褐色粘質土 11. 灰色粘質土 12. 灰褐色土 13. 酸性土  
 14. 砂層 (部分的に灰褐色粘質土) 15. 脱砂層 16. 灰褐色粘質土 (第1面) 17. 黑褐色粘質土 (第2面) 18. 黑色粘質土 (第3面)  
 19. 青灰色粘質土 (第4面) 20. 灰褐色粘質土 21. 砂層

の水田耕作土である。この下部には鉄分を多く含む層がかすかに認められ床土となっている。10~12層には鉄やマンガンが草根状に入り込んでおり、中世以降の水田耕作土と推測した。13~15層は砂層で20cm以上の厚さに堆積している。ちょうど中程に粒子の細かな砂層が入っており、後述する曲げ物などの木製品は主にこの砂層から出土している。洪水が時間を置いて数回に及んでいたことを示すのであろう。この砂層を取り除くと水田跡が現れ、ここを第Ⅰ面の遺構面とした。16層の水田耕作土の下には黒（褐）色粘質土が堆積しており、上面付近に古墳時代前期の遺物が含まれている。この16層を第Ⅱ面、弥生時代後期~古墳時代前期の遺構面とした。土層断面では第10次調査でも同様であったが黒色粘質土は上部に分けることができるが、平面的な発掘では土壤が乾燥し、土色の判別は不可能である。あいにく暑さの激しい夏季に当たり、散水を繰り返しグランドシートで覆ってもひび割れるだけで徒労に終わった。しかし、黒色粘質土を慎重に掘り下げると弥生時代中期後半の自然流路や中期中頃前後の掘立柱建物跡や前期後半前後の甕棺墓、土壤墓などが時代順に検出できたことから、18層を第Ⅲ面、弥生時代中期から前期の遺構面とした。19層は青灰色粘質土で第10次、12次で基盤層とした土層である。第13次では10cm前後と薄い堆積で、この下は20層の灰褐色砂質土である。19層が第Ⅳ面の遺構面となる。円形溝は18層下部で検出できるが、第10次調査と同じように第Ⅳ面の遺構として取り扱っている。

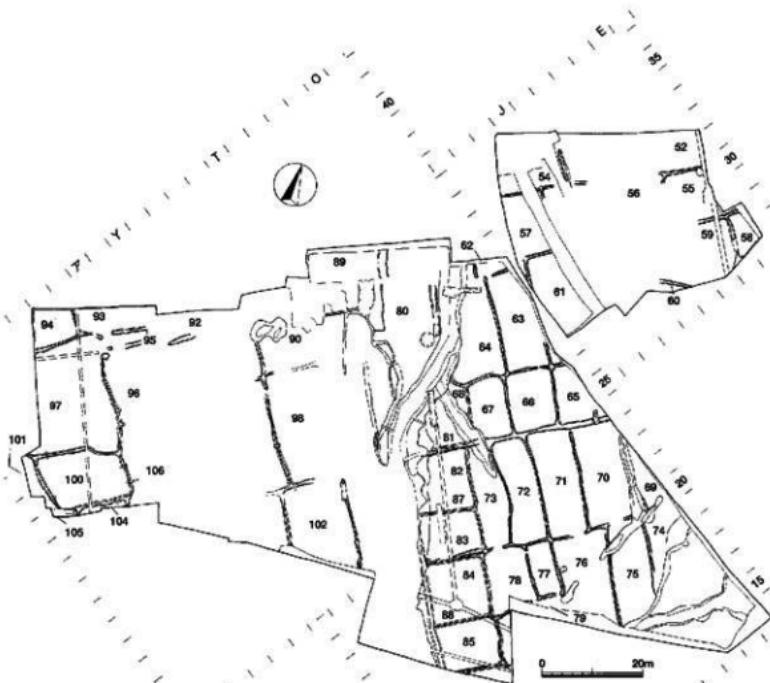


Fig.11 水田跡全体図

### 第3節 第Ⅰ面（古代～中世）の調査

#### 1. 水田跡

第13次調査区は飛行場の整地層が厚いことから水田までは約185cmと深い。同じように砂層に覆われ、その厚さは40cmもあり水田の保存状態は良好と思われた。西側に隣接する第10次調査区でも畦畔の残りがきわめて良好でパワーシャベルで水平に砂層を取り除くと、盛り上がった畦畔が最初に砂層の中へ現れた。しかし第13次調査区では図のように畦畔は流失し、断続的に残っているにすぎない。南東

側の第7、9次調査区で同じように砂層が厚く堆積しているものの、水田跡が確認できなかったのは、洪水が南東から北西方向に走ったことを物語っていよう。

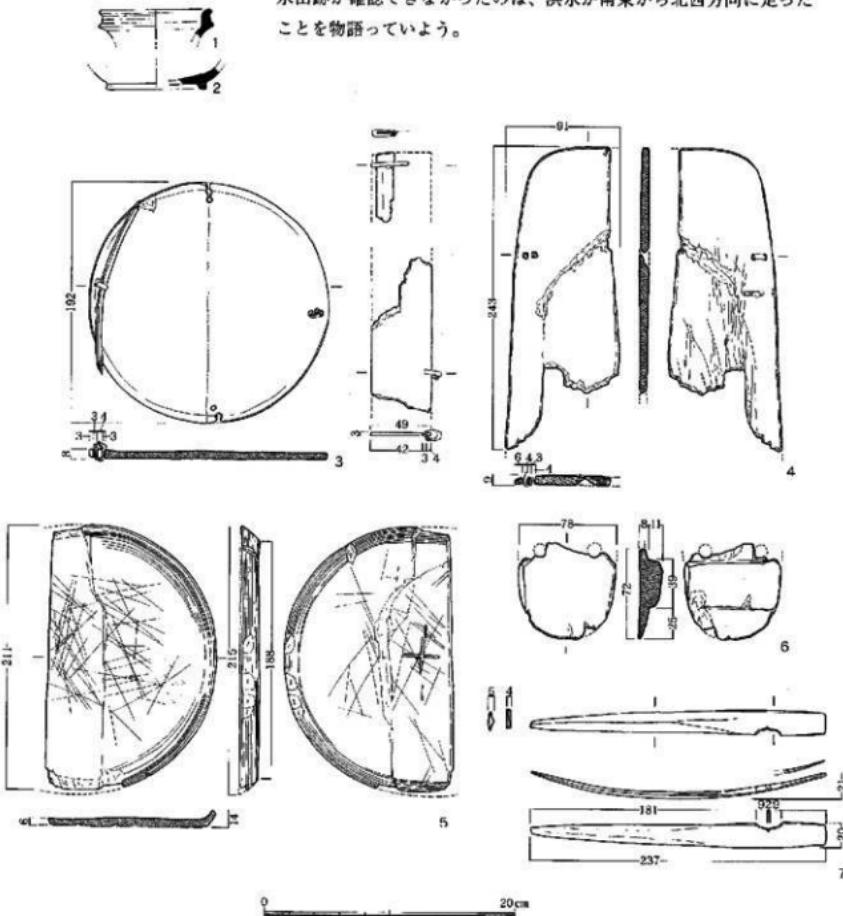


Fig.12 水田跡の遺物 (縮尺1/4)

断続する畦畔から水田区画を復元すると SF052から SF061の10枚を数えることができる。その南北方向は第10次調査区と同じ磁北より $58^{\circ}$ 西に振れている。東西方向は SF060のように湾曲している部分もあるがおおむね直線的で第10次調査区まで通っている。またやや大胆な復元ではあるが、長方形区画の SF061と方形区画 SF051の南北方向での繰り返しはここでも踏襲されており、規格的な制限による水田区画が広範囲に及んでいたのであろう。

**出土遺物** 水田を覆う砂層から土器、木製品が出土した。土器のほとんどは細片で摩耗していることから2点を図示したにすぎない。したがってこれだけで水田跡の時期を決定することはできない。木製品は微細砂層中に含まれていた。保水性が高かったのが幸いしたのだろう。

**土 器** 1は須恵質、口径9.2cm。屈曲する口縁部は回転ナデ調整。2は須恵質の坏身。高台は屈曲部に貼り付けている。

**木製品** 3は円形曲げ物の底板か蓋板。側板が残っており、側板の径よりも底板が大きい。側板と結合する小孔は4か所にある。ほぼ90度に配置しており、底板の内面には針書き線が残っている。4は3と一緒に出土。隅丸長方形曲げ物。側板との結合孔は1か所に残る。裏面には刃傷が付いている。

5は針葉樹の挽物の皿。外底には輦轆に固定した際の爪痕が3か所にあり、これとは別に中央に十字形の圧痕がある。回転削りは細かい。6は広葉樹柾目材を使った下駄。緒孔が2個あることから後歯と分かる。7は薄い板材で透かしのような切り込みがある。用途不明。

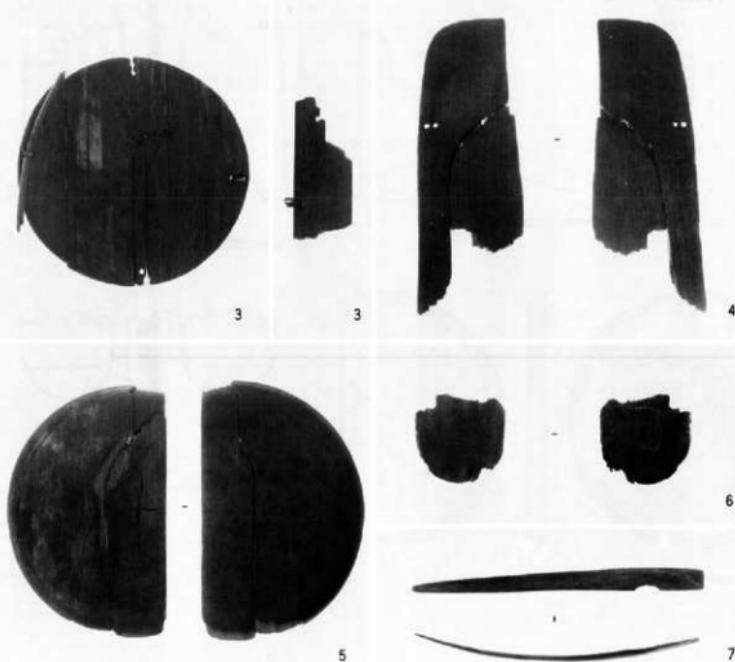


Fig.13 水田跡の遺物 (縮尺1/2)

## 第4節 第II面（弥生時代後期～古墳時代前期）の調査

### 1. 調査概要

第II面水田跡に残された足跡の清掃を丁寧に行ったが、保存状態の良さにも関わらず農作業の様子を示すような歩行は認められなかった。全体撮影、実測、さらに畦畔の断面観察を完了し、パワーシャベルで耕作土を慎重に掘り下げることにした。第10、12次の経験から、第II面の遺構を検出、確認できるのは、パワーシャベルで数cmごとに削り剥ぐこの時点に限られることから、同時並行で検出遺構の平面実測図を作成することにした。遺構の埋め土はわずかに灰色を帯びているが、真上からの判別は困難である。斜光の観察で辛うじて認識できるので、すべての遺構をカバーできたとは思えない。そこで後に古墳時代前期～弥生時代後期と認定した遺構を加え作図した。



Fig.14 第II面検出作業▶

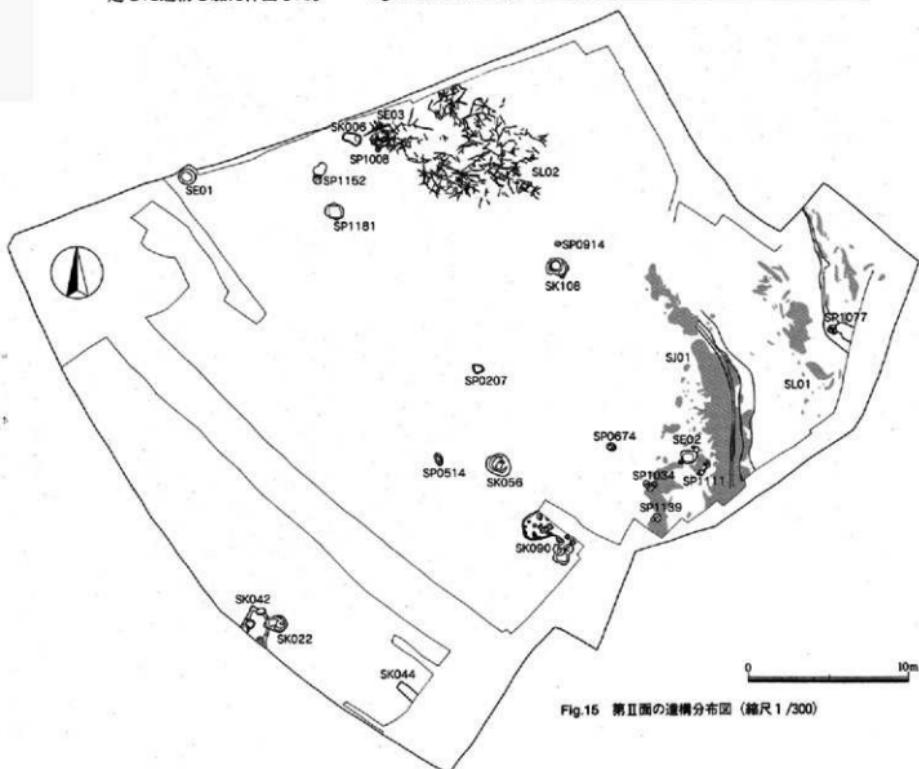


Fig.15 第II面の遺構分布図（縮尺1/300）

## 2. 井戸 (SE)

第1号井戸 SE01 134グリッドに位置する。平面プランは直径102cmの円形。壁は斜めに掘り込まれ、深さ114cmで底に達する。量は多くないが今でも湧水がある。

土器 1・2は布留式系(D系)甕である。先に第10次調査報告書でD系甕の分類・特徴・成形技法などについて述べたが(第10次SE01参照)、この1・2も同様に、直線的な口縁部やなで肩状の胴肩部の形態などからも比惠・那珂・博多遺跡的であると言える。II期新相に当たる。4のC系小型丸底甕は、久住分類I d類・重藤分類甕5式だから西新町4式(久住II C~III A期)以降となろう。5はC系小型器台で、II B期以降に見られる形態(受部IV類)だが、脚部が縦ミガキでB系的である。6の高坏脚部は、脚柱部が中実で縦ミガキということからB系である(D系は中空で横ミガキのもの多い)。石製品 7は楕円形の自然石の両面を敲打している。表裏面とも黒色の炭化物が点々と付着している。8は黒曜石製の打製石鎌。三角形で刃離は粗い。

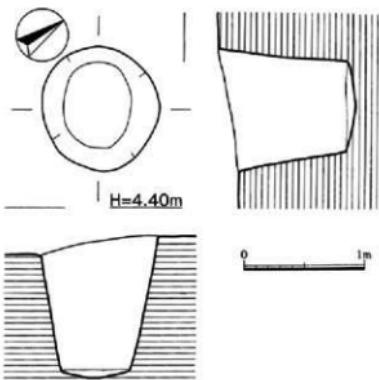


Fig.16 SE01実測図 (縮尺1/40)



Fig.17 SE01



Fig.18 SE01の遺物 (縮尺1/4)

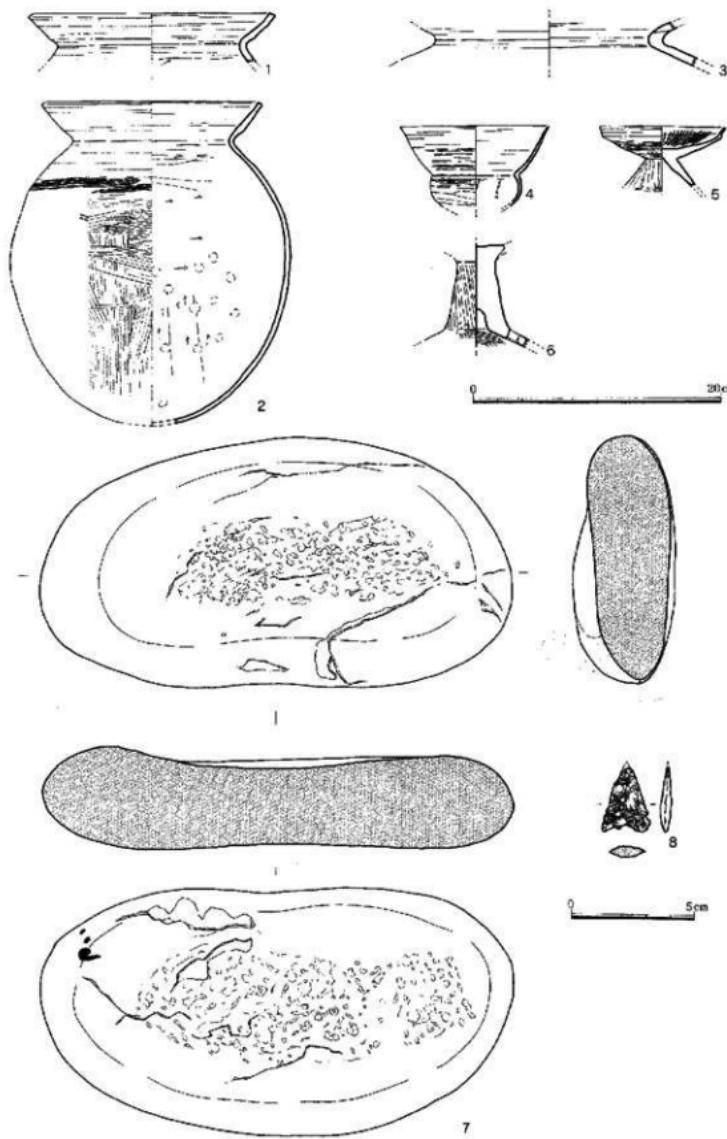


Fig.19 SE01の遺物実測図 (縮尺1/2・1/4)

第2号井戸 SE02 H28グリッドで検出した素掘りの井戸。隅五方形に近い橢円形で、長軸89cm、短軸70cm。井戸としてはきわめて小さい。深さは97cmで灰色粗砂層まで達している。

1は壺は、回転的な肩一口縁の横ナデや肩部横ハケから布留式系である。直線的な（微妙に内湾）口縁部になじめ肩状の副肩部の形態が比恵・那珂、博多遺跡的である。肩にタタキ痕？が、内面底部に指領圧痕が残る。2は手捏ねの鉢。3は土製の匙。4は碧玉製の管玉。

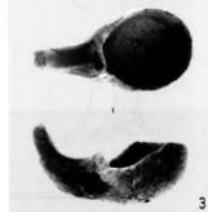


Fig.20 SE02実測図（縮尺1/40）



Fig.21 SE02の遺物（縮尺1/4）

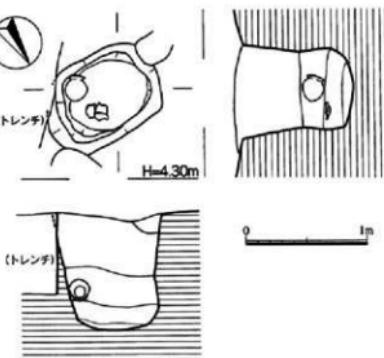
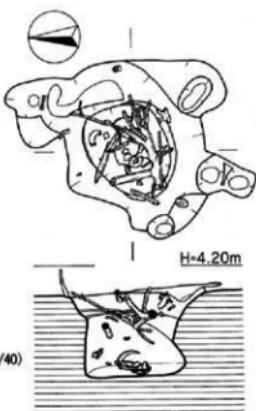


Fig.22 SE02の遺物実測図（縮尺1/4・1/2）

### 第3号井戸 SE03

G33グリッドに位置する、当初は丸太杭が乱雑に投げ込まれた状況であったことから廃棄土壌と思ったが、実測しながら遺物を取り除くと丸太杭が打ち込まれたように立っているものがあり、土器も復元完形になるものが多いなどから井戸封じ的な行為を示すものと

Fig.23  
SE03実測図（縮尺1/40）

判断した。平面プランは長軸153cm、短軸118cmの楕円形の素堀。上面から皿形に傾斜を持って掘り、その上位から直に掘り込んでいる。断面は湧水によってフラスコ状に拡がっている。

1~10は古式土器である。1は作りが雑な伝統的V様式系（B系）壺で、外面調整の太筋タタキは珍しく左上がり、内面調整はハケ目整形後ケズリを施している。2の壺は、外面調整は水平に近い細筋タタキ、内面上半は左上がりケズリ、小平底ぎみの尖底という特徴から庄内式系（C系）技法である。3の壺は、外面調整が肩部回転的横ハケ仕上げ後にヘラ搔波状文、内面ケズリ、口縁部にも回転的横ナデ、と布留式系（D系）技法がみえる。外反気味の口縁だがC系ではない。4の壺も、外面ハケ整形に口縁から肩部まで及ぶ回転的横ナデからD系だろう。5はハケ目の粗細2種がある。タタキも指頭圧痕もなく、底部は平底気味で、在地系（A系）だろうか。6の壺とも壺とも言えぬものは、屈曲部のない頸部、端部は面取りに沈線、外面



Fig.24 SE03

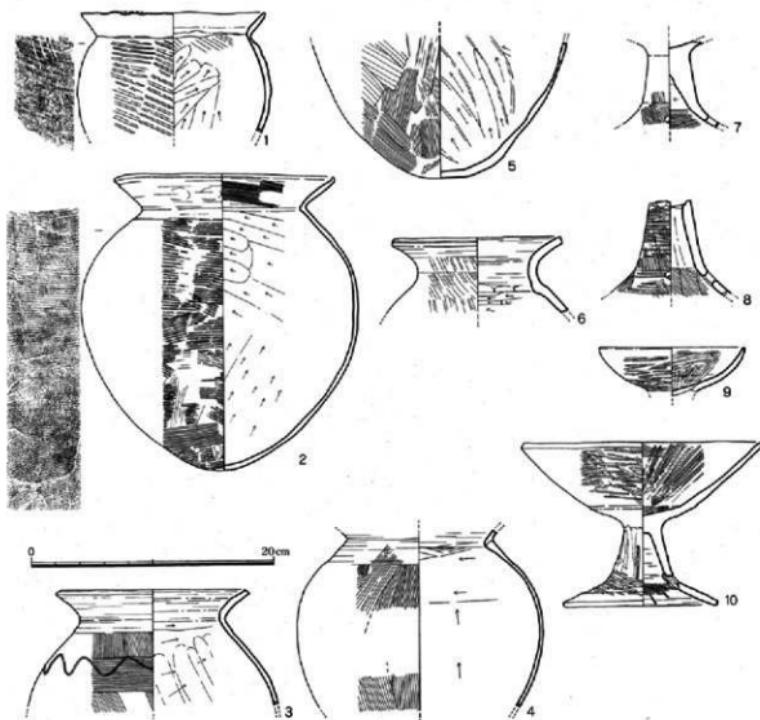


Fig.25 SE03の遺物実測図（縮尺1/4）

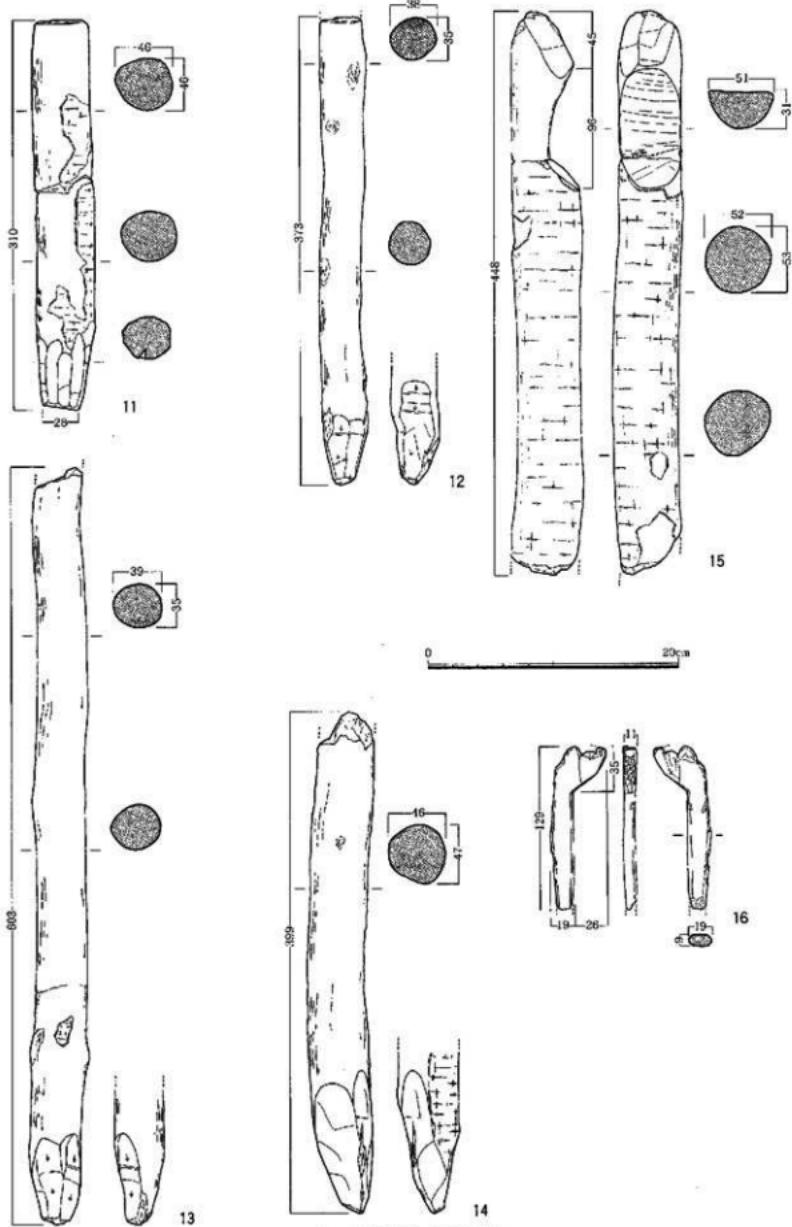


Fig.26 SE03の遺物（縮尺1/4）



2

はまばらなハケ目という特徴からA系か。7の高坏脚部は、脚柱部が中実気味で、据部へかけての屈曲部がながらかであり、ミガキがない、などC・D系とは考えられないでB系である。8の高坏脚部は、脚柱部が中空で長めであり、据部への屈曲部もながらかで、系統は判定できないが、脚柱部を打ち欠いておりフイゴの羽口などに転用された可能性がある。9の坏部は、脚部との接合は充填法であり、内面に草が貼り付いたような変色痕がある。10の高坏は、坏底部が小さく、上半が直線的、などC系と言える。

木製品 11~14は樹皮付き芯持ち材の先端を削り、杭状に加工している。全周を削るものと、13、14のように一方から削るものがある。15は端部の抉りがある。16は全形不明。杓子のような柄があり、加工は丁寧で滑らかな仕上げとなっている。

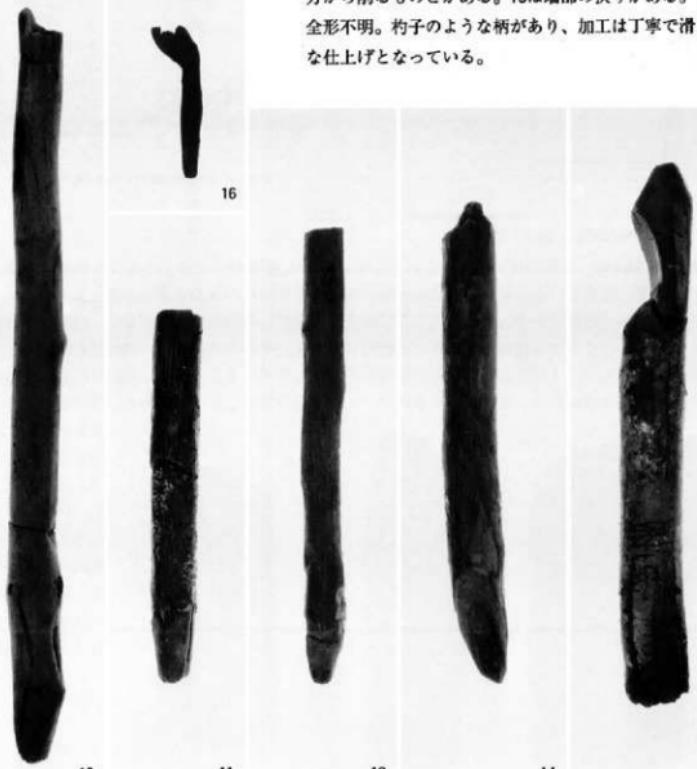


Fig.27 SE03の遺物

### 3. 土壙 (SK)・ピット (SP)

古墳時代の土壙は、発掘区全面に分散している。SK108やSP1034のように祭祀や埋納的な土壙もあり、集落の中でどのような配置、用途があったのか注意される。また、大きめのピットもここに記した。

**第6号土壙 SK006** 隅丸長方形プラン、長軸114cm、短軸65cm、深さ51cm。ほぼ直に掘り込まれ、底面は平坦。1～3は古式土師器である。1は外反する口縁部に端部を丸く收め、やや粗い右上がりリタキ仕上げに接合痕が残る雑さなどから伝統的V様式系（B系）壺と判断した。胴内面はナデだろうが、工具痕らしいものがあり、ナデはそれによるものだろう。2は独特の二重口縁部形態に回転的な横ナデから山陰式壺と判る。3の高坏脚部は脚柱部が中実で、まずB系であろう。脚頂部が僅かに残存し、坏部と脚部の接合は脚頂部凹面付加法だろう。

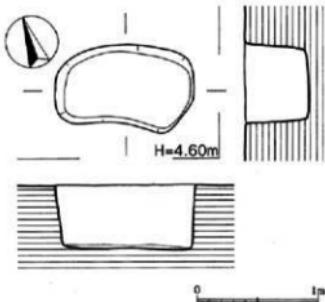


Fig.28 SK006測定図 (縮尺1/30)

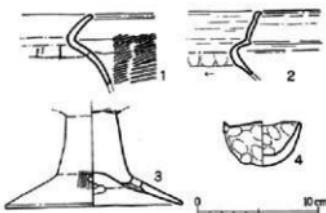


Fig.29 SK006の遺物実測図 (縮尺1/4)

**第15号土壙 SK015** 造構図は示していないが、石器の出土遺物が目立つ。土器は弥生時代後期、古墳時代土師器、須恵器、さらに弥生時代の磨製石斧も含まれ時代の異なる遺物が混在している。

1～5は古式土師器である。1、2の二重口縁壺は、頸部に明確な屈曲部がなく、口縁端部は面取りで、突帯の貼付などから在地系（A系）と判断した。3、4の高坏脚部は、脚柱部が中実で、ミガキ調整も見られない、4は坏部との接合が脚頂部凹面付加法であることから伝統的V様式系（B系）と分かれる。3は焼成前穿孔、4は焼成後穿孔で、4の裾部内面には工具痕がある。5は胎土がやや精良な小型鉢である。

小型丸底壺の粗型  
(久住0類)とさ  
れているものであ  
ろう。6、7は須  
恵器の壺蓋と壺身。  
8、9は磨製石斧。  
10は砂岩の砥石。  
11は1面に敲打痕  
が見られる。用途  
不明。

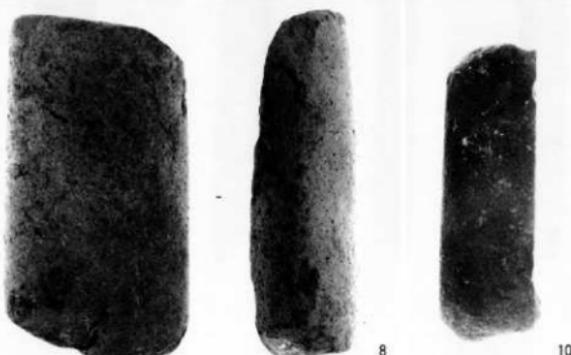


Fig.30 SK015の遺物

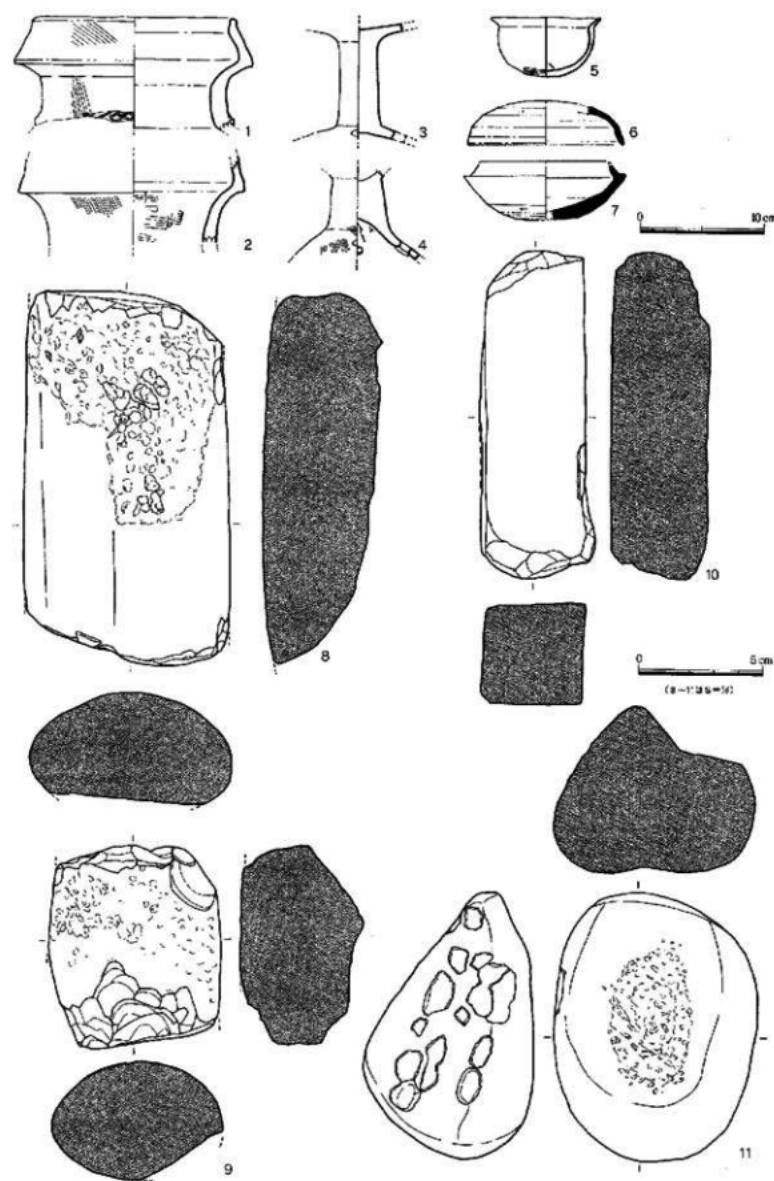
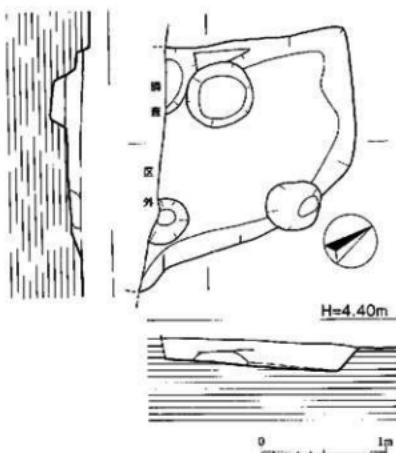
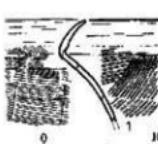


Fig.31 SK015の遺物実測図 (縮尺1/4・1/2)



第42号土壌 SK042 M30グリッドで検出。西側が発掘区外に出ているので全形不明。3個の小ピットが重なっているが先後関係は不明。弥生時代土器片や動物骨が出土。ここでは土師器1点を図示した。

1の壺は、口縁部が外反し先細りになる形態、外面調整は右上りタタキ仕上げ、内面調整は規則的なハ



ケ目調整で接合痕も残り、典型的な伝統的V様式系(B系)技法である。ただB系にしてはタタキ痕が坑内系整のように細かい。

▲ Fig.33 SK042の遺物実測図 (縮尺1/4)

◀ Fig.32 SK042実測図 (縮尺1/30)

第44、82、90号土壌 SK044、SK082、SK090 遺物図は図示していない。1、2はSK44出土の古式土師器である。1の壺口縁は、回転的な横ナデ調整と全体の形から布留式系(D系)で、ナデ肩の形は比恵・那珂、博多遺跡的である。2の小型丸底鉢は、久住分類Ⅲ類・重藤分類3式で、重藤西新町4式(II C~III A期相当)となる。3~7はSK82出土。3は弥生時代中期の壺口縁部。4は古式土師器。摩滅して系統不明。5は鉄製品、図左端は欠損、厚さ0.3cmの板状で岡下端は尖っているが刃部であるかは不明。6は黒曜石製の打製石器。基部はわずかに凹む。7は碧玉製の管玉。径0.91cm、長さ2.97cm。8はSK90出土。D系壺だろうが、胴内下面下半に指頭圧痕はない(欠けている底部付近のみか)。

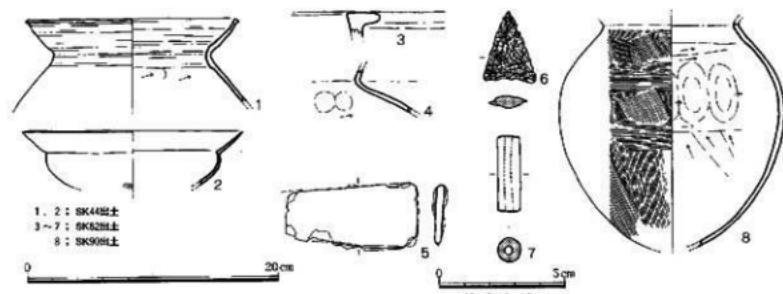


Fig.34 SK044・82・90の遺物実測図 (縮尺1/4・1/2)

第56号土壌 SK056 J30グリッドに位置する。長軸156cm、短軸134cmの楕円形プラン。深さ63cmで断面楕状、遺物は土師器壺、器台や小型高杯が上部で出土。しかも東側に片寄ってまとまっている。

1~3は古式土師器で、どれも伝統的V様式系(B系)技法によるものである。1の壺は、端部が先細りになる外反口縁で、内面に部分的なケズリが見られるが内外面ともナデ仕上げである。肩部には1条の沈線がある。外面はびっしり煤が付着しているが、頸部だけは擦れて剥げたように剥落している。2の高杯は、脚柱部が中実で、脚柱内面は反時計回りのすだれ状ハケ目、口縁端部が丸みを持つ

などの技法的特徴をもつ。ミガキは太く不規則だが密である。3の小型器台も脚内面にすだれ状ハケ目が施されるなど、2に似たB系技法をもつ。接合は脚頂部凹面付加法である。



Fig.36 SK056遺物

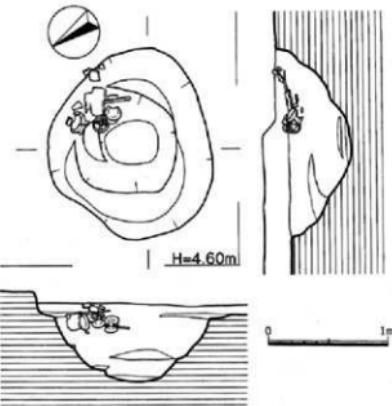


Fig.35 SK056実測図 (縮尺1/30)



Fig.37 SK056遺物実測図 (縮尺1/4)

第108号土壌 SK108 G30グリッドにあり、径230cmの円形土壌であるSK116の東に片寄って掘られている。平面形は短軸97cm、長軸113cmの橢円形。深さは94cmあり、灰色粗砂層まで達している。素掘であるが東側は2段掘りになっており、底は平坦。現在の断面は底部近くで括れているが、これは湧水の影響と思われ、本来は斜めに掘り込まれていたのだろう。すると井戸の可能性もある。

**出土遺物** 遺物には多数の土器や木片が中程から上部にかけて出土し、特に上部に集中している。井戸封じ的な行為の結果と推測している。11点の土師器と木製品1点を図示した。

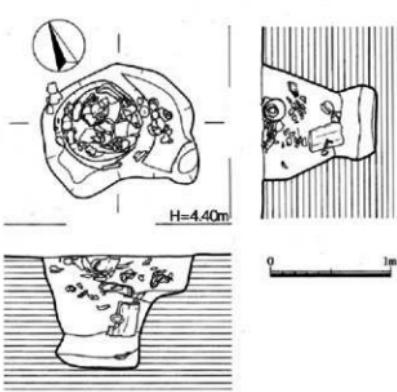


Fig.38 SK108実測図 (縮尺1/30)

1は弥生土器の器台。2~11は古式土師器である。4、5、6の壺は、口縁部の形態や回転的な横ナデ仕上げなどから布留式系（D系）技法である。ともに頸部の締まりが強く、この傾向は時期的に新しいものに見られる。4の頸部横ナデは丁度指1本分の間隔である。7の長頸壺は、頸部の回転的横ナデや肩部の横ハケからD系、あるいは山陰系と思われる。8の胴部は、外面調整が繊筋ミガキ（胴中位より上は密）で橢円形だから庄内式系（C系）長頸壺に似ているが、底部内面にすだれ状螺旋（らせん）ハケ目調整が施され、規則的な内面ハケ目の上に雑なミガキ、と基本はB系技法である。9~11の小型丸底壺・小型丸底鉢は、9が久住分類I b類・重藤壺4式、10が久住II b類・重藤鉢2式、11が久住III類・重藤鉢3式で、9、10が重藤編年の西新町4式前半（久住II C期）、11が西新町4式後半（III A期）になる。9は細密な横ミガキ。11には同じような横ミガキはない。12は針葉樹の細長い板材。3か所に削りで溝が彫られており、その後強く押されたような痕跡がある。用途不明。



Fig.39 SK108上部



Fig.40 SK108下部

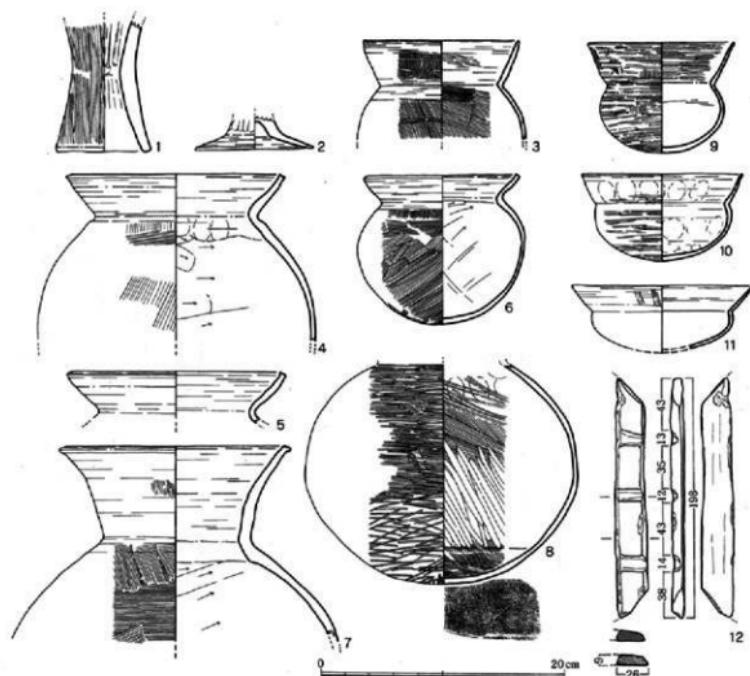


Fig.41 SK108の遺物実測図（縮尺1/30）

**第1034号ピット SP1034 127グリッド**に位置する、土壤や数多くのピットが集中し、一つ一つの輪郭や切り合いなどが明確でなく、全体を掘り下げながら遺構を区別する作業を行った。直径1m前後の不整円形が3個連なっており、その中央の土壤に3個体の木製農具が折り重なって出土した。その間にはたくさんの小枝を円形座布団のようにして挟み込んでいる。折り方も意図的であることから祭祀行為の埋納と推定した。第12次調査SP0436やSP0046の木製農具の出土状況もよく類似している。1は曲柄平鋤で、柄につながる頭部は故意に削られ原形を留めていない。折った二片を接合して実測したが、現在長、身幅などの測定値は図に示した。肩部は両側に三角形状に張り出しナスピ形をしている。刃部側は細かな削りで薄く尖っているが刃部としては鋭い。1、2の平鋤が特異なのは、無理に折っていることである。身のほう中央の表裏面に横方向に強く刃物を叩き付けて溝状にし、二つ折りに切断している。機能を失った3本の農具の間にクッショクを挟むといいかにも丁重な埋納行為を想像させる一連の行為の中で、鋤の機能、生命を絶つということが特に重要視されていたために、打撃で傷を付けることを繰り返し、時間をかける必要があったのだろう。この埋納行為に参加した者たちとの共同行為として確認し合うため、あるいは個人的な行為であったとしても、自分自身に対する確認行為であったことは間違いかろう。2も同じように身に削り痕が明瞭に残っている。刃部を欠いているが実際の耕作が原因か判断できない。2にはナスピ形の加工はない。3は横鋤で隆起部のある裏面を示している。円形の柄穴より上部が横に割れて失われている。この割れ口には1、2のような折るために傷はないが、埋納時にはすでに割れ

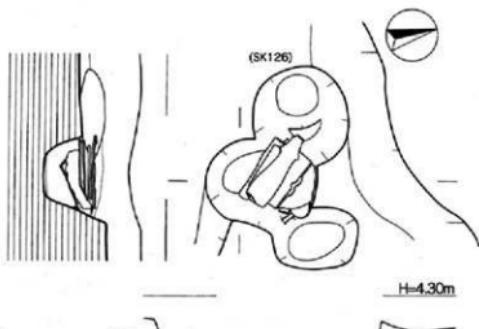


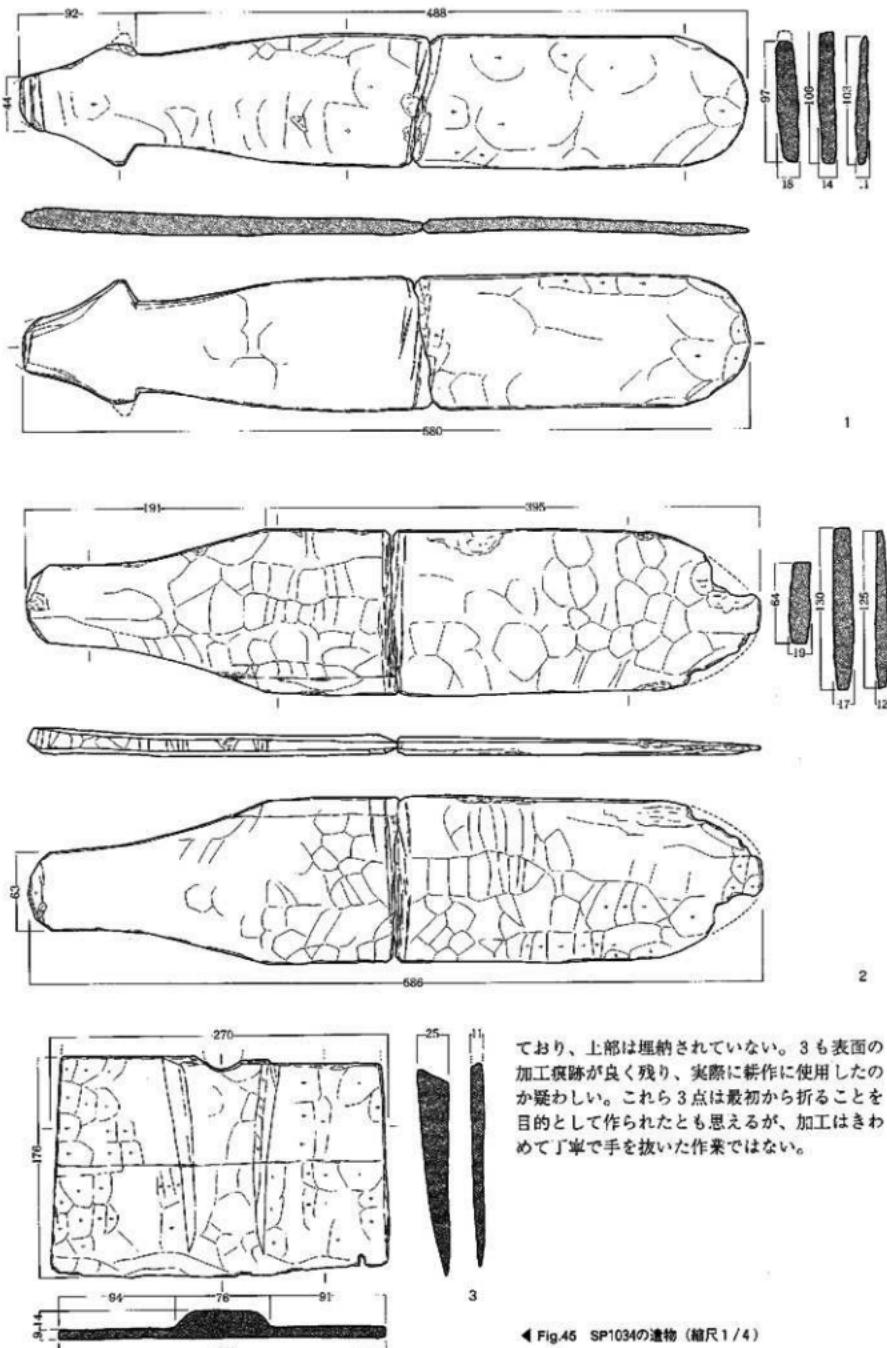
Fig.42 SP1034実測図 (縮尺1/20)



Fig.43 SP1034



Fig.44 SP1034



ており、上部は埋納されていない。3も表面の加工痕跡が良く残り、実際に製作に使用したのか疑わしい。これら3点は最初から折ることを目的として作られたとも思えるが、加工はきわめて丁寧で手を抜いた出来ではない。

◀ Fig.45 SP1034の遺物 (縮尺1/4)

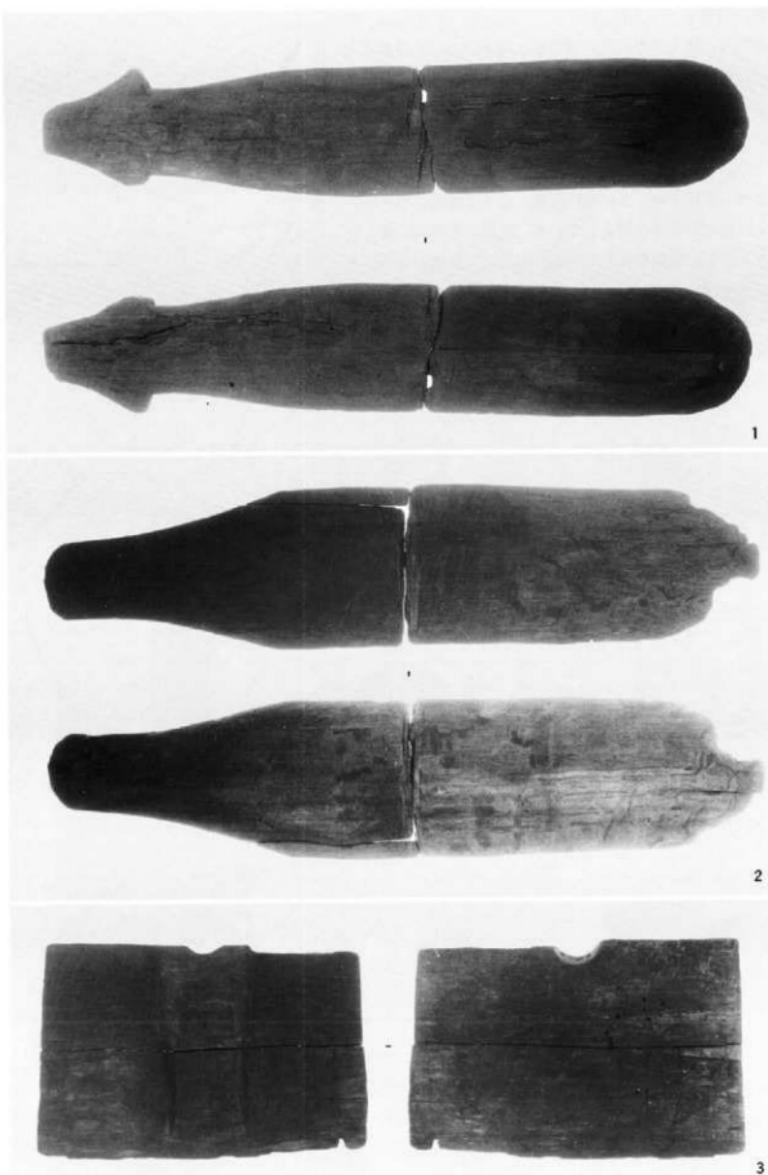


Fig.46 SP1034の遺物

**第1181号ピット SP1181** H33グリッド。長軸96cm、短軸76cmの隅九方形に近い楕円形。深さは69cmを測る。上部に棒状の木材が数本あり、底部で壺が出土した。小さな土壙にもかかわらず大きめの破片が多い。突帯文土器から土師器まで混在している。1は横条痕のある壺体部下半。2は如意形口縁の壺で、口径22.6cm。体部の沈線は浅いが幅広い。3は壺口縁部。水平で端部に刻み目。4は椀だが特殊な形をしている。底部に十字状に溝を作り、さらに線刻を施している。内面に工具痕がある。5はSP1181出土の壺で、口縁～肩部にかけての回転的横ナデや肩部横ハケから布留式系である。内渦口縁とナデ肩形状から比恵・那珂、博多遺跡的である。6は土製品で小判状の一端に小孔があり、漁具か。

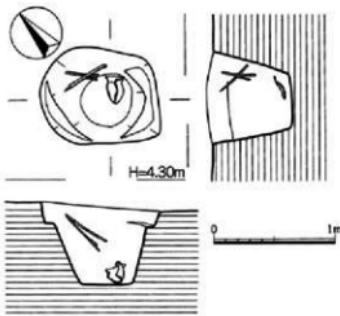


Fig.47 SP1181実測図（縮尺1/30）

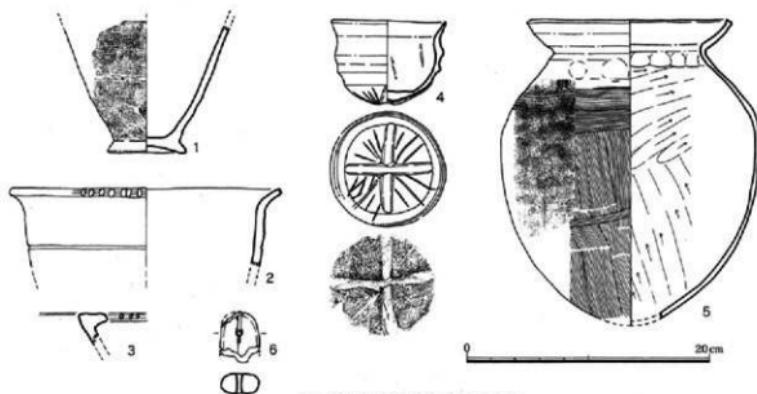


Fig.48 SP1181の遺物（縮尺1/4）

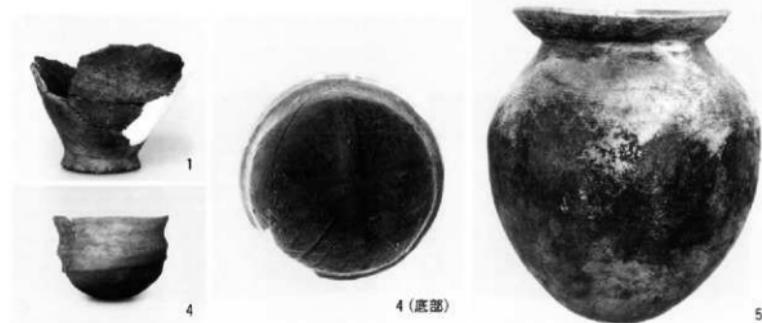


Fig.49 SP1181の遺物（縮尺1/4）

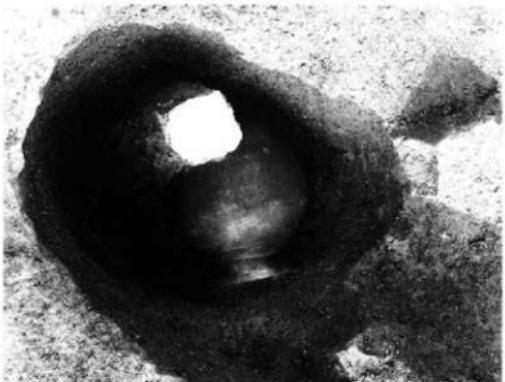


Fig.50 SP1008遺構写真

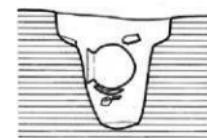
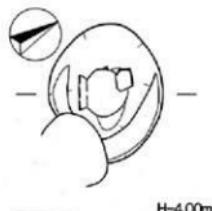


Fig.51 SP1008実測図（縮尺1/30）

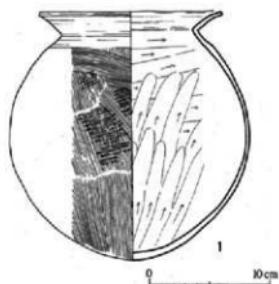


Fig.52 SP1008の遺物（縮尺1/4）



Fig.53 SP1008の遺物

## 第1008号ピット SP1008

楕円形の小土壤で長軸114cm、短軸93cm、深さ93cm。中程から土師器甕が横になって出土した。1の甕は、外反口縁で太い右上がりタタキ成形で基本成形技法はB系だが、口縁端部は面取り、外面ハケ目仕上げ、内面ケズリでD系の影響もある。

**ピットの遺物** 1の甕はし字形口縁で口径35.8cm。2は手捏ねの鉢。3～5は古式土師器である。3の破片は、高坏脚据部や低脚付器種の脚据部などと考えられるが、おそらく前者であろう。4の破片は、外面にハケ目やミガキ調整が見られ、胎土も精良で器壁も薄く、胴部復元径も13cm程度であることから精製小型壺類の胴部であろう。5の高坏部は、内面底部に左回転すだれ状ハケ目、ミガキは見えないなどからB系であろうか。

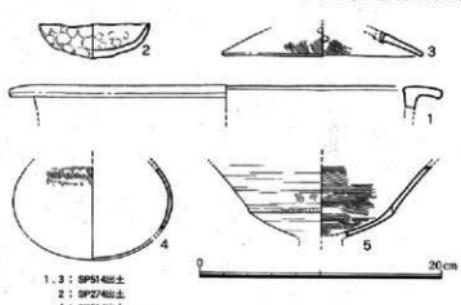


Fig.54 ピットの遺物（縮尺1/4）



Fig.55 SJ01上面実測図（縮尺1/80）

い。むしろ半圓的に散布しているように見える。しかし微高地に分布する遺構、例えば竪穴住居跡が少なくとも50cm以上は削平されていることからすると、当時は相当盛り上がった微高地と言うことができる。このように土器窪を微高地の境界とすると、第10次調査区の土器窪は西側に別の生活領域が対峙していたことになり、実際に第10次、12次調査によって竪穴住居跡や土壙などの生活遺構が見つかった。そこで発掘作業時は第7次、9次調査区を東地点と呼び、第10次、12次調査区を西地点と呼び分け、西地区微高地の規模を確かめることを第13次調査の発掘目的の一つとした。

第13次調査区は、第9次調査区の北西側に位置し、35mの距離がある。第10次調査区の上器窪の方に向かうと、残念ながらこの間を抜けてしまい確認できないことも考えられた。G28グリッドで南北方向の小規模な土器窪が見つかったことから、グリッド28列より南側へ約120m<sup>2</sup>を拡張したところ、その延長部が現れた。特に注目されたのはこの土器窪の東側に自然流路があり、その岸に沿って形成されていることである。この流路は南からわずかに湾曲しながら北に延び発掘区外に出ている。粗砂層が堆積し、流れに平行して丸太材が並び、その間から木製品が出土した。出土遺物や砂層下に弥生時代中期の土壙SK114があることから砂層の堆積は古墳時代前後と判断でき、土器窪の時期と差はない。第10次調査区とも35mの距離があり、上器窪が連続するか確かめようがないが、絶えず流水があったとは思えないものの、第9次調査区との間に窪地があったことは確実であろう。西地区もまた独立する微高地ということになり、その面積は東地区の約3,000m<sup>2</sup>を超す面積だったのだろう。



Fig.56 SJ01下面実測図 (縮尺1/80)



Fig.57 SJ01上面（南東から）



Fig.58 SL01（南東から）



Fig.59 SJ01の検出作業

**出土遺物** 自然流路であることから遺物量は多くない。しかも土器は小破片で摩耗し、土器9点と石製品9点、木製品1点の図示に止まった。

**土 器** 1～5は古式土師器である。1の壺は、太筋タクキが伝統的V様式系（B系）的だが、左上がありで、口縁部も直線的で端部は微妙につまみ上げ、内面はケズリ、と庄内式系（C系）の特徴が見られる。2の二重口縁は、独特の形態から山陰系器種だろう。1も2も推定復元口径は16cm程とやや小型である。3の二重口縁壺は、系統は判定できないが、二次口縁部は一次口縁部成形後それに付け加える技法をとっており、その接合部分には粘土同士の接着を強めるためかハケ目が施されている。5の鉢は、底部外面に大小の圧痕や余分な粘土が付着している。大半はハケ目仕上げでミガキは見られない。6～8はミニチュア土器である。6は高杯形土製品、7は脚形土製品としたが、ともに小型器台などの脚部とも考えられる。いずれも胎土が精良である。中心に

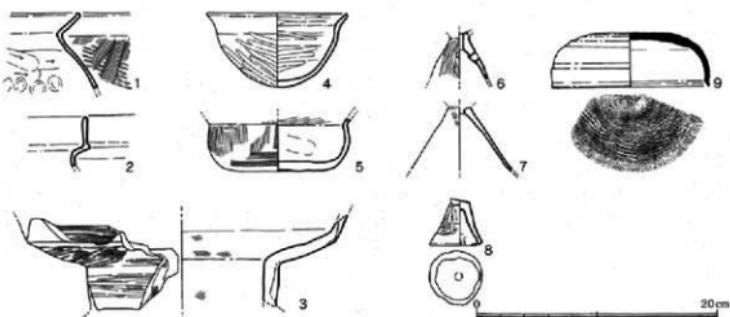


Fig.60 SL01の遺物実測図（縮尺1/4）

径6～7mmの孔が通っている。8は支脚のミニチュアである。9は須恵器の壺蓋で、外面上半には回転ヘラ削り、その内面には回転ナデの後にタクキ？痕がある。

石製品 10は黒曜石製の打製石鏃で凹基無茎式。押圧剥離は雜。11は同じように黒曜石製で一端を欠いている。細身の作りで用途不明。12は磨製石鏃。身は断面菱形で鈍いが鏃がある。茎部を失しているが、鏃は茎まで通っていたのだろう。関は身に対して直角ではなく斜めに加工している。13は石剣の切っ先部の形状をしているが、自然面を残しており側縁の刃部も鋭くない。14は全面が研磨され刃部があることから磨製石剣の切っ先部とした。鏃はなく、身断面は扁平な板状をなす。15はノミ状の片刃石斧。断面は細長い台形状をし、全面の加工は丁寧ではない。16は扁平片刃石斧。頭部が折れている。前後の正面、左右の側面、さらに刃部とも研磨痕がよく残っている。17は薄く指円形の自然石を使った砥石。18は黒曜石の剥片、自然面を残している。

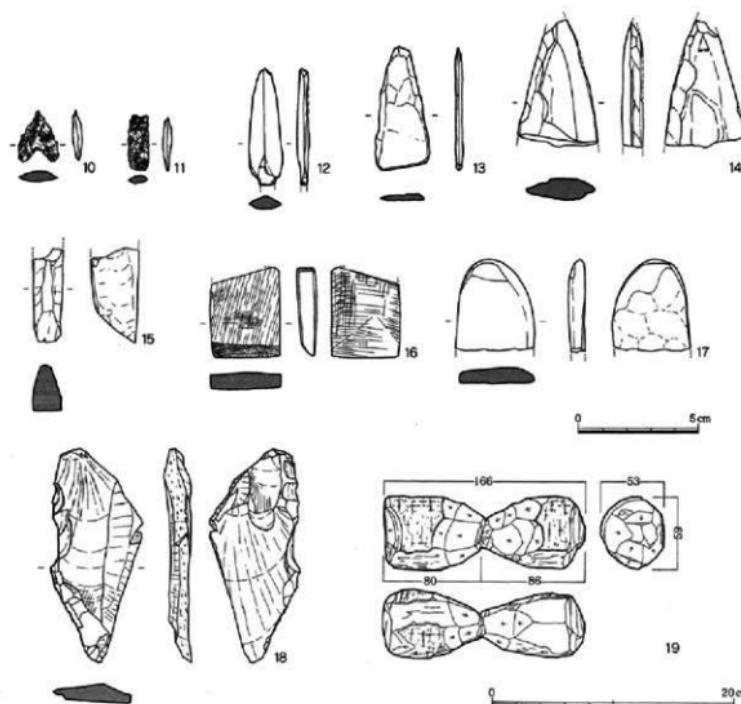
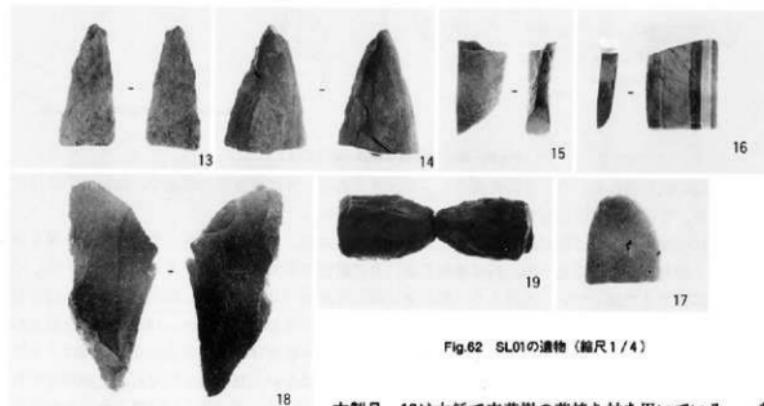


Fig.61 SL01の遺物実測図（縮尺1/4）



木製品 19は木鍤で広葉樹の芯持ち材を用いている。一部に樹皮が残り、両端の切断痕は顕著である。

## 5. 土器窯 (SJ)

**第1号土器窯 SJ01** この土器窯の土器群は久住ⅡB期のものが主体でⅡC期まで及び、若干ⅡA期以前のものが含まれている。技術系統からみても、B系統が最も多いが他のA・C・D系統も多数みられる。上器群のこのようなあり方を第10・12次土器窯と比較すると、まず第10次土器窯が上下2面に分かれ、時期幅が弥生時代後期後半～ⅡB期（下面：弥生時代後期後半～ⅠB期、上面：ⅠB～ⅡB期）までと長いに対し、第12次はⅡA～ⅡB期であり第13次と同様に時期幅が短い。また第10次はB系、次いでA系が多くを占めるに対し、第12・13次ではB系に次いでC・D系も多く見られるという状況である。第7・9次の東地点にも微高地を巡る溝状遺構から大量の土器が出上しているが、これらはB系をはじめ、C・D系やその他の外来系土器が多く見られるのが特徴である。出土土器からこの時期は久住Ⅱ期と考えられ、第10・12・13次土器窯と同時併存もしている。これらを総合的に

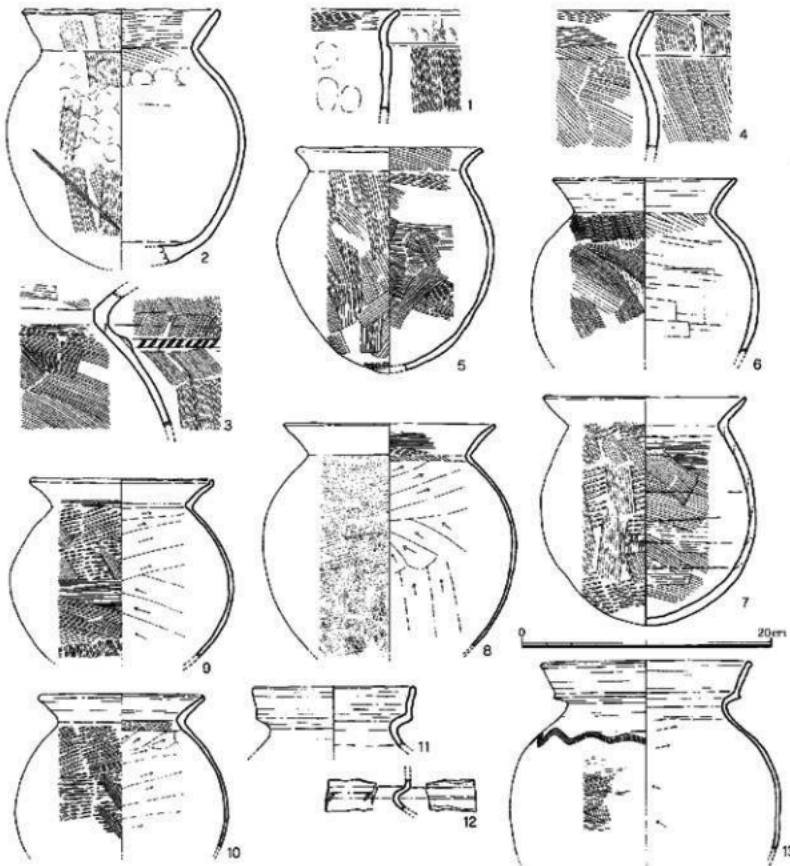


Fig.63 SJ01の遺物 (縮尺1/4)

考えると、C・D系が少ない第10次土器窓とC・D系が多い第12・13次土器窓に第7・9次溝状遺構、という2つの傾向が見られる。第10次の方は上下2面から成り、古い時期から存在しており、一方第12・13次の方はその傾向から東地点との関連がうかがわれる。C・D系は比恵・那珂・博多などの臨海大集落でI期以降成立するものだが、仮に土器窓から集団の存在を想定すると、古くから西地点にA・B系技法を持つ集団が存在する所に、II期になって東地点にC・D系技法を持つ集団が出現し、西地点にもC・D系技法を持つ集団が出現しその影響が見られるようになる、という状況が考えられるのではないか。このように考えると第13次土器窓は第10・12次とは別個の独立したものである可能性がある。

出土土器の中で特筆すべき特徴を持つものを紹介しておく。2-89は古式土器窓である。3、4は口縁端部は面取りで立ち上がりが高く、内外面はハケ目仕上げで長脚気味などA系技法だが、時期が新しいものには外面タタキで器高に対し頸部径の小さいものが見られる。5は器形の歪みが目立ち、内外面のハケ目も粗く雑でA系である。底部が尖底気味の丸底か。6も△系窓だが、頸部が締まり、

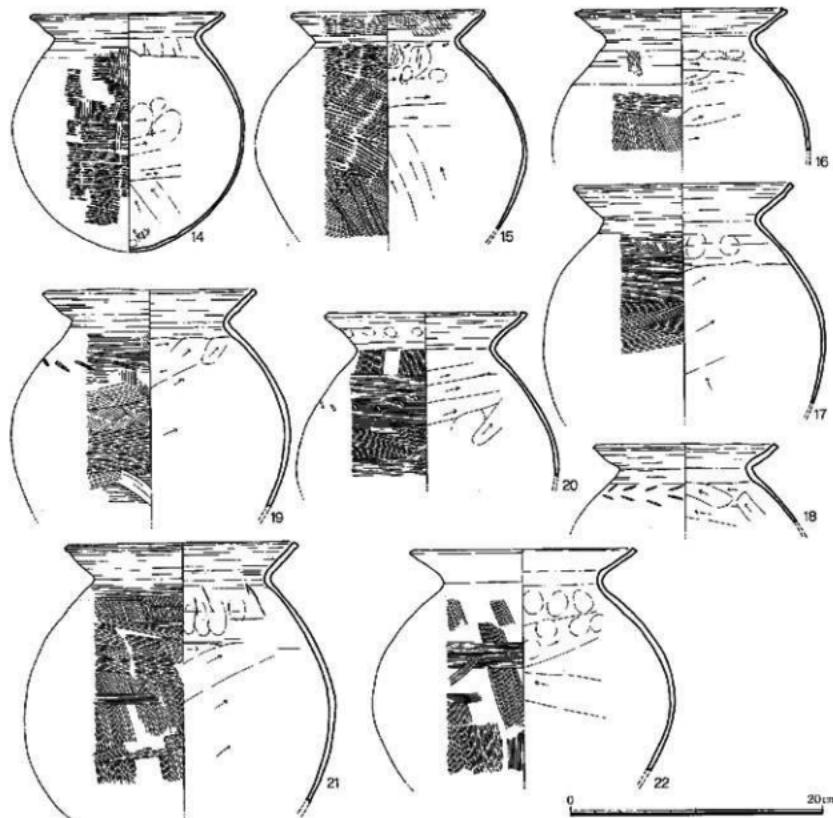


Fig.64 SJ01の遺物 (縮尺1/4)

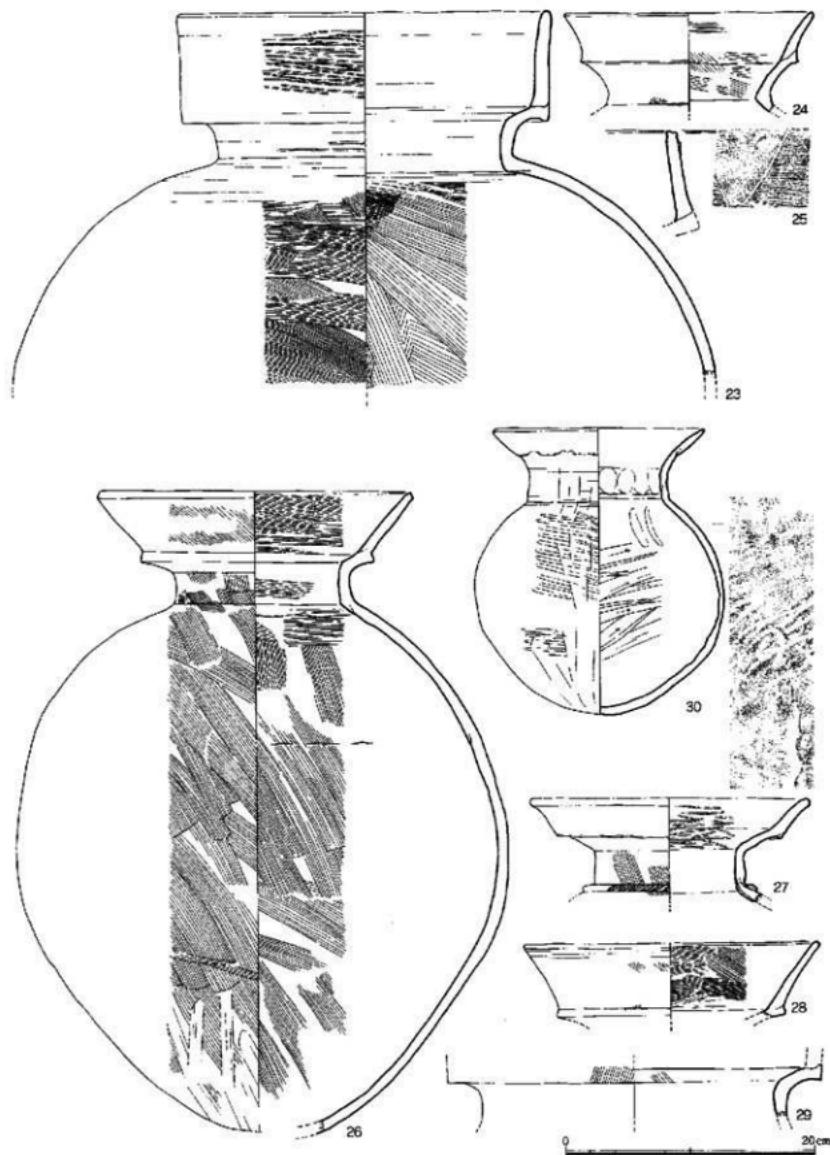


Fig.65 SJ01の遺物 (縮尺1/4)



7

30



26

Fig.66 SJ01の遺物 (縮尺1/4)

頸部～口縁部に横ナデが施され、C・D系の影響が見られる。7の壺は、外面が右上がりの太筋タキ、内面は規則的なハケ目に明瞭な接合痕、口縁端部は先細り形態、底部も微妙に突出、などB系の特徴が確認できる。8～10の壺は、外面に右上がりの太筋タキ、内面の頸部付近にハケ目成形が残るなど基本成形技法はB系だが、内面に丁寧な削りを施し、口縁端部をやや摘まみ上げた形になるなどC・D系技法の強い影響が見られる。13の二重口縁壺は、独特な口縁部形と口縁～肩部にかけての回転的諸調整から山陰系である。成形技法はD系と同じ。14、15の壺は、外面がB系壺に比べて細密なタキが水平～左上がり方向で、内面が削りと典型的なC系技法である。14は底部内面に指頭圧痕が残り、器厚が極めて

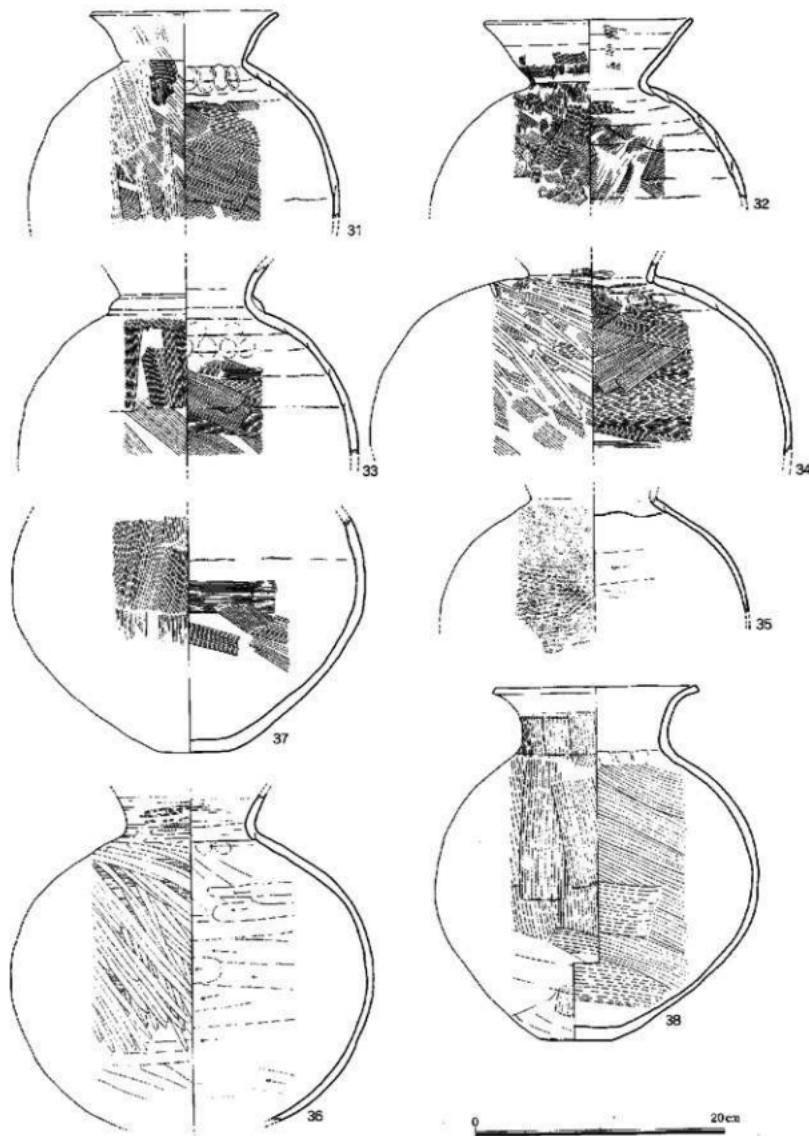


Fig.67 SJ01の遺物 (縮尺1/4)

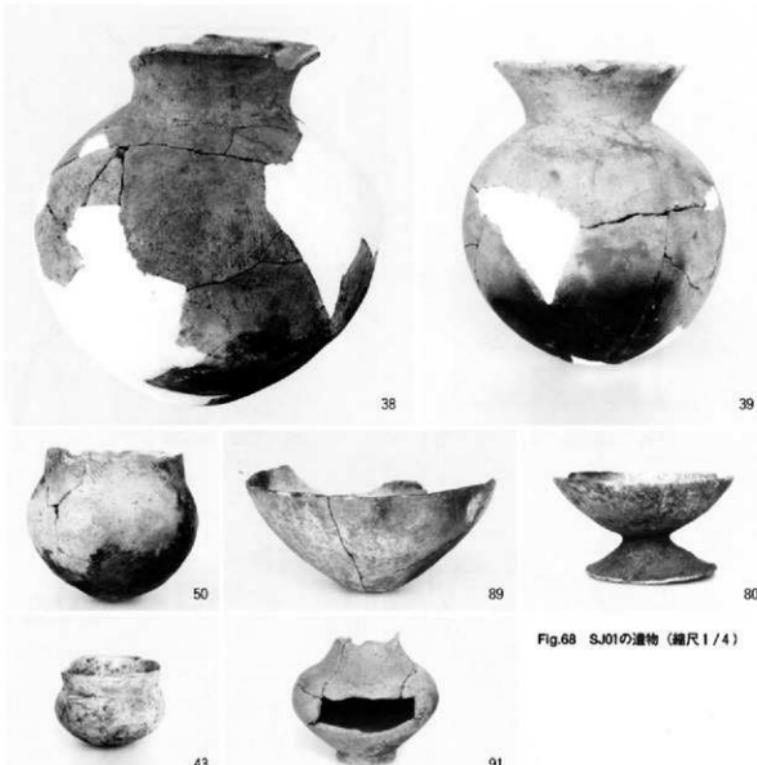


Fig.68 SJ01の遺物 (縮尺1/4)

薄く、15は頸部内面に爪痕のようなものが一周する。16~22の壺は、外面がハケ目整形後胴肩部に横方向のハケ目やさらに列点文を施すなどD系である。どれもタタキ痕はない。20、22は口縁が外反気味だがC系にはならない。23の大型二重口縁壺は、頸部~二次口縁部の屈曲がはっきりしており、口縁端部を丸くおさめる。外面はタタキ痕はないが、内面とともに丁寧なハケ目仕上げ、口縁は雑なナデ、などの特徴からB系。他の24~29も同じ特徴からB系二重口縁壺である。26はハケ目とともに削りに近いナデを施しており、丸底化調整を示すものであろう。30の壺も、外面が粗い太筋タタキ、明確に残る接合痕、先細りの口縁端部からB系といえる。胴部が少し歪んでおり、内面の粗い削りは棒の先端やヘラ状工具の角、もしくは指先で削ったような痕跡である。31~36の壺は、内面に接合痕が明確に残り、頸部は直線的あるいは外反的で端部が丸く取まる、頸部の締まりが強い、などの特徴からB系である。一般的なB系壺は34、36のように外面調整にミガキを用いる。35は成形時のタタキが見られる。37、38の壺は、B系器種に見られる底部成形時の接合痕が見られず、外面ミガキもなく、頸部は屈曲部がなく端部を面取りする、などA系技法が見られる。40~46は精製小型器種の小型丸底壺や小型丸底鉢であり、このような2器種に分化していくのがII A期以降である。久住・重藤両編年で

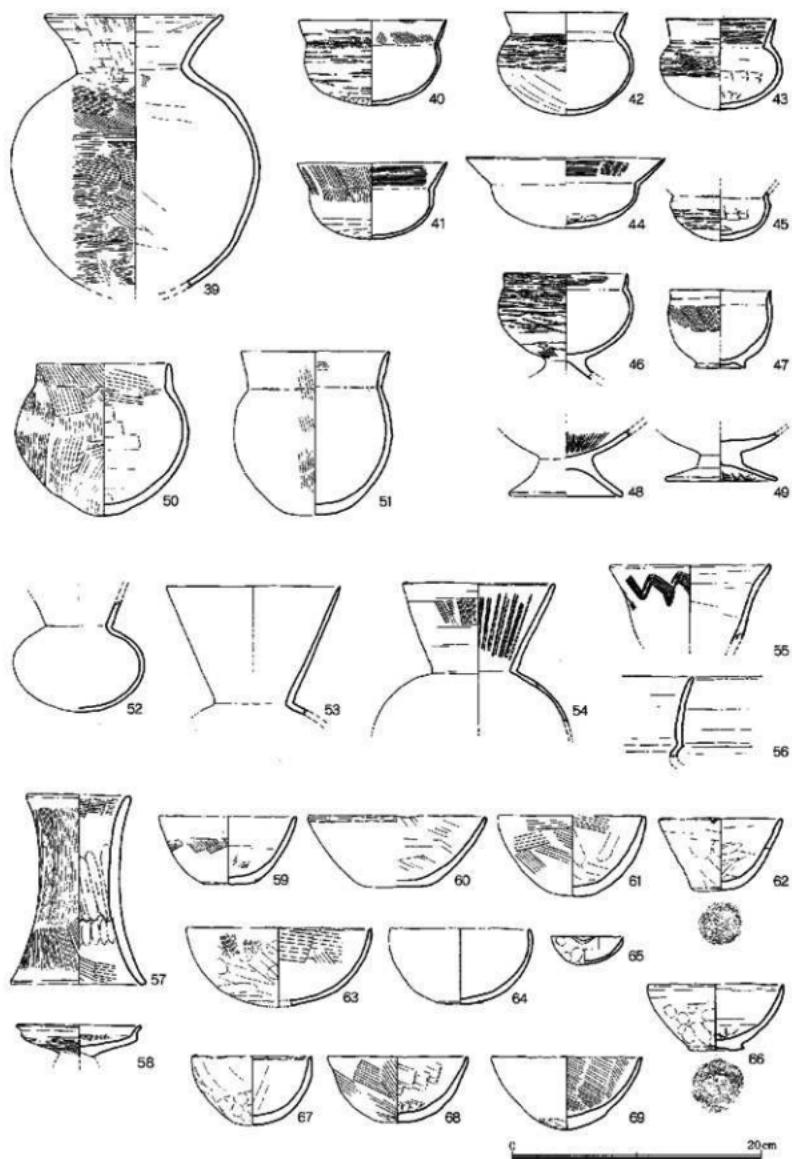


Fig.69 SJ01の遺物 (縮尺1/4)

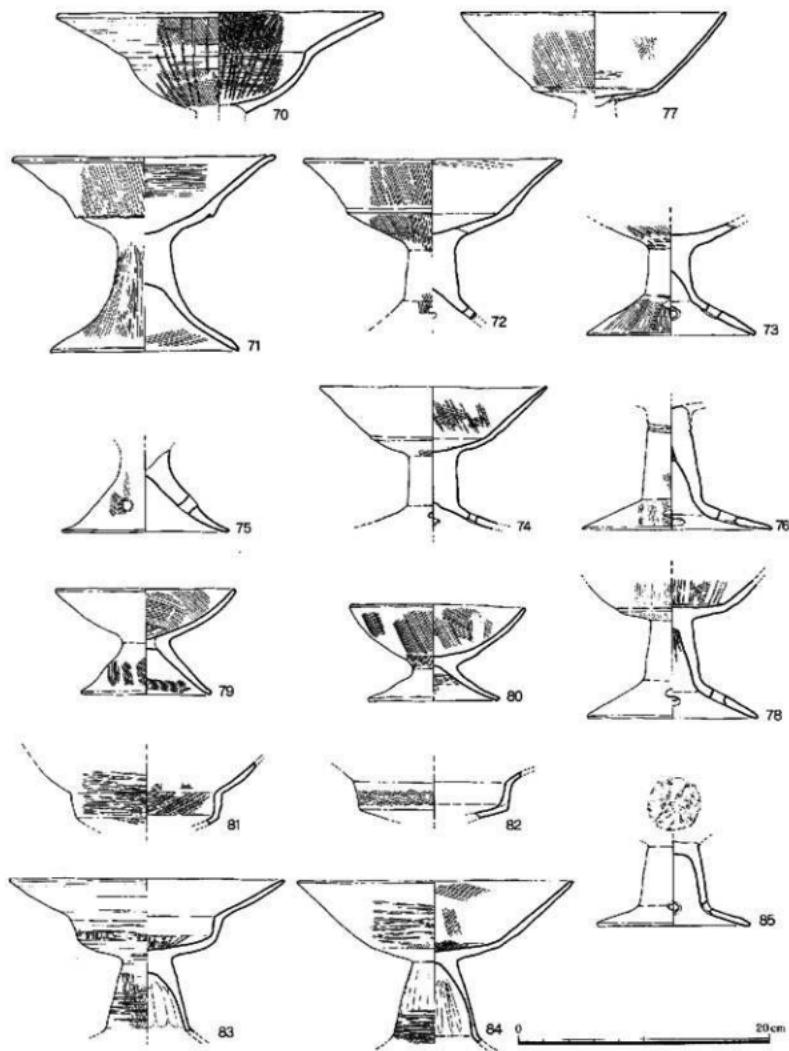


Fig.70 SJ01の遺物（縮尺1/4）

言うと、40、41が久住II b類・重藤壺3式、42、43が久住I c類・重藤壺2式、44が久住III類・重藤鉢3式、45が久住I d類・重藤壺5式、46が久住0類・重藤鉢1式で、時期比定は40~43、46が重藤西新町3式後半（久住II A~II B期相当）、44、45が西新町4式（II C~III A期相当）となる。44は底部内面に指彫压痕が見られる。46は低脚付きである。48、49の低脚付器種は、49については脚内面のすだれ状ハケ日調整技法からB系といえる。50はII期になって見られる、46のような器種（久住0類）がやや大型化して短い単口縁の丸底壺となった可能性がある。52~56の長頸壺はどれも大半はナデ仕上げで、54、56の長頸部のみが横ナデ調整である。また54には暗文風のミガキが、55には長頸部に櫛描波状文が施されている。56はその器形と指凹凸のある回転横横ナデ調整から山陰系と分かるが、他は細密な横ミガキなども見られず、畿内系としか言えない。58はC系小型器台で、II B期以降に見られる形状（受部IV類）である。59~69の碗は、元々編年や分類の難しい器種だが、技術系統は68、69については内面に工具ナデ・すだれ状ハケ日がらせん形に施されることからB系と分かる。他の特徴としては、59、61、64の底部が薄い粘土を貼付けたようになっており、62の底部外面には草の痕跡らしきものがある。66の底部は蛇の目高台である。70~76の高杯は、杯部の上半と下半がはっきりと分かれており、ほとんどが脚柱部は中実で、概して器壁が厚くB系技法である。これらを見ても分かるように、B系高杯は他の器種同様に変異が大きく時期比定ができるものである。70は杯部の内外面に暗文風のミガキがあり、形状もA系高杯に似ていることから、それとの折衷器種ではないかとも

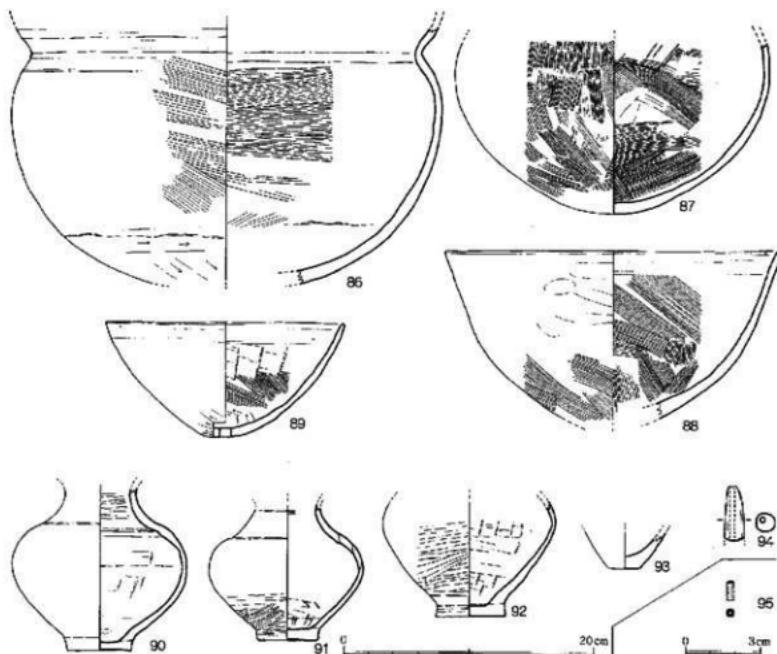


Fig.71 SJ01の遺物 (縮尺1/4・1/2)

言われる形式である。73は坏部外面はミガキ調整だが他の部分には見られず、脚部との屈曲部に工具痕がある。75は脚柱部との接合面が残っており中実だと分かる。形状は71の脚部に似ている。76は脚柱部内面にシボリ痕が見られ、坏部との屈曲部付近に沈線状のものが3分の2周している。77、78は、坏部上半が薄くて直線的で、坏部底部が水平に近く、脚柱部は中空で裾部へと屈曲してハ字形に開くなどの特徴からC系技法である。ただC系の外面調整は丁寧なナデあるいはミガキだが、77などは外面が雑で、接合も凸面付加法がほとんどなのに対し充填法と思われる。79、80の低脚高坏は、79が坏部内面に左回りのすだれ状ハケ目、80も低脚部内面にすだれ状ハケ目、が施されるなどB系技法である。79は坏部と脚部の間を充填した後、放射状にハケ目を施している。83の有段高坏は、丸みをもった坏部に、比較的短くて太く中膨らみの脚柱部、ナデとミガキによる仕上げなどの技法からD系であり、同様の特徴から84、85もD系といえる。85はD系の接合法である脚頂部凸面付加法で、接合時のタタキ痕が残っている。86の大型鉢は、内外面ともハケ目仕上げだが、削下半に接合痕が見られ、それ以下が削り調整と整形法が異なっているので、ここが成形段階の1つとなるか。87の鉢は、割れ部分がほぼ同じ高さで揃い、断面も比較的平滑であるが、これは打欠いたためか粘土紐接合部できれいに割れたためであろう。蓋として用いた可能性がある。88の鉢はB系的な整形であり、B系器種に見られる有孔鉢の可能性がある。90~92は、厚い円盤貼り付けの底部に球形胴、頭部と胴部の境に一条の沈線、その内面は粘土接合による段が見られる、外面は丁寧なハラ磨き調整、などの特徴から弥生時代前期の小壺である。これらは器形も胎土もよく似ている。

**土製品** 90は土錘。一端が欠けているので全長は不明。管状で残っている端部は細くなっている。穴は中心からずれており、丁寧な作りではない。

**管 玉** 91は土器窓の下層で出土した。直径3.05mm。長さ7.15mmの小さな碧玉製の管玉。両端は平行していないが丁寧な研磨を施している。

**石製品** 1、2は石斧。1は身の敲打痕や刃部の加工などから石斧としたが、身の断面は厚みのある楕円形である。図裏面は欠けていることもあり、頭部が尖り氣味で未製品にしてはいびつな形状となっている。長さ15.20cm、重さは900gある。2は玄武岩製の石斧で刃部と頭部の両端が折れている。断面は楕円形で厚みがない。全

面が研磨され、敲打痕は残っていない。3は円形で厚さ5.4cmの自然石を使った磨り石。しかし表面の大半が剥離し、あばた状になっている。

4~6は砥石。4は砂岩製。断面5角形で各面とも研ぎ面として使用している。5は砂岩製。研面は極端に凹んでいるが元は方柱状だったのだろう。6は長さ24.7cmの大型品で砂岩製。両端が撥形に開き、表裏の研ぎ面とも凹み、よく使用している。

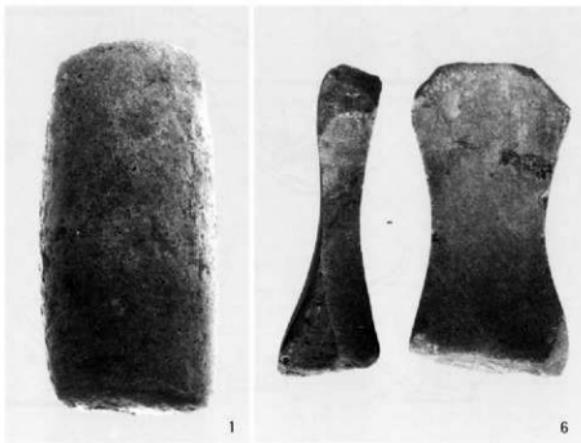


Fig.72a SJ01の遺物

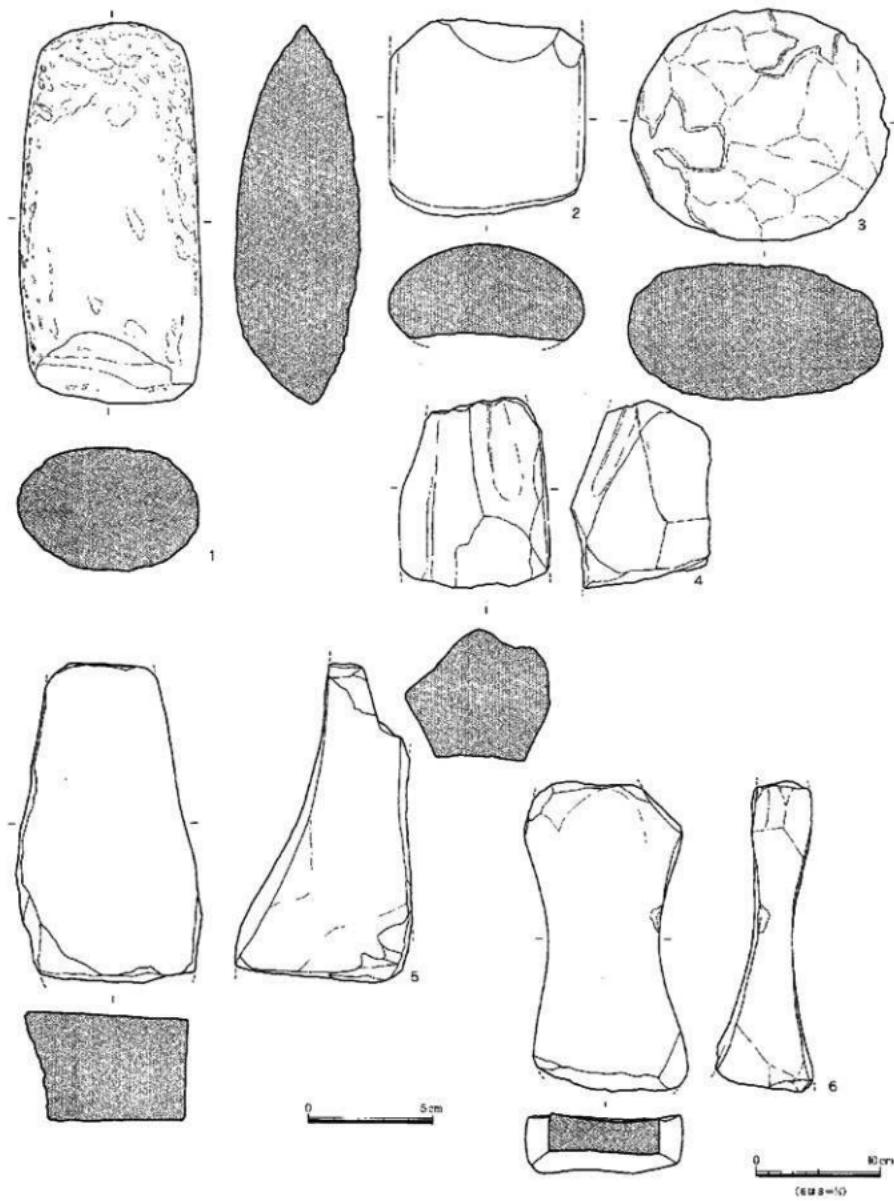


Fig.72 ⑥ SJ01の遺物 (縮尺1/4・1/2)

青銅器（馬鐸） 土器窓  
下面の平面実測を終えて、  
土器をまとまりごとに取り上げていると思いもしない遺物が出てきた。発掘作業員が指差しているのは何と馬鐸だった。馬鐸は横たわって出土し周囲を精査したが、ピットなど特別な造構はなく埋納などの行為を示すものは認められなかった。全体に緑青が見られるものの保存状態はよく、出土遺物状況の撮影を済ませて福岡市埋蔵文化財センターにクリーニングと保存処理を依頼した。

鐸身から紐までの高さは3.70cm、鐸身の断面はレンズ状で3.50cm×1.85cm。鐸身の内側には土が詰まっており、透過X線写真撮影をしたところ音を鳴らすための舌が残っていることが確認された。このため慎重に土を取り除いた。馬鐸の舞部内側にはコ字形の吊り金具が鋳出されており、舌も完全な形状で吊り下がたままの姿で残っていた。下端は雨滴状に丸く膨らんでおり、この部分が鐸身内側に当たり音が出る仕組みになっている。

最新の保存機器と担当者の熱意によって当時の音色が今に蘇った。

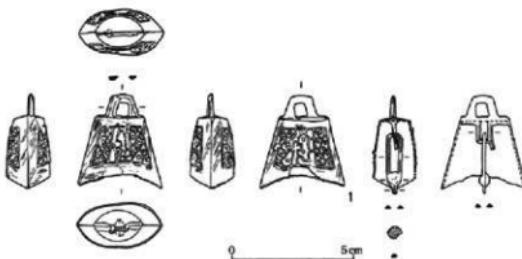


Fig.73 SJ01の遺物・馬鐸実測図 (縮尺1/2)



Fig.74 馬鐸の出土状況



Fig.75 馬鐸



Fig.76 馬鐸透過X線写真

## 第5節 第Ⅲ面（弥生時代中期～前期）の調査

### 1. 概要

第Ⅱ面の井戸、土壤、土器窓の間には、第Ⅲ面に属する弥生時代中期以前の遺構が出ているグリッドもあるが、第Ⅲ面の遺構のほとんどは基本的には黒色粘質土中で見つかる。第13次調査区では特に自然流路、掘立柱建物群など弥生時代中期頃の遺構が顕著に存在し、第10次、12次調査とは異なる知見が得られた。

**出土遺物** 第13次調査区では黒色粘質土の堆積が薄く、第Ⅱ面からすぐに第Ⅲ面の遺構が出てくることから、検出作業での遺物の出土遺物量は多くはない。土器3点、土製品3点、石製品23点を実測、図示した。

**土器** 1は弥生時代前期の甕。径22.0cmの口縁部は、屈曲の弱い如意形で、内面の稜は鈍い。刻み目は口縁上端まで達している。外面の調整は1cm幅に9本の細かなハケ目、内面は粗いハケ目調整。外面には黒斑がある。器高16.2cm、底径8.2cm。2は古式土師器で、小型の二重口縁甕である。頸部や一次・二次口縁部の屈曲がはっきりしており、外來系のBあるいはC系ではないかと判断する。全体ナデ調整で、その上に肩部や内面の一部に沈線状の工具痕が雜に施されている。3は支脚。胎土に3mm以下の砂粒を含み、特に土器と異なるものではない。支脚としたが煤が付着しているわけではなく、また二次的に強い熱を受けた痕跡はない。

**石製品** 5～12は黒曜石打製石器。無基の三角形で凹基式。13は梢円形の形状であることから石鏃とは考えがたい。14はドリルとしたが、回転部が断面三角形で加工が粗い。15は磨製石器。器身は細長く、無基凹基式。16は有茎式磨製石器。器身は丸みのある三角形で断面は薄いレンズ状で明瞭な鏃はない。基は不整多角形。17は梢円形の形状で、側縁は刃部のように研磨されている。用途不明。18、19はノミ状の方柱状片刃石斧。18は頭部が折れているが、19は完形品。全面ともよく研磨されており、後主面は側縁を面取りしている。20は楔状の形状をしている。片刃石斧ではなく別用途か。21は小さいが砥石とした。4面が研ぎ面として使用している。21は半月形内湾刃の石包丁のように見えるが、別用途の石器。22～24は石包丁（石製穂摘み具）。22の孔は刃部近くにあることから、研ぎ出しを相当繰り返したと思われる。未穿孔があるが細身になったために再度穿孔しようと試みたのであろう。24は約半分が折れているが、整った形状をしており、全面の加工も丁寧である。25は滑石製。小孔があることから垂飾品とした。わずかに勾玉状に彫曲している。28は自然面を残す黒曜石の石核。雀居遺跡では黒曜石の剥片が多く出土している。29は磨製石斧の完形品。側縁が刃部から頭部にかけて平行する長方形の形状で、身の断面は厚みがある。全面に敲打痕が残り、刃部の研ぎ出しは不十分で鈍い。長さ16.4cm。中位部の断面で6.5×4.2cm。  
**土製品** 27はややいびつな丸玉で径2.05cm。孔は中心から外れ、斜めに通っている。表面はヘラ状工具による傷が多く、滑らかな調整とはほど遠い。小孔も貫通していないことから飾品としての用途ではなかろう。横断面の径は3.6×3.4cm。



Fig.77 第Ⅲ面検出作業

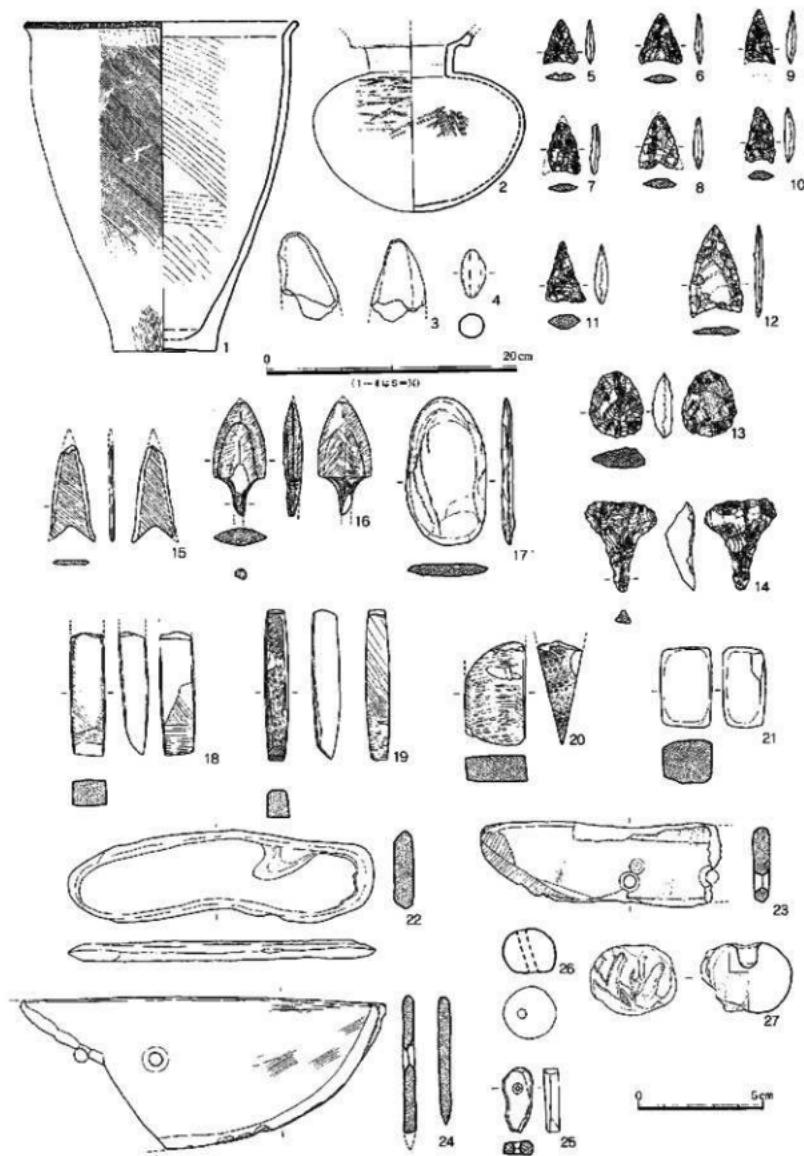


Fig.78 三面検出の遺物（縮尺1/4・1/2）

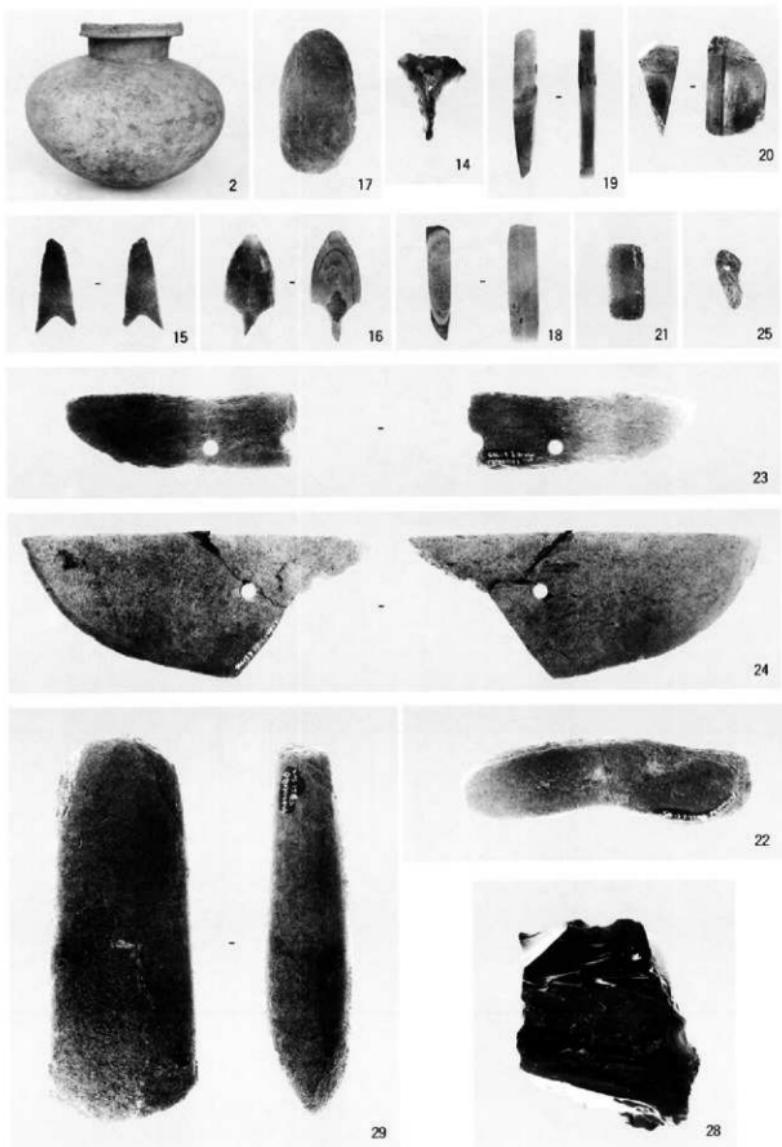


Fig.79 三面検出の遺物

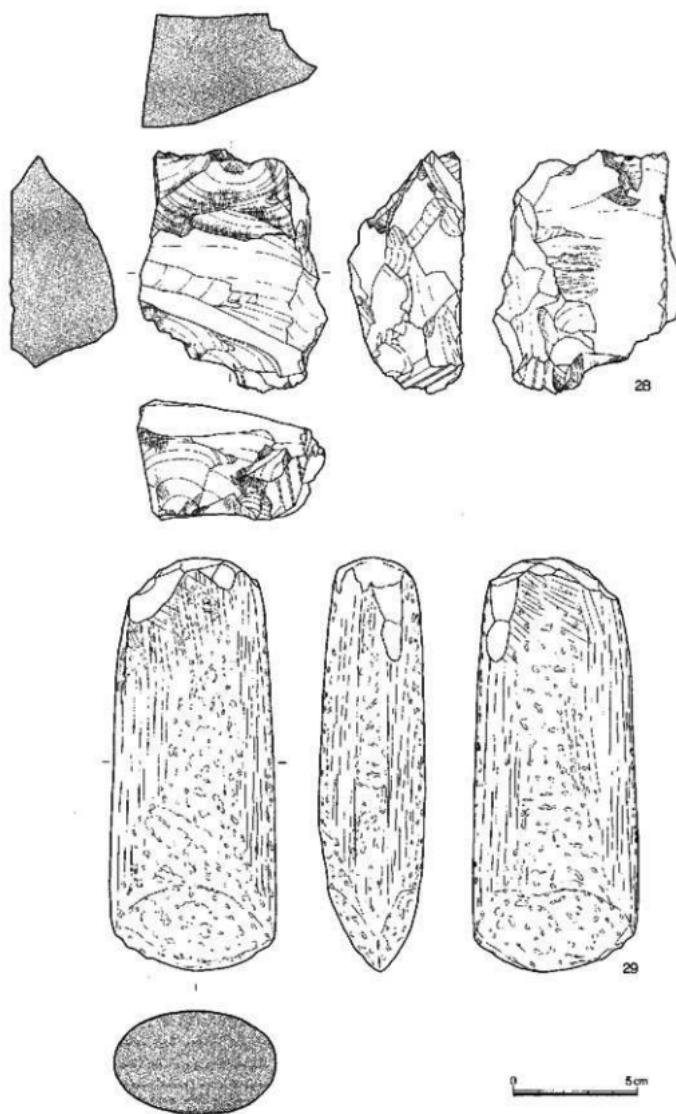


Fig.80 三面検出の遺物（縮尺1/2）

## 1. 自然流路

第2号自然流路 SL02 グリッドH列より東側では黒色粘質土の掘り下げで砂層が薄く堆積していた。面的に広げるとF・G31・32グリッドを中心にして砂層中に小枝が散乱したような状況で出土した。砂層の落ち込みがあるわけではなく、また小枝も流れに沿って同じ方向に並んでいるのではないので常時流水があったと思えない。むしろ小枝の状況からすると洪水で滞水した状態と考えるべきで、自然流路という遺構名は適当でないが、一時的に洪水などで水が流れ込んだという意味から自然流路SL02の遺構名を付けた。

SL02の砂層は、F29グリッド付近からG32グリッド方向、東から西へ延びており、第II面の自然流路SL01とは層位も流れ方向も明らかに異なる。小枝は大きな幹ではなく、長さも2m内外のものが大部分を占めている。保存状態が悪いことから加工の有無は確かめようがない。自然の立木が倒れ込んだことも想定したが、木葉は皆無であり、木根も見られないことからその可能性は薄い。ある程度長さや直徑に統一性が伺えることから、燃料などで集めていた小枝が急な洪水で流れ出し、わずかな崖地にしばらく漂った後に埋没したのだろう。この部分が極端な崖



Fig.81 SL02(北より)



Fig.82 第II面遺構全景

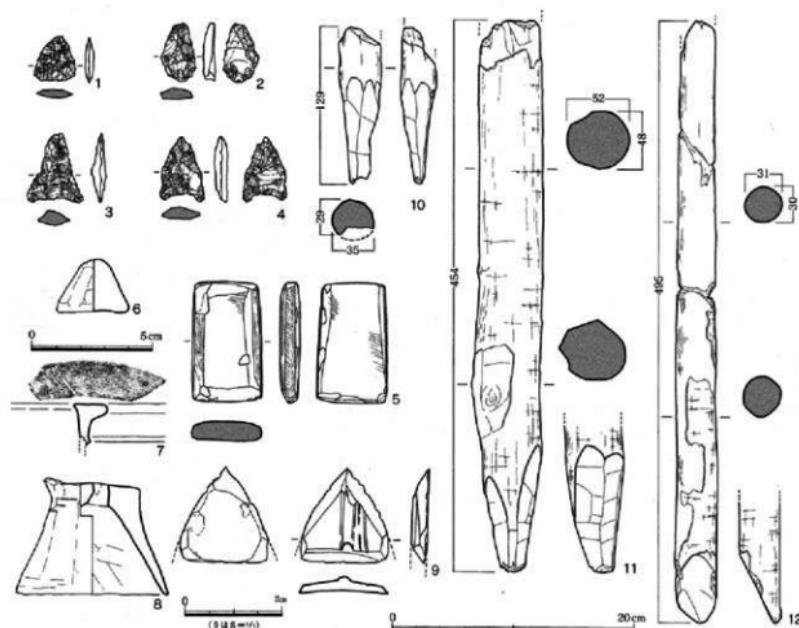


Fig.83 SL02の遺物 (縮尺1/4・1/2・1/1)

地とはなっていないが、G32グリッド北寄りにやや大きめの木材を組み合わせて井堰状にした部分があり、漏水する可能性は高い。ところでこの砂層の堆積時期を決定できる遺物は出土していないが、砂層下の出土遺物から大まかに弥生時代中期前後と考えておく。

**出土遺物 石製品** 1～4は黒曜石製の打製無茎石鏽。基部は1、2が丸みがあり、3、4はわずかな凹基式。5は扁平片刃石斧。身断面によると側面は丸みがある。

刃部は細かな刃こぼれがある。

**土 器** 6は円錐状の土製品。底径2.0cm、高さ2.1cm。胎土に1mm大の砂粒を含む。完形品だが用途不明。7は弥生時代中期前半の壺口縁部。上面は幅が狭く、わずかに凹んでいる。ここに2本の傷があるが、意図的なものか不明。8は支脚。底径12.5cm、器高9.6cm。

**青銅器** 9は砂層下黒色粘質土上面より出土したヤリガンナの最先端部。基部が折れ、現在は三角形状になっているが中央に細く隆起した背があり、本来は細長い形状だったのだろう。基部幅1.825cm、長さ1.915cm、厚みは0.340cm。研ぎ出し尽くしている。

**木製品** 10～12は細い丸太材の一端を削りで切断している。12は一方から斜めに切断。

Fig.84 SL02の遺物



### 3. 掘立柱建物跡 (SB)

第10次、12次調査でも小ピットに木材が残っているものがあり、豊穴住居跡や掘立柱建物跡の柱根と判断した。しかし連続する次のピットが見出しができず、建物として認定できなかった。このため第13次調査では、発掘目的の一つに掘立柱建物跡の確認を加えた。発掘区東側の砂層を取り除き全面で黒色粘質土を掘り下げ第Ⅲ面の遺構検出を行ったところ、柱根や礎板、さらに横木と組み合わせた柱穴が見つかり、しかもこれらが連続し1棟の建物として把握できるようになった。礎板や柱根の残るピットを起点にして掘立柱建物跡の検索を行い、計18棟をカウントした。



Fig.86 掘立柱建物跡

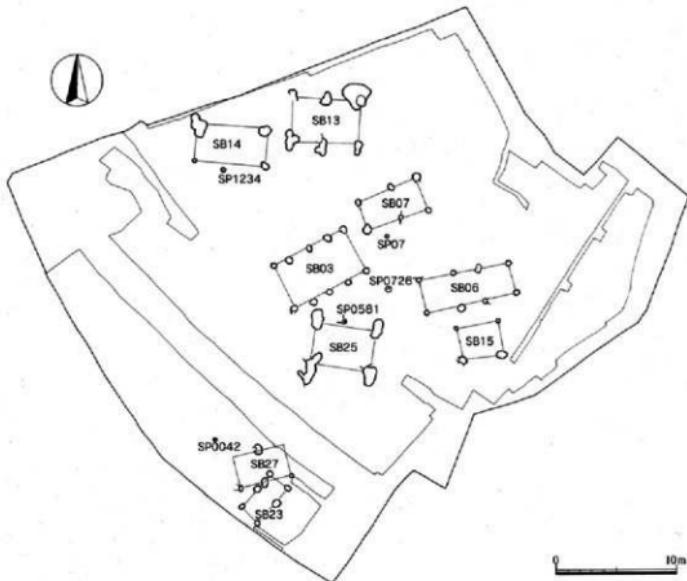


Fig.86 掘立柱建物跡配置図 (縮尺 1/400)

カウントした18棟の掘立柱建物跡は、方形に並ぶ柱穴の一つ以上に礎板か柱根が認められるもので、やや無理な位置関係のピットを拾い繋げたのもあり、ここでは掘立柱建物として確実性の高いものについて取り上げ記述する。

第3号掘立柱建物跡 SB03 1・J31・32グリッドにあり、梁行1間3.95m、桁行4間6.71m、面積26.57m<sup>2</sup>で、桁行方向がN-62°-Eの長方形の掘立柱建物跡。柱間が等間隔でなく、また整った長方形の位置はない。10個の柱穴のうち5個の柱穴に礎板を置いている。柱穴からは1~5の弥生時代中期前半頃の土器が細片だけ出土し、おおよその時期を推定できた。6は針葉樹の極目板を切断している。一部が火熱を受けている。7は残りが悪く原形を留めない。8は大きめの板材。両小口部の割りは直ではなく尖っている。



Fig. 87 SB03の遺物実測図 (縮尺1/3)

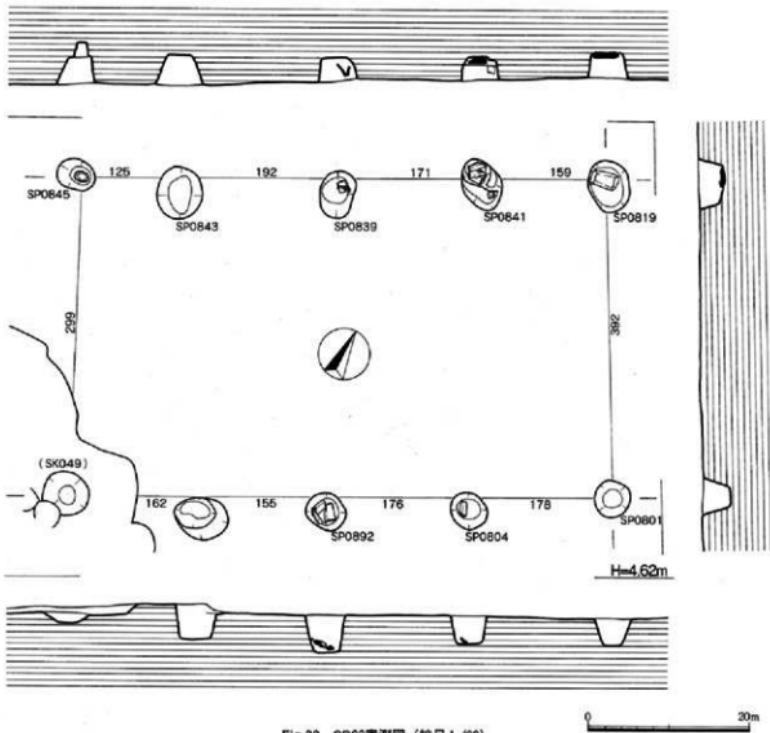


Fig. 88 SB03実測図 (縮尺1/60)

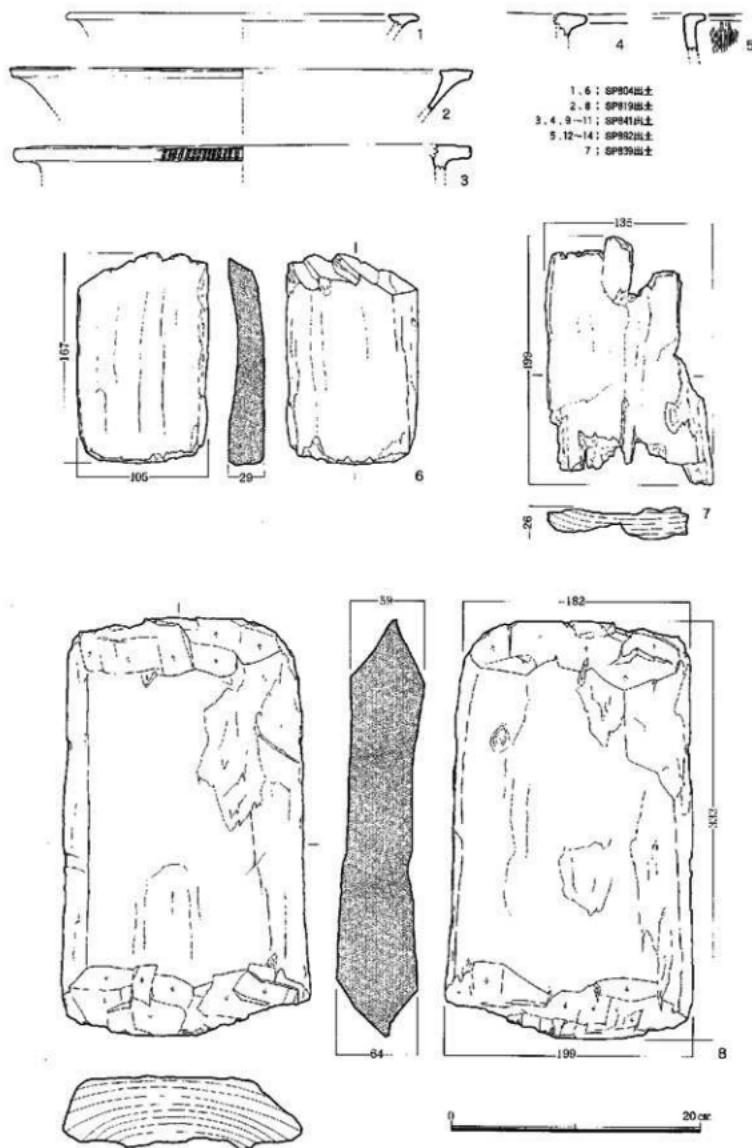
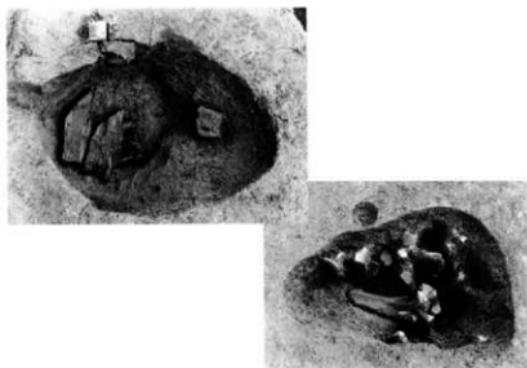


Fig.89 SB03の遺物実測図（縮尺1/4）



9~11は同じ柱穴から出土した礎板。この他に未固化的2枚があり、計5枚を敷いていた。固化した3枚は折り重なっており、いずれも割り材で一方を尖らせている。12~14も6枚出土した内の3枚。9とよく似た形状である。14は細かな削り痕が残る。別部材を再加工して礎板利用したのだろう。

◀ Fig.90 SB03の柱穴

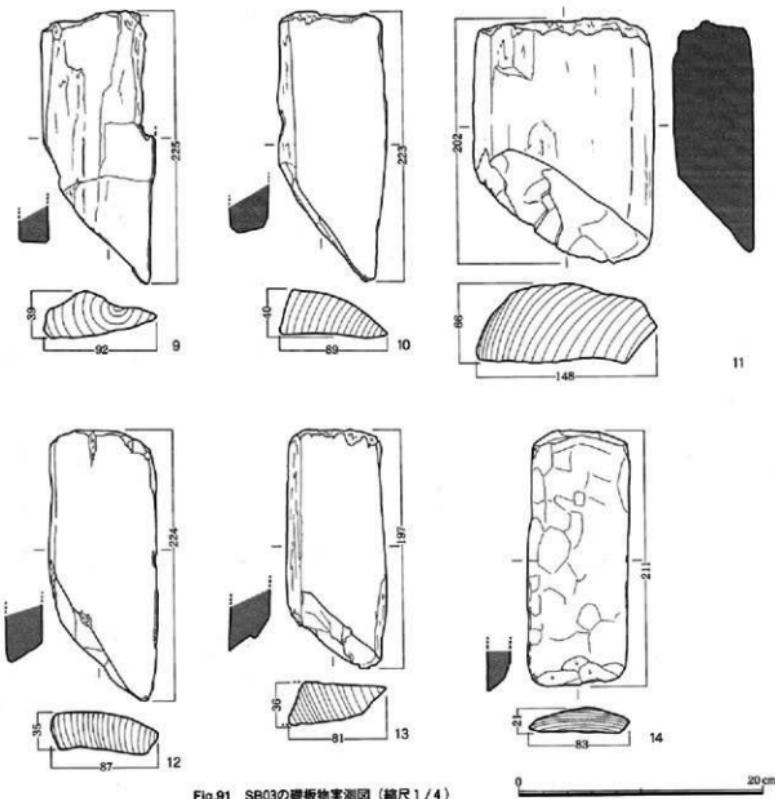


Fig.91 SB03の礎板実測図（縮尺1/4）



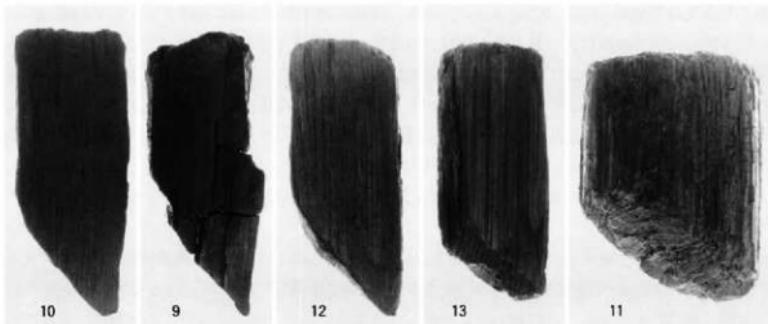


Fig.92 SB03の檻板

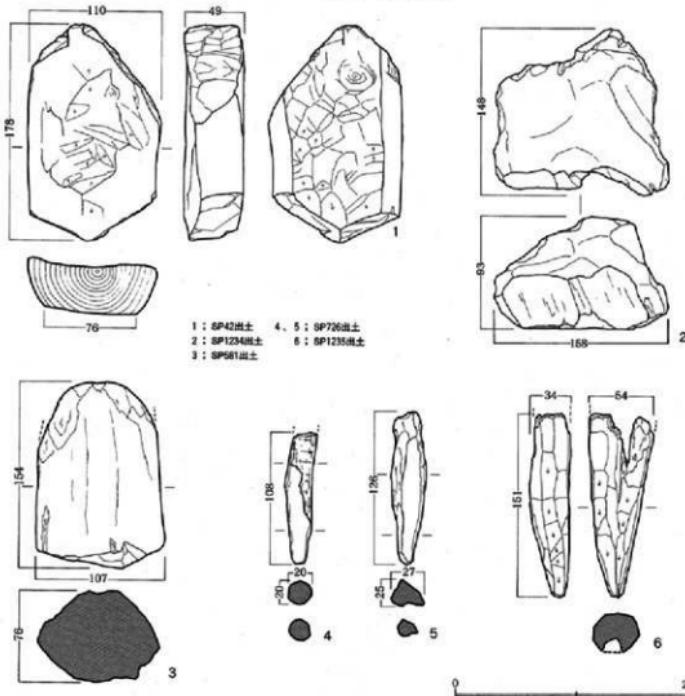


Fig.93 掘立柱建物跡の檻板実測図 (縮尺1/4)

1～5はビットから出土した木製品。掘立柱建物の柱穴と思われるが、対応する柱穴を探すことができなかつた。1、2は檻板。1は針葉樹を縦割りしている。加工面は削り痕が顕著。削りの方向は一定ではない。3は広葉樹の柱根、芯無し材。4、5は柱根と檻板の間に差し込み安定させた楔か。

**第6号掘立柱建物跡 SB06** H29グリッドにあり、SB03の南東側約5mに位置する。梁行1間2.81m、桁行3間7.72mで東西に長い長方形。桁行方向はN-78°-Eで面積は21.65m<sup>2</sup>。四辺の長さがそれぞれ異なり、柱間が一つとして同じ長さのものはない。該当する10個の柱穴はいずれも直径40cm前後の不整円形で、最も深い柱穴でも23cmしかなく、相当な削平を受けている。底部に礎板ではなく扁平な自然石を置いたもの。柱根を支える丸太材を組み合わせたものが3個ある。10個の柱穴底部の標高は差が同じではなく、礎板などでレベルを合わせた様子ではない。出土した3点の土器を図示したが、3の土師器甕のように後の混入もあり、点数も少ないとから断定はできないが、弥生時代中期としておく。

出土遺物 1は口径28.6cmの壺。厚みのある口縁部で上面の幅は狭い。口縁外端は横ナデ調整で丸みがある。胎土に2mm大の砂粒を多く含み、焼成も良く器面は赤褐色となっている。2は壺で口径29.2cm、1と同じ柱穴から出土した。口縁上面が内傾し、内端部が小さく突出しているのが特徴。3は口径15.2cm、く字形に強く屈曲する口縁部は、微妙に湾曲しながら延びている。屈曲部外面には煤が付着している。体部内向は削り。4は柱根を支えていた横木。湾曲した径4cmの丸太材の中央部を削り細め、柱根と組み合わせる工夫をしている。この部分は力が加わり、潰れたような形跡がある。小枝は削り落としたのではなく、無造作に折り取ったようである。両端の削りによる切断は鋭利な工具を使用したのであろう。5は検出時には、柱根と組み合わさっていたが、激しく腐食しており、柱根は取り上げできず、横木も半分だけが残っているだけである。広葉樹の丸太材で中央部には両面を削って柱根を受ける加工が施されている。端部は、2面から数回の打撃で切断している。6は厚さ5cm前後の扁平な自然石を柱穴の底に据えていた。今回検出、認定した掘立柱建物跡の中で自然石を据えたものは唯一の例である。

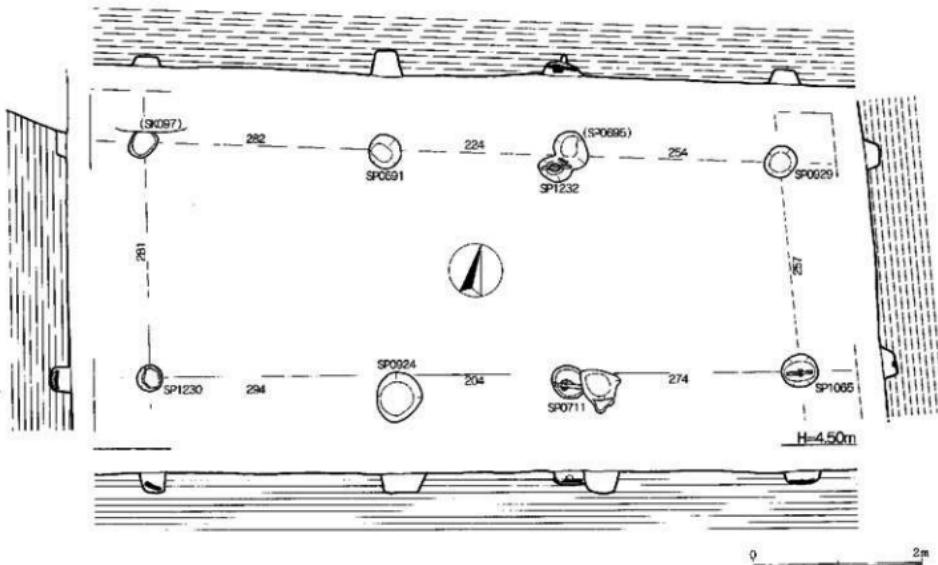


Fig.94 SB06实测图 (缩尺 1/60)

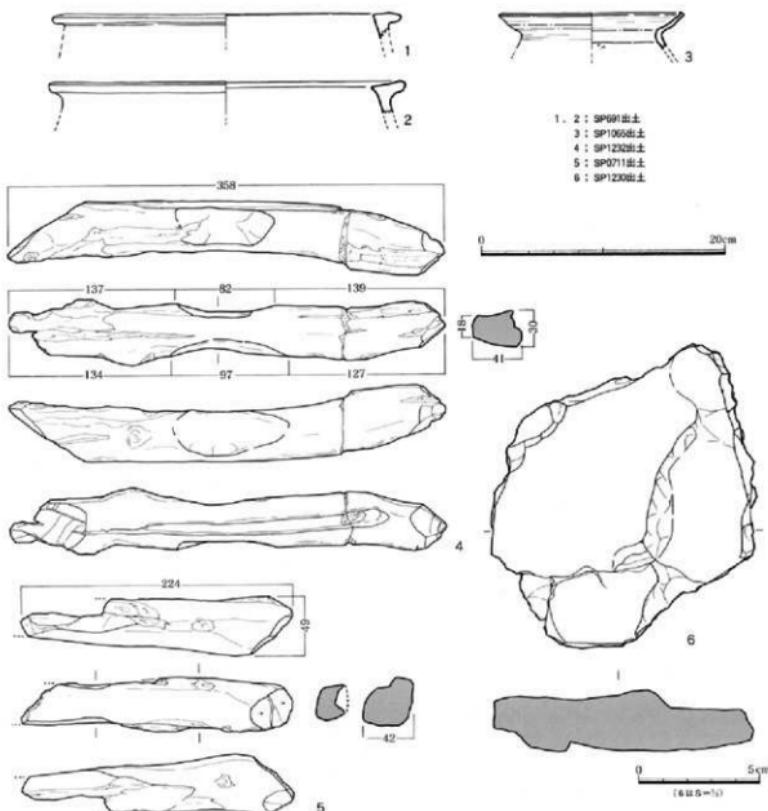


Fig.95 SB06の遺物 (縮尺1/4・1/2)

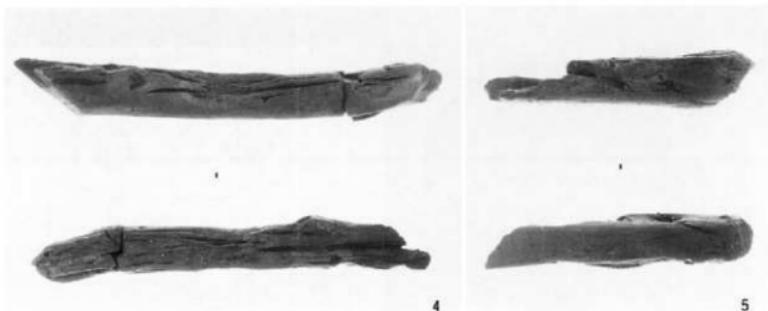


Fig.96 SB06の遺物

## 第7号据立柱建物跡

SB07 G・H31グリッドにあり、SB03とほぼ方向が同じで北東側にずれて並んでいる東西方向の建物。梁行1間2.89m、桁行2間5.24m、面積14.93m<sup>2</sup>。東側梁行が開いた長方形で柱間は同じ長さではない。6個の柱穴はSB06に比べやや大きく、うち3個が横木と柱根を組み合わせる方式で建物の沈下を防いでいる。

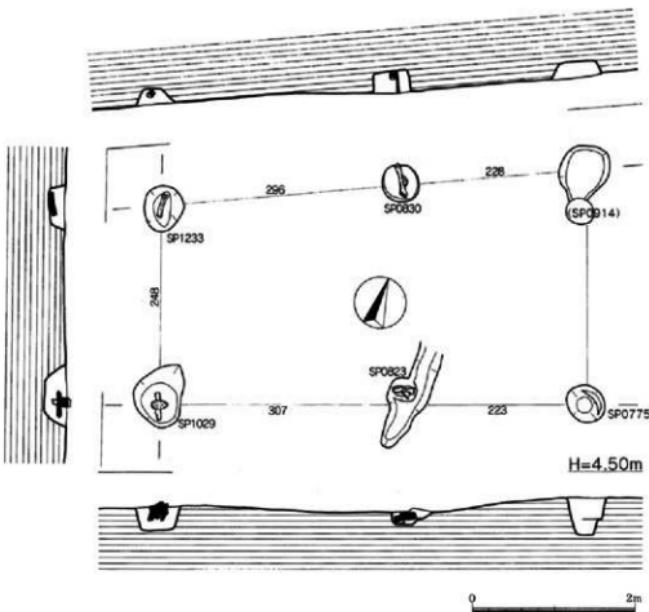


Fig.97 SB07実測図（縮尺1/60）



Fig.98 SB07の柱穴

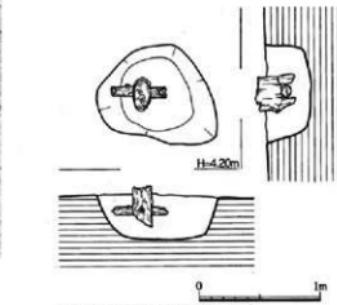


Fig.99 柱穴実測図（縮尺1/40）

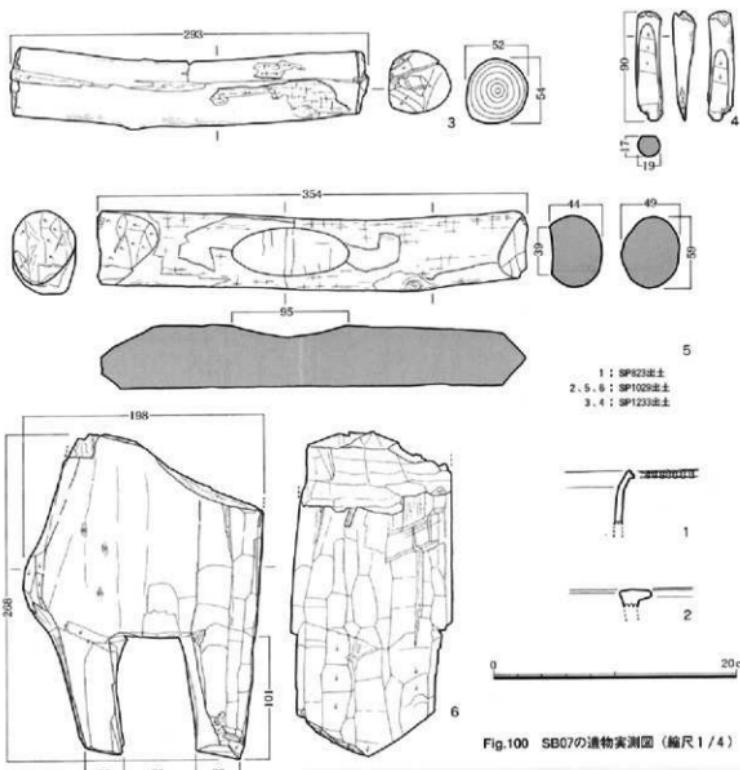


Fig.100 SB07の遺物実測図（縮尺1/4）

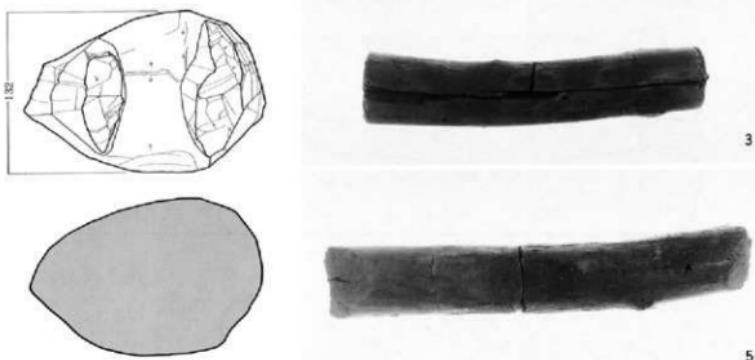


Fig.101 SB07の鏡板

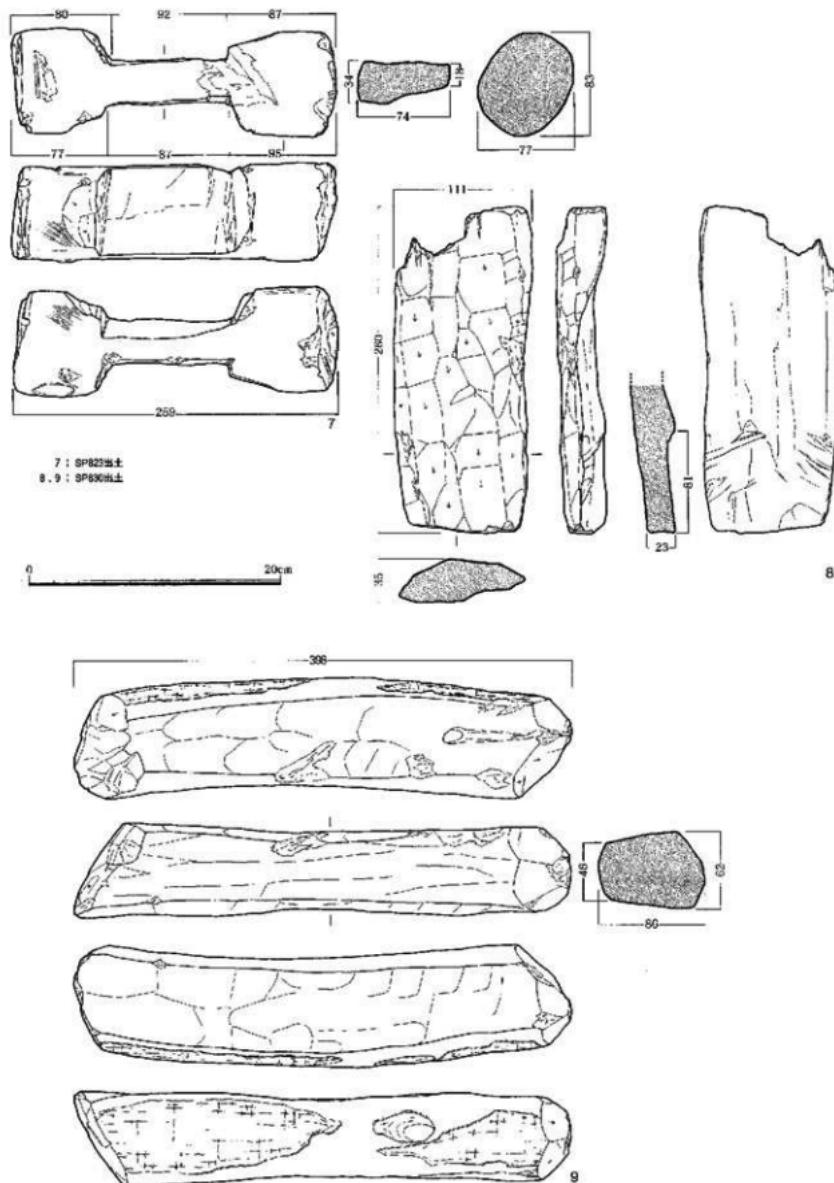


Fig.102 SB07の遺物実測図（縮尺1/4）

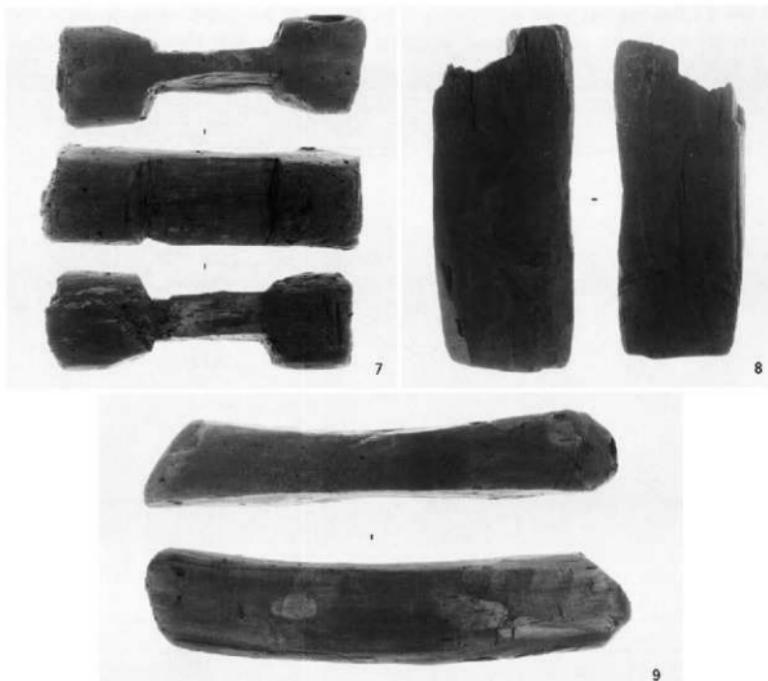


Fig.103 SB07の礎板と柱根

土器 2 点を図示した。1 の壺口縁部はわずかに外湾し、端部に細かな刻み目、外面は横ナデ調整。2 は小さなし字形口縁の壺。3 は横木で、4 も同じ柱穴から出土した。4 は小さな丸太材で両側から削り模状となっている。横木としては適していないので、柱根と横木を安定させるために差し込んだか。5 は横木。中央部に柱根を受ける凹みがある。6 は 5 が支えていた柱根。断面楕円形で横木を挟み込むように中央を 10cm 切り込んでいる。表面の削りは細かく、痕跡がよく残っている。7 の横木は広葉樹の芯持ち材。柱根を受けるために中央を抉り取っている。その厚さは 1.8~3.4cm。横木としては特異な形状をしており、柱根にも狭い溝状の欠き込みがあるのだろう。8 は板状になっているが、9 の横木と組み合う柱根。欠き込みの深さは 8cm で 6 と大差ないが、断面が扁平となっており、もう片方が丸みがあるのだろう。それとも中心より外れて欠き込んだか。9 は一部に樹皮が残る。



6

第13号掘立柱建物跡 SB13 G32-33グリッドにあり、最も北に位置する建物である。N-95°-Eのほぼ東西方向の長方形。梁行1間3.59m、桁行2間5.68m、面積20.45m<sup>2</sup>。柱間の距離はほぼ等しく、

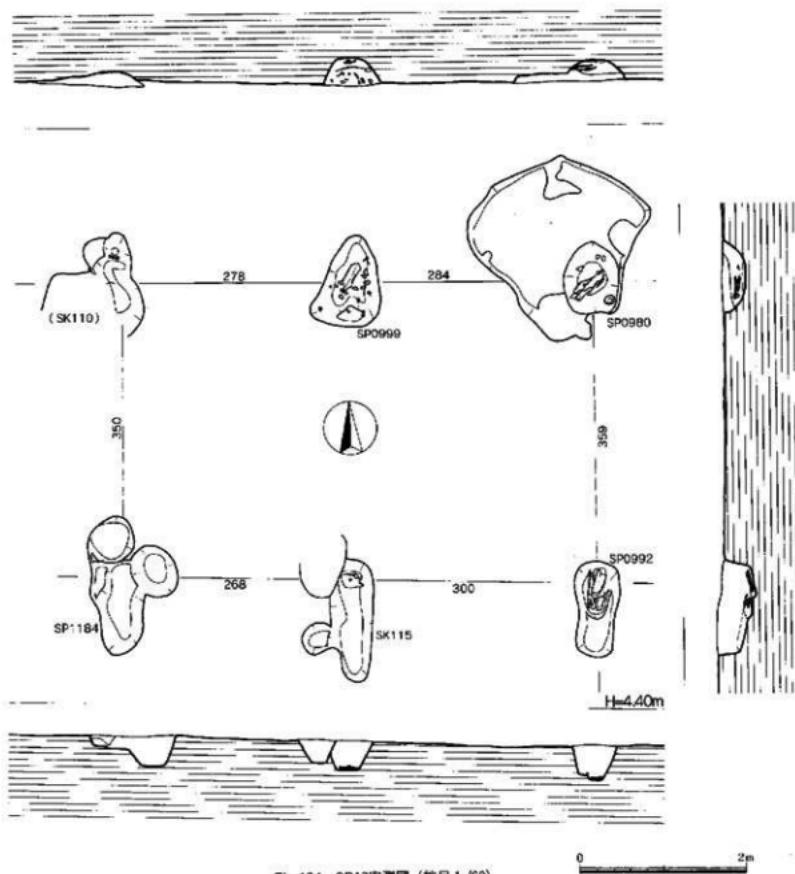


Fig.104 SB13実測図（縮尺1/60）

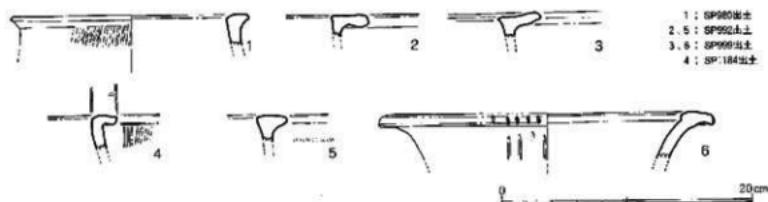


Fig.105 SB13の遺物実測図（縮尺1/4）



Fig.106 SB13

整った位置にピットが配置されている。これら6個の柱穴のすべてが円形ではなく長楕円形であることが他の掘立柱建物跡と大きな違いである。北側柱列の3個の柱穴のうち両側の2個は、他の土壙や井戸と切り合っており平面形は不明だが、南側柱列の柱穴は建物長軸に対して細長い掘り方で、かつ段堀りされている。柱を長軸に対して直交して置き、その柱根を深い穴に差しこみ徐々に柱を立てたのだろう。柱穴から出土した土器から弥生時代中期前半頃の建物とした。

1は口径19.0cmの堀。口縁部は肥厚し、外端部は小さく張り出す。2はL字形口縁の堀。上面は凹む。3も同じようなL字形口縁で内端部に丸く突出している。

4は直角近くに屈曲した口縁部。内端部に丸み。5の口縁部も分厚い。6は口径



SK115



Fig.107 SB13の柱穴

SP0999

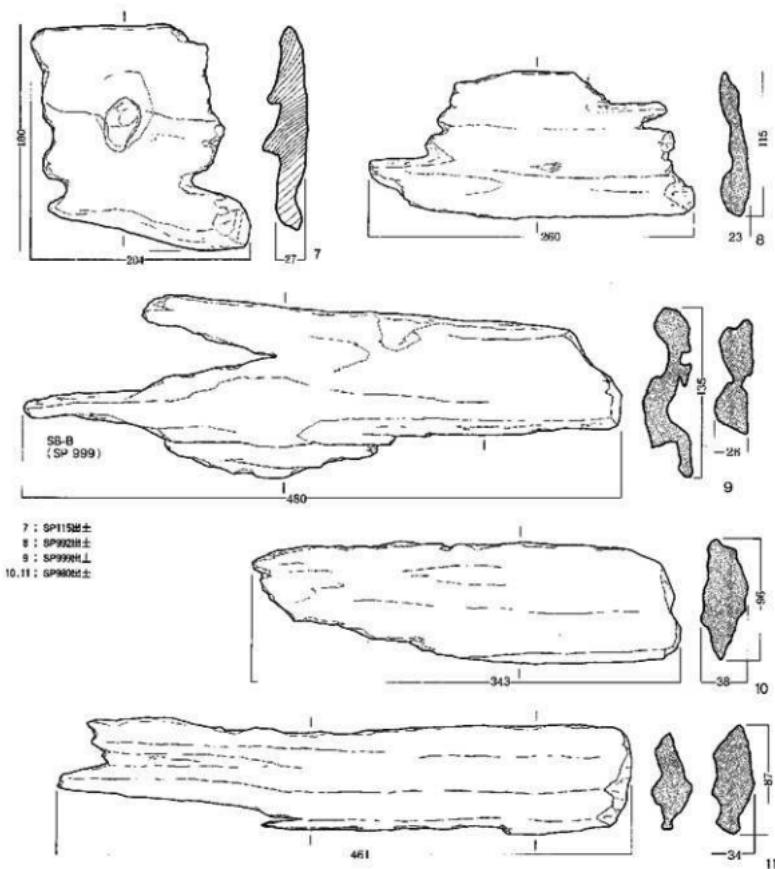
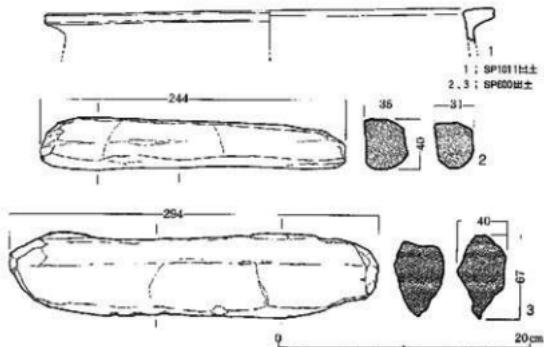
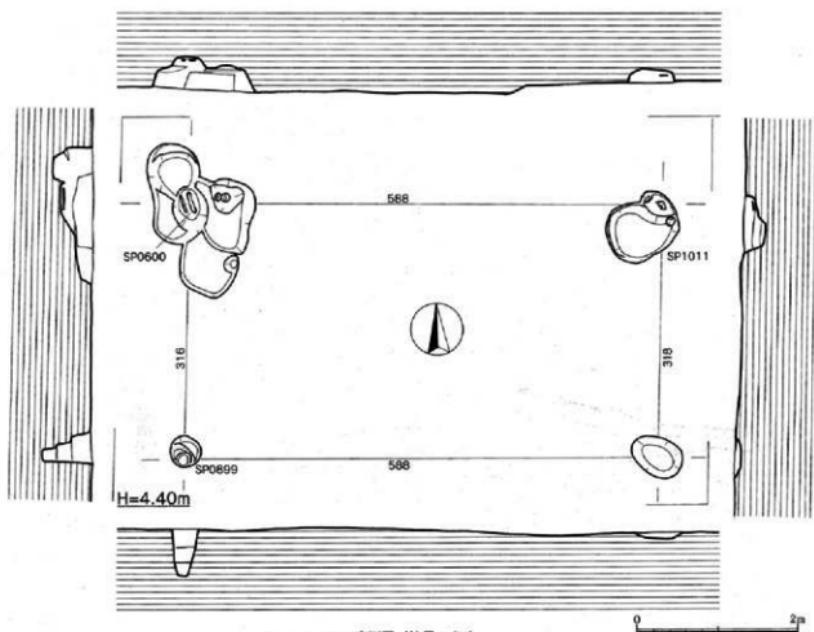


Fig.108 SB13の遺物（縮尺1/4）

26.8cmの広口壺。口縁外端に刻み目、頸部外面に立ての暗文風の条痕がある。7～11は櫛板。7は針葉樹の柾目材、中央の筋がある。腐食で原形を留めていない。8、9は広葉樹の板材。腐食で凹凸が激しい。10、11は重なっていた。同じ樹種だろう。





#### 第14号掘立柱建物跡 SB14

SB13とはほぼ同じ方向で西側に並んでいる。ただし柱筋は通っていない。梁行1間3.18m、桁行1間5.88mの長方形で面積は18.54m<sup>2</sup>。桁行方向はN-91°-Eの建物。さらに西側に延びる可能性もあることから精査したが、該当する柱穴はない。4個の柱穴とも他のピットと複雑に重なり平面形が不明瞭だが、SB13とは異なり、通常の円形をしている。深さは南西隅だけ



Fig.111 SB14

が異様に深く、残りの3個は浅い。4個の柱穴のうち2個に礎板が敷かれていた。2と3は同じ柱穴に間を置いて並んでいたことから、横木ではなく礎板的な使用だったと判断した。2は断面台形に削り出している。3も中央部が木質の色を残しており、柱根が直接当たっていたためであろう。

## 第15号堀立柱建物跡

**SB15 SB06** の南側、  
SB24の西にはほぼ同じ方  
向で並んでいる。梁行1  
間2.99m、桁行1間3.59  
で面積は11.33m<sup>2</sup>。桁行  
方向はN-84°-E。4  
個の柱穴は円形プランで、  
うち1個に礎板が敷かれ  
ている。1は如意形の口  
縁部であるが、湾曲は弱  
く短い。外周は粗い縦ハ  
ケ目調整。内面は横ハケ  
目。胎土に1mm大の砂粒  
を多く含んでいる。



▲ Fig.112 SB15 の遺物 (縮尺1/4)

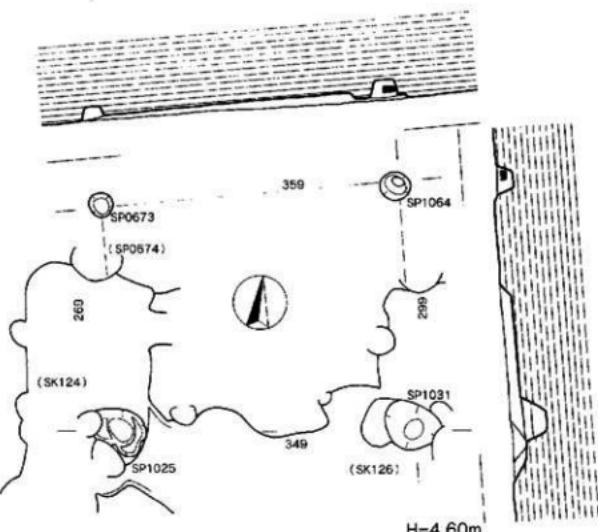


Fig.113 SB15実測図 (縮尺1/60)

## 第23号堀立柱建物跡

**SB23** 第10次発掘区で  
は最も南西端に位置する  
建物。ピットが密集し、  
1棟と認定するのに手間  
取った。梁行1間1.88m、  
桁行2間3.84m、面積  
7.22m<sup>2</sup>。桁行方向はN-  
43°-E。柱間は等間隔  
ではなく、ややいびつな  
長方形となっている。柱  
穴は円形で深さは約20cm  
前後。6個の柱穴のうち  
2個に礎板が見られたが、  
保存状態が悪く取り上げ  
ることができなかつた。

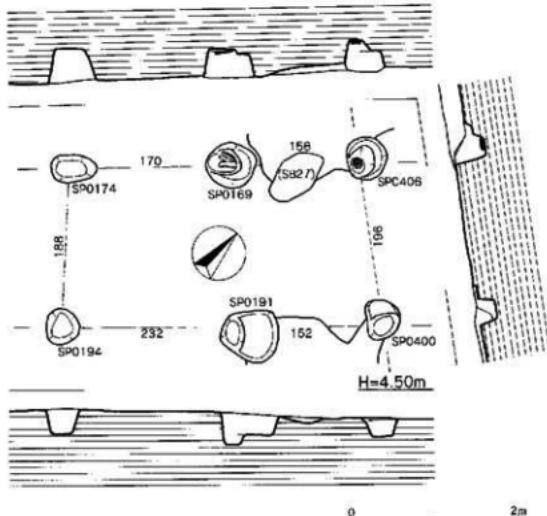


Fig.114 SB23実測図 (縮尺1/60)

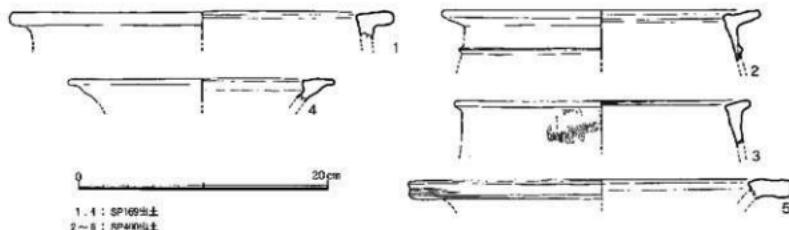


Fig.115 SB23の遺物 (縮尺1/4)

土器は5点を図示した。1～3はU字形口縁の壺。1は口径30.7cm、厚みのある作りで、口縁上面はわずかに内傾している。2の壺は口径25.6cm、同じように口縁上面は内傾しているが、凹みがあり、内端部は丸く尖っている。口縁下に断面三角形の突帯が1条貼り付けている。3は口径23.8cm、さらに分厚い器壁で、口縁上面の幅は狭い。4～6は広口壺の口縁部。6は口径46.0cm、口縁内端部への張り出しが強く、外端部は方形断面となっている。

第25号壇立柱建物SB25 J30-31グリッドに位置し、東側のSB04とSB11と重なっている。梁行1間3.95m、桁行1間4.96m、面積19.59m<sup>2</sup>の長方形。桁行方向はN-93°-E。柱穴掘り方はSB13と同じように2段掘りした長楕円形で、桁方向に対しほぼ直角に位置している。4個の柱穴の壁は斜めに傾いており、柱を差し込むための工夫であろう。うち1個に柱根が残っていた。1、2は壺胴部上半の文様部。3は黒曜石製打製石鐵。基部の凹みはほとんどない。4は広葉樹の柱根。断面ではいくつかの穴があり、

貫穴のようでもあるが腐食が進み判断困難である。

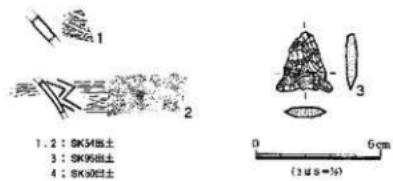
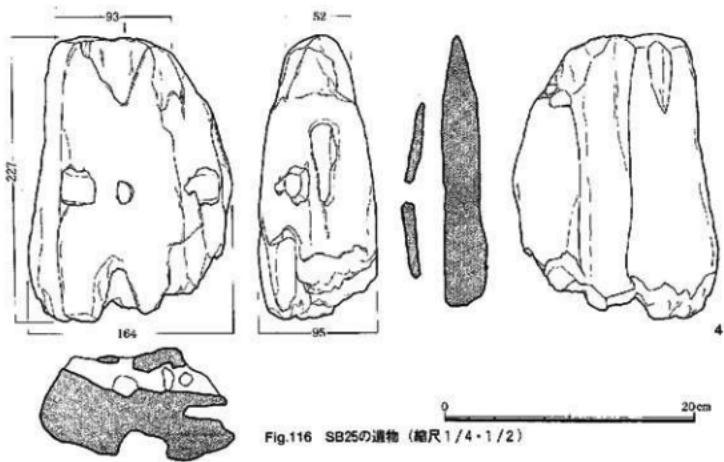
1.2: SK34出土  
3: SK95出土  
4: SK96出土0 6cm  
(2倍縮尺)

Fig.116 SB25の遺物 (縮尺1/4-1/2)

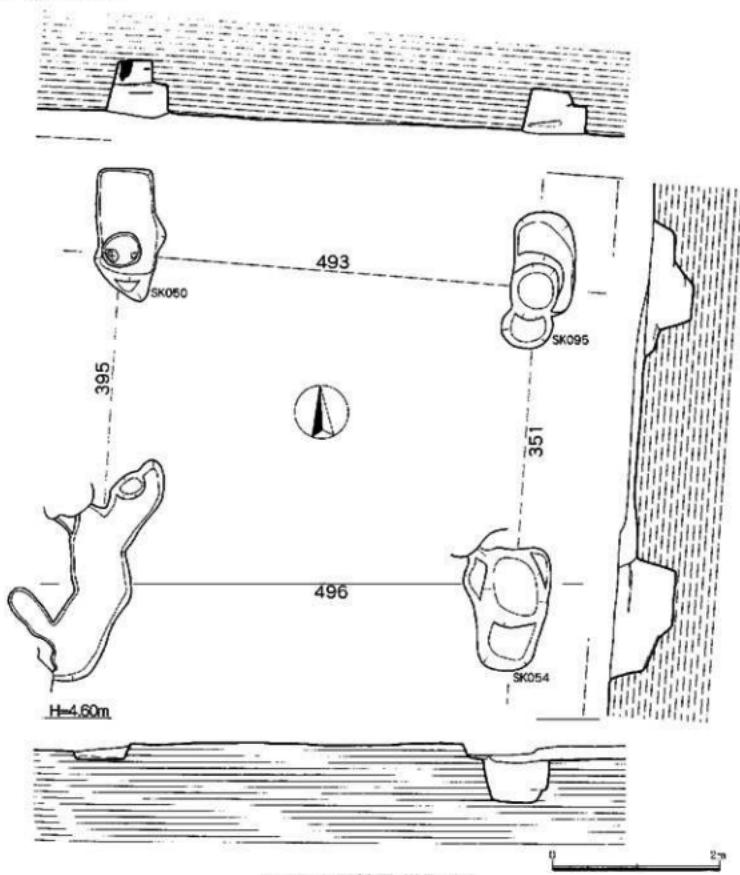


Fig.117 SB25実測図 (縮尺1/60)

**第27号堀立柱建物跡 SB27**

L30グリッドにあり、一部がSH23と重なっている。梁行1間2.60m、桁行2間4.36m、面積11.31m<sup>2</sup>の長方形。本来6個の柱穴で構成されているはずだが、2個は発掘外や別遺構と重複しており検出確認できていない。各柱穴は円形で、南北側の柱穴に横木が見られた。この横木は保存状態が悪く、取り上げて実測することができなかったが、底部より14cm浮いた状態であった。時期を判断するような遺物は出土していない。



Fig.118 SB27実測図 (縮尺1/60) ▶

#### 4. 壺棺墓 (SN)

弥生時代の墓地は共同墓地を形成することが多いが、雀居遺跡でこれまで発掘確認された墓地は、前期後半から中期前半が主で、特に共同墓地が一般化する中期中頃の墓地はきわめて少なく、また一か所に集中することがない。前期後半から中期前半までの墓も、その構成数も20基を超すことはない。第13次調査では、壺棺墓4基、土壙墓1基の計5基を検出した。うち壺棺墓と土壙墓の2基に人骨が残っており、実測、取り上げを九州大学中橋孝博教授にお願いした。分析、研究の報告を別冊に収録している。

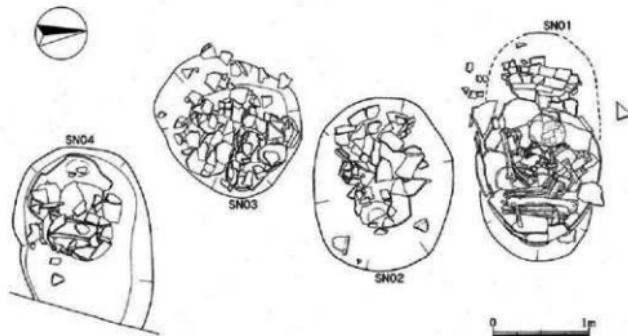


Fig.119 壺棺墓分布図 (縮尺1/50)



Fig.120 壺棺墓

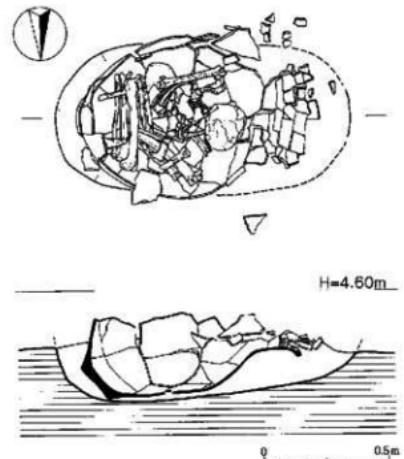


Fig.121 SN01実測図 (縮尺1/20)



Fig.122 SN01実測作業スケッチ

4基の壺棺墓は、II23グリッドの南寄りで検出した。まず墓壙の確認を試みたが黒色粘質土のために土色の変化はなく、最後まで明確なプランを把握できなかった。土壙墓 SA01とは離れているが、検出した壺棺墓4基は南北に接近して並び、小規模ながら墓地を形成している。この場所のすぐ南には、古墳時代前期になって自然流路があり、その縁に沿って土器窪があることから、弥生時代においても微高地の斜面になっていたと思われる。一方、東地点と呼んだ第7次調査では、弥生時代前期中期から後半にかけての壺棺墓8基と土壙墓9基で構成される墓地があり、微高地の南東隅を占地している。第10次、12次調査では、微高地（集落）の中央部に分散する傾向にあったが、これらは乳幼児を埋葬したもので、壺棺や壺など大型の土器を用いた通常の埋葬とはやや異なる葬送であった。弥生時代中期の共同墓地のように集落から離れて墓地だけで土地利用するのではなく、雀居遺跡の東西両地点では、集落が展開する同じ微高地の一隅ではあるが墓地が生活空間と密着する関係で混在していくことになる。集落の構成員や墓地に埋葬される階層、そして墓地に対する弥生人の感情や死生観など肝心な事を明らかにできないが、墓地だけで微高地を独占しなかったのは、湿地、低平地という雀居遺跡の自然、地理的環境も一因となつたのであろう。

第1号壺棺墓 SN01 4基の壺棺墓のうち最も北にある。墓壙の平面プランは楕円形であろう。下棺は約1/2が残っているが、上棺は合わせ部に一部が残るにすぎない。墓壙は50cm以上は削平されている。残った破片から復元すると、上棺は中型壺、下棺に大型壺を用いた複棺で、上棺の口頭部を打ち欠き下棺口縁部に挿入（下棺からすると呑口式）している。合わせ部には粘土などの日張りはない。埋葬方位はN-89°-W、埋置角度は40°を測る。下棺の安定を図るために日常土器の壺底部（5）を下に差し込んでいる。さらに下棺の抜き取り作業で発見したが、下棺頭部は埋葬直前に割れたようで、墓壙に接する部分の下に別の大型壺（3、4、6）の口頭部破片を収き補強している。下から支え補強した破片もばらばらであることから、この場所で別の壺を打ち欠いたものではない。また打ち欠かれた壺が埋葬に使用された可能性が高いが、東西両地点の墓地には該当する壺棺墓はない。



Fig.123 SN01 (東から)

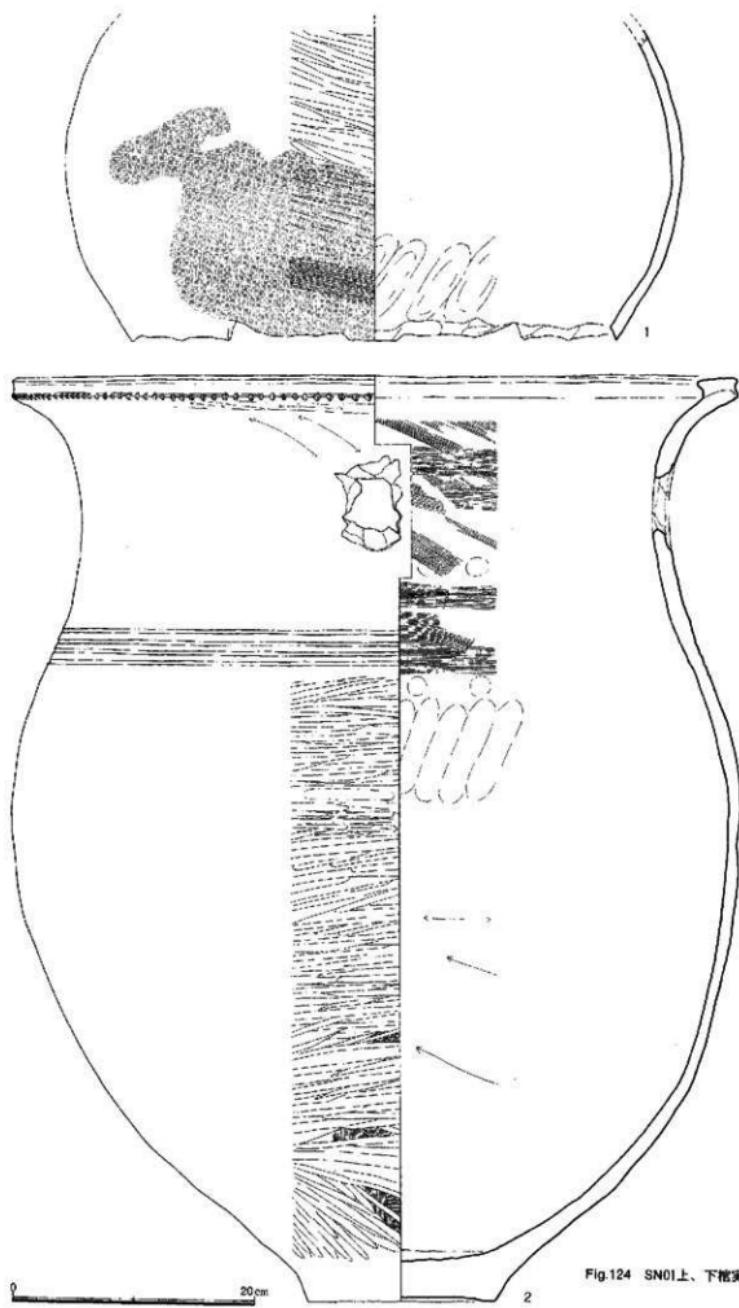


Fig.124 SN01上、下棺実測図（縮尺1/4）

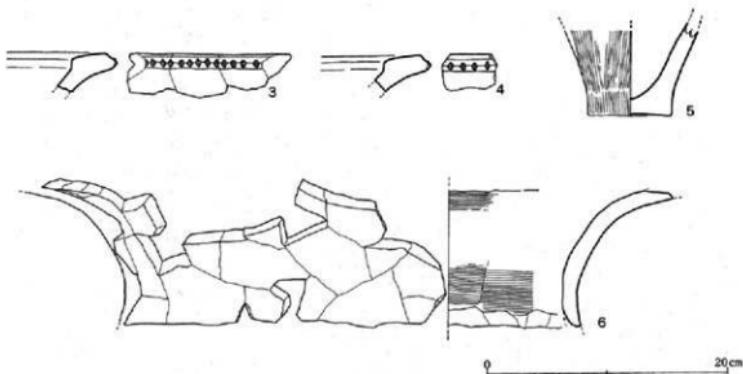


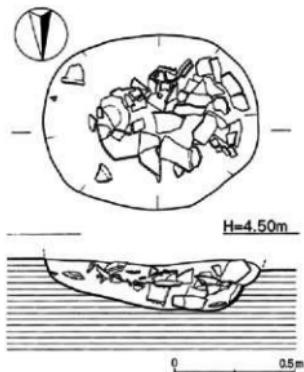
Fig. 125 SN01の遺物 (縮尺1/4)

**上棺** 合わせ部と棺内に残っていた破片を接合して1の中型壺が復元できた。最大径は51.0cm、口頭部は打ち欠かれ、底部も後世の削平で失われている。先述した下棺の破損部補強は、打ち欠いたこの口頭部片を利用することもあったはずだが、別の土器を当てているのは、上棺打ち欠き行為が別の場所であったことを示しているのだろう。胴部の器面調整は、外面が横ミガキ、内面は右上がりの強いナデ。胎土は精良土ではないが砂粒は少ない。焼成は良好で、外面には濃度異なる黒斑がある。

**下棺** 脇部の張りは中位より上にあり頸部との境に4本の平行沈線を巡らせていく。頸部は緩やかに外消、そのまま口縁部となる。口縁上面には粘土板を貼り付けて幅広くする。さらに横ナデを加え、端部を口唇状断面とし、その下端だけに刻み目を加える。胴部外面は横ミガキ、頸部内面はハケ目調整。頸部に外側から穿孔。口径59.8cm、器高76.7cm、底径15.2cm、胴部最大径60.0cm。頸部に焼成後の穿孔がある。埋葬時に穿孔したのであろう。

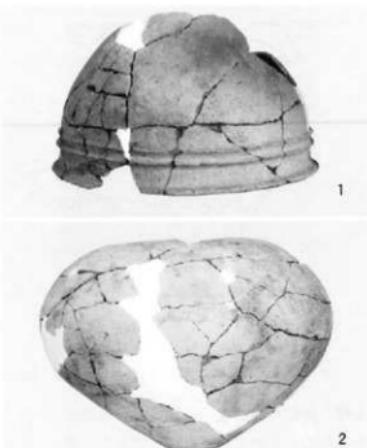


Fig. 126 SN01上、下棺



▲ Fig.127 SN02実測図 (縮尺1/20)

Fig.128 SN02上、下棺▶



**第2号墓棺墓 SN02** SN01の南側に接するようにして埋置している。墓壙は長軸89cm、短軸72cmの梢円形。上棺は中型鉢、下棺は中型壺の組合せで、下棺底部を墓壙の西側に片寄せて置き、上棺を口縁部を打ち欠いた臺に被せている。埋葬方位はN-88°-W、埋置角度は10°なのでSN01とは平行していることになるが、SN01が頭位を西にしているのに対し、SN02は真反対の東に向いている。墓壙内には、如意形口縁の壺口縁部が入り込んでいた。

**上 棺** 半球状の体部にやや上げ底の底部と小さくL字形に折れ曲がり肥厚した口縁部が付く。口径44.8cm、器高28.5cm、底径9.8cm。

口縁下方に断面三角形突帶を2条貼り付けている。器面の調整は外表面はハケ目、内表面はナデ。器面は凹凸が少なく丁寧な作りとなっている。黒斑は底部外表面に付く。黒灰色と薄いが口縁部の内面と底部近くにも見られる。胎土に砂粒を含み、雲母や赤褐色粒も混入している。色調は明黄褐色で焼成は良好。



Fig.129 SN02

**下 棚** 頸部と胴部の境から上半を打ち欠いている。胴部は玉葱状の器形で中位よりやや上に最大径がくる。最大径は48.0cm、現在の器高は37.5cm。径10.0cmの底部はわずかに上げ底で、内側は丸く盛り上がって分厚い器壁となっている。外面は細かな横ミガキ、底部周辺は縦のミガキで全面に丁寧に施している。頸部との境には断面三角形の突帯を1条貼り付け、その頂点は横ナデでシャープである。胴部上半の内面には、指頭圧痕があり外面に比べ凹凸が目立つ。胎上は上棺の鉢と同じように砂粒、蚕糸を含んでいる。黒斑は外底だけに見られる。

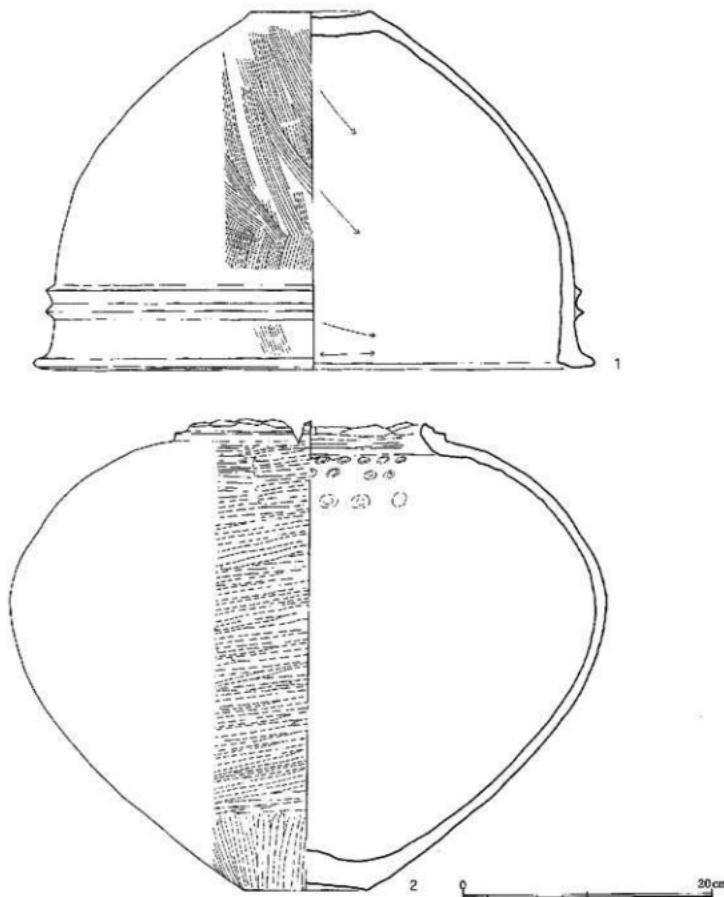


Fig.130 SN02上、下棺実測図（縮尺1/4）

**第3号壺棺墓 SN03** 検出当初は土器片がやや集中しているものの散乱した状況であり、墓壙のラインも明瞭でなかったことから壺棺墓とは思えなかった。だがSN02の南側に接するように位置していることから、副葬土器の可能性もあり上面の実測を済ませた。土器片を取り上げ周囲の清掃をしていくと次第に全体像が現れ、2個の中型壺を用いた壺棺墓であることが分かり、第3号壺棺墓と名付けた。黒色粘質土で埋め土との違いが不明瞭で墓壙ラインがはっきりしないが、長軸74cm、短軸65cmの楕円形であろう。2個の土器を合わせた形状より一回り大きくしただけで余分な空きは作っていない。2個の壺は、口頭部の打ち欠き面を合わせてほぼ同一レベルに埋設していることから、上、下棺の区別が付かず、発掘時には東棺、西棺と呼び分けた。合わせ部下方に敷かれた目張りの灰白色粘土の断面観察から、最終的には東棺を先に埋置したと判断した。埋葬方位はN-27°-E。ほぼ水平に埋置している。

**上 棺** 口頭部を打ち欠かれ、底部も埋葬後の削平で失われている。現在の器高は25.7cm。胴部は上位に最大径がくる張りの強い器形。最大径は40.0cm。胎土には3mm以下の砂粒と微量の雲母が入っている。焼成はよく内外面とも薄い茶褐色。外面は細かな横ミガキ調整で、底部近くは縦のミガキの前にハケ目調整をしている。胴部上半の内面には指頭圧痕が2段に並んでいる。

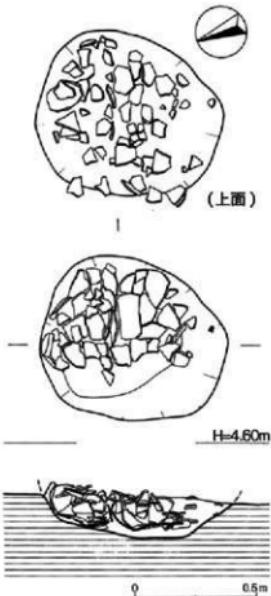


Fig.131 SN03実測図（縮尺1/20）



Fig.132 SN03

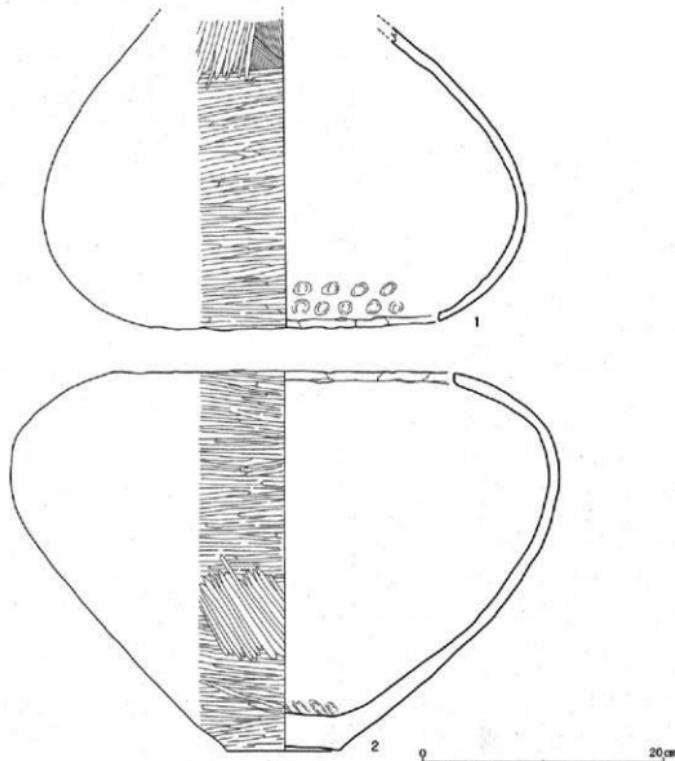


Fig.133 SN03上、下棺（縮尺1/4）

**下棺** 同じように口頸部が打ち欠かれ全形を知ることができないが、底部まで接合復元できた。現在の器高は31.3cm。胴部上位に強い張りがあり、胴下半部は直線的に底部に延びている。最大径45.6cm。胎土の砂粒、雲母の混入などは上棺とよく似ているが、内面の色調が黒灰色で大きく異なる。器面の調整は、外面は横ミガキで、さらに部分的に左斜行のミガキを加えている。内面はナデ。内底部には指頭圧痕が見られる。外底部に黒斑。



Fig.134 SN03下棺

## 第4号墓

SN04

4基の壺棺墓では最も南端に位置している。

墓域の一部が発掘区の排水溝で切られてしまつたが、現在は短軸83cm、短軸68cmの東西に長い楕円形である。この墓域の西端に片寄って2個の中型壺を合わ

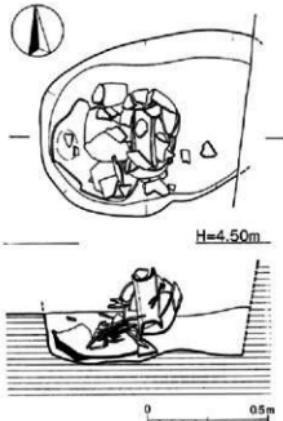


Fig.135 SN04実測図 (縮尺1/20)

せて埋置している。下棺は打ち欠きのない完形品の壺をやや角度を持たせて横たえ、その口頭部を覆うようにして胴部だけの壺を被せて上棺としている。2棺を合わせた長さが60cm程で、しかも下棺の口径が27.6cmしかないことから、被葬者である子供の大きさが限定できよう。埋葬方位はN-70°-W、埋置角は53°。上棺 口頭部の打ち欠きはほぼ水平に行われ凹凸はない。現在の器高は29.3cm。胴部の最大位置は上位にあり、最大径は38.0cm。外面の調整は上部から底部まで横ミガキであるが、部分的にまばらとなり、先に調整したハケ目が観察できる。内面は工具によるナデ調整。高温焼成だったのか底部外面で器面が部分的に弾け飛んでいる。色調は内外面とも暗褐色。胎土には砂粒の他に雲母、黒色粒を含み、外底部だけに黒斑。

下棺 接合し完形品となつた。口径27.6cm、器高45.2cm、底径10.4cm、胴部最大径48.0cm。やや凹凸の目立つ胴部は肩の張りが強く上端はよく締まり、頭部へと続く。境には小さな断面三角形突帯を1条貼り付けている。頭部は直立気味に立ち上がり口縁部で大きく外削し、その上部に断面三角形の粘土板を貼り付け幅広の口縁部を作っている。その上面は中央がやや盛り



Fig.136 SN04上、下棺



Fig.137 SN04

上がり、外傾する口縁外端には上下に細かな刻み目を加えている。器面の調整は丁寧で、頸部内面は横ミガキ、外面は縦のミガキ、胴部外面は横ミガキ、底部近くは縱のミガキを長めに施している胎土には砂粒、黒色粒、赤褐色粒、雲母などを含んでいる。黒斑は外底部から胴部下半にかけて見られる。

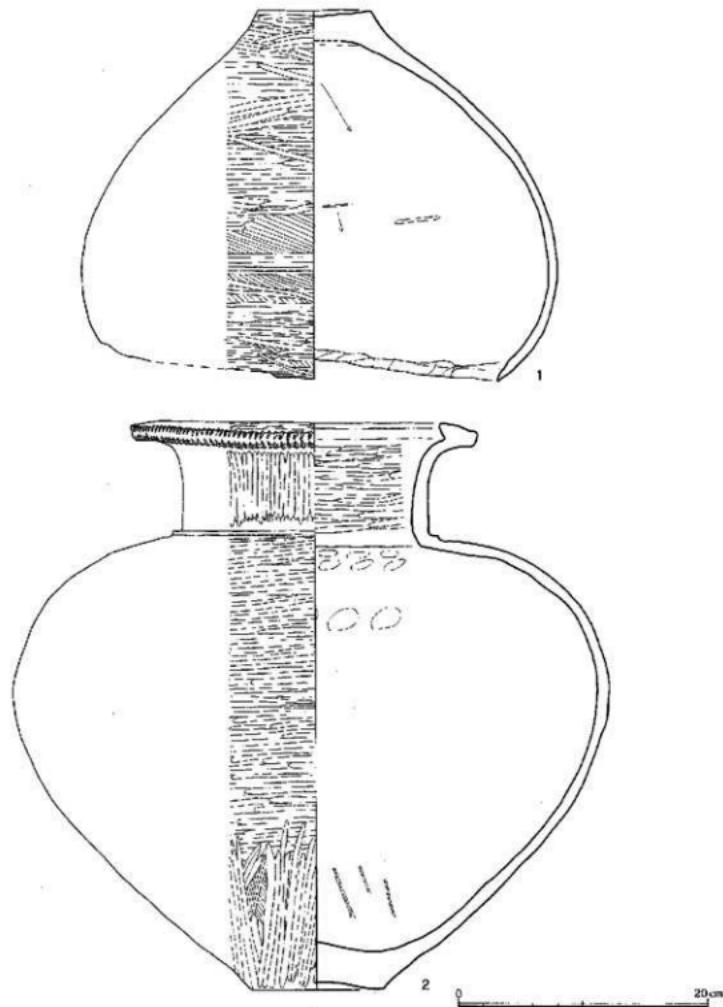


Fig.138 SN04上、下棺 (縮尺1/4)

## 5. 土壙墓 (SH)

第1号土壙墓 SH01 4基の壺棺墓から北西に約20m離れた132グリッドで検出した。周囲には他の壺棺墓や土壙墓はなくSH01だけの単独である。他の壺棺墓と同じように墓壙輪郭の検出前に頭蓋骨が現れ、土壙墓の輪郭を探した。墓壙の北東側1/4が古墳時代の土壙に切られているが、規模は分かる。墓壙は隅丸長方形で長軸150cm、短軸65cm、長側辺は直線、平行ではなく、内側にわずかに凹んでいる。深さは10cmもない。埋葬方位はN-15°-W。埋葬されていた人骨は熟年女性で、南東に頭を置いた仰臥位、残りが悪く下肢骨の大半を古墳時代土壙墓で失っている。両手は折り曲げ、右手は右肩近くに、左手は胸の中央付近に手のひらを広げて置いている。残った大腿骨から脚は折り曲げていたようである。

人骨の取り上げ中に青色のガラス玉3個を発見し、土壙内の埋め土すべてを洗浄したが追加することはできなかった。このガラス玉について

は、福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏に分析をお願いし、その結果を別冊に収録している。また人骨の顔面近くに突帯文土器の壺の口縁部片、埋め土に1のL字形口縁部片が出土地した。直接時期を示す遺物はないが、第7次、10次調査などの類例から弥生時代前期後半を中心とする時期を推測しておく。



▲ Fig.141 SR01検出作業



Fig.142 SR01▶

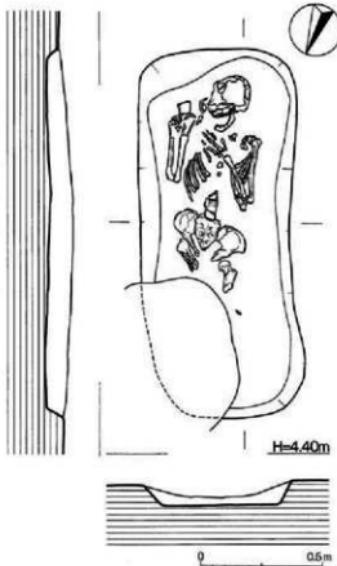


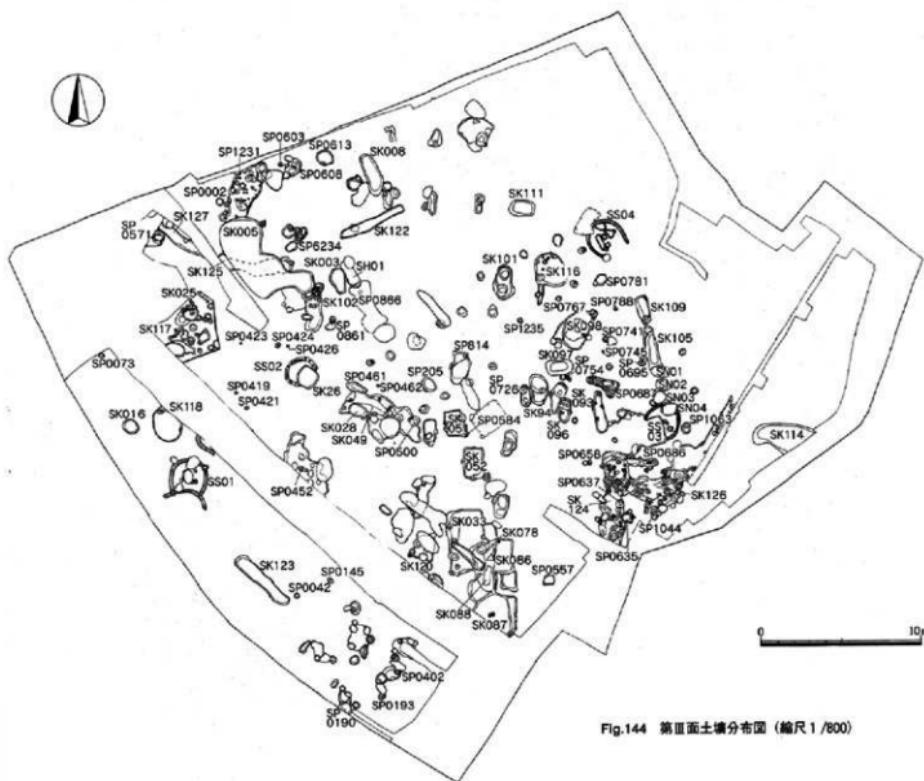
Fig.139 SR01実測図 (縮尺1/20)

#### 6. 土壌 (SK) ・ ピット (SP)

第II面古墳時代の土壌と同じように第III面弥生時代の土壌も発掘区全面にわたって分布しており、偏りや密集していることはない。特にSK114のように古墳時代自然流路の下でも見つかり、弥生時代には微高地の斜面まで利用し、広範囲な生活面を確保していたことを示している。これらの土壌は不整梢円形の平面プランが多く、自然の落ち込みを利用したように見えるが、第10次、12次調査区との全体図を見ると、ほとんどの土壌長軸が磁北方向であることに気が付く。何らかの規格性、意図があったことを示唆しているようである。ここでは土器や動物骨などの遺物が多く、あるいは特殊な遺物が出土した土壌とビットについて記述する。



Fig.143 第Ⅲ面繪出作稿



## 第3号土壤 SK003

I 33グリッドで検出。長軸155cm、短軸96cmの楕円形で25cmと浅い。1は北に片寄って平坦な壇底に横たわっていた。これ以外に大きな土器破片は出でていない。1は円柱状の支脚で底径7.5cm、器高13.7cm。上部はほど直径が小さくなり、頂部は溝状に浅く凹ませている。体部外面は工具による押さえで、凹凸となっている。中空ではないので重要感がある。

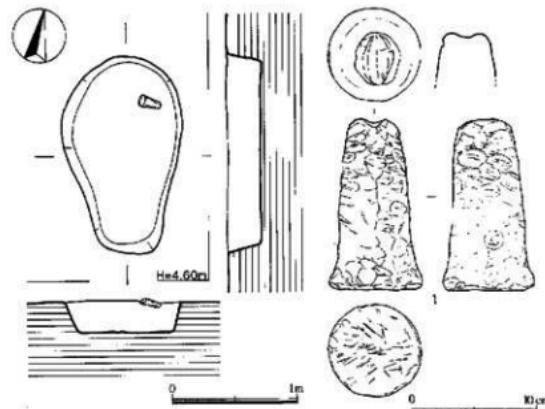


Fig.145 SK003土壤実測図 (縮尺1/40)

Fig.146 SK003の遺物 (縮尺1/4)

## 第5号土壤 SK005

I 33・34グリッドに位置する。溝状の底面に大きな遺物がまとまって出土したことから土壤として取り上げた。精査したが平面プランの輪郭ははっきり掴むことができなかった。

1～3は上器。1は口径35.0cmの壺。口縁部はL字形で体部の器壁に比べ厚みのある作りとなっている。内端部への突き出しは弱い。体部の最大径は口径を超ることはなく張りが弱い。外面調整のハケ目は1cm幅に8本を数える。外面には煤が付着している。内面は黒灰色。焼成良好。2、3は壺。2は倒卵形の胴部に直線的に外反する頸部が付き、さらに小さく外湾してそのまま口縁部となる。外面の横ミガキなど器面の調整は割りに丁寧だが、胴部、頸部のバランスが悪い器形となっている。3は頸部より上半を欠いている。器形は第3号壺棺墓 SN04の上下棺とよく似ている。胴部最大径は46.4cm。胴部外面の横ミガキよりも底部近くの縦ミガキが細く密に施されている。内底部の器面は剥離している。底部だけに黒斑があるので壺棺と共にしている。4は投弾。長さ4.6cm、中央部の径2.5cm。表面に形成時の押圧痕が残る。5は頁岩の剥片。特別な加工はなく、これから石器を作るのであろう。6は緻密な石材で、未製品で片刃石斧か。7は長さ17.1cmの自然石で、3面の中央が窪んでいる。

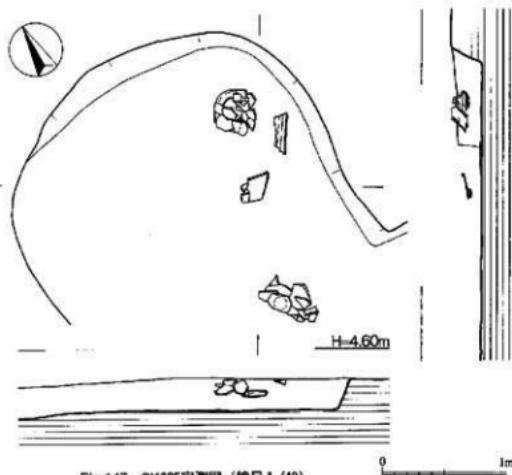


Fig.147 SK005実測図 (縮尺1/40)

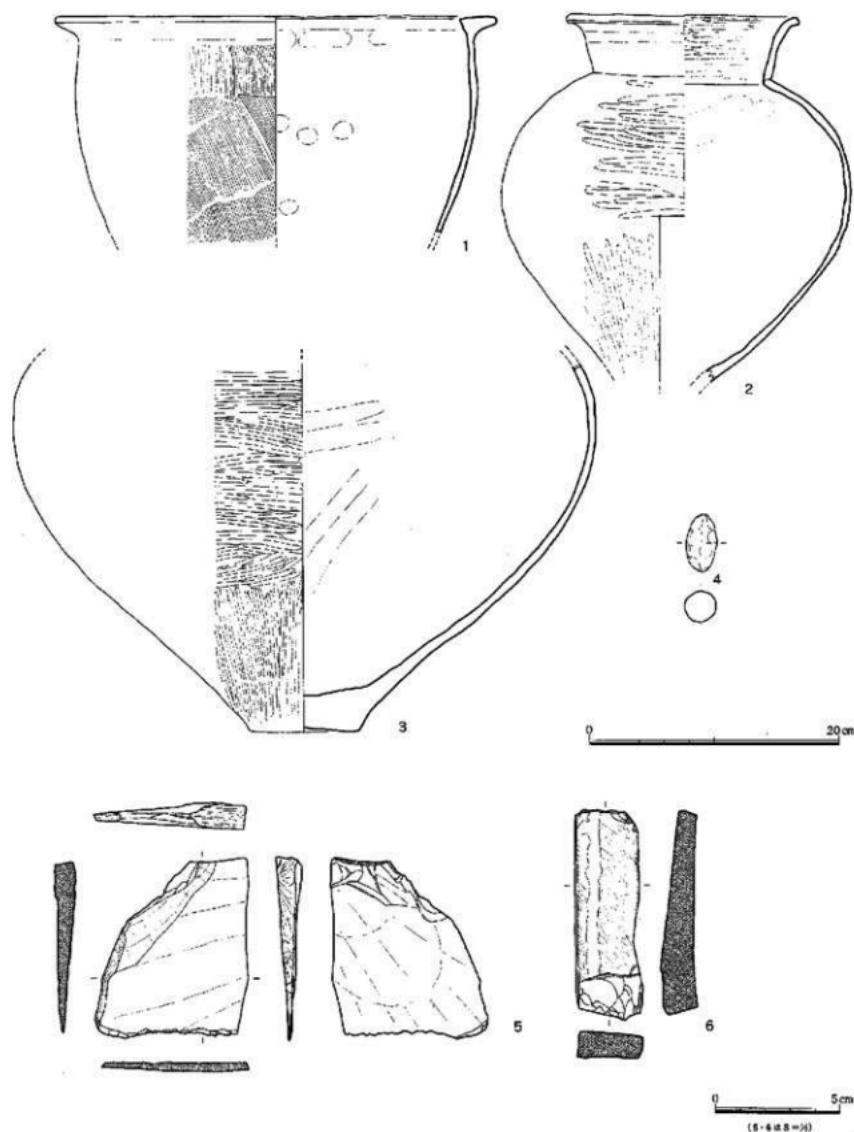


Fig.148 SK005の遺物 (縮尺1/4・1/2)

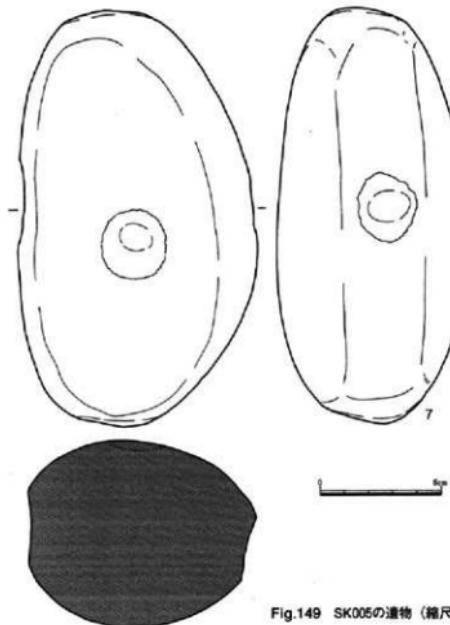


Fig.149 SK005の遺物 (縮尺1/4)

**第7号土壙 SK007** H33グリッドにある土壙。出土遺物が少なかったことから遺構図は図示していない。

1は土器片を円形に打ち欠いて形を整え、周縁を磨いているが整った円形にはなっていない。中央に両面から穿孔し紡錘車としている。図上面はミガキであることから壺の破片か。最大径は3.8cm。厚さ0.7cm。1mm大の砂粒を少量含んでいる。色調は暗褐色。



Fig.150 SK005の遺物 (縮尺1/4)



Fig.151 SK007の遺物 (縮尺1/2)

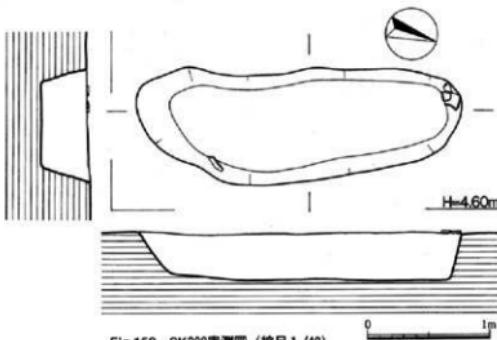


Fig.152 SK008測定図 (縮尺1/40)

**第8号土壙 SK008** 長軸267cm、短軸89cmの長楕円形の土壙でG-H33グリッドにある。深さは中央で35cmと割りに深い。長軸は北北西を向き、壙底6.5cm差で北北西側に傾斜している。1は手捏ねの脚付壺。口径3.6cm、器高3.8cm、底径2.3cm。



Fig.153 SK008の遺物 (縮尺1/2)

**第25号土壤 SK025** 長軸88cm、短軸75cmの不整梢円形、J34グリッドに位置する小さな土壤。2段掘りされており、大きめの破片が中程より上部に重なっている。1は口径37.4cmの壺。口縁下に断面三角形の突帯を貼り付けているが、小さく背が低い。またここで鈍く屈曲し口縁部へと続く。

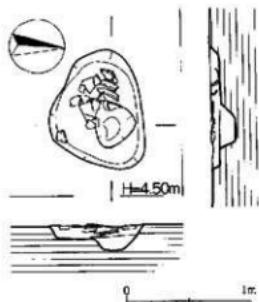


Fig.154 SK025実測図 (縮尺1/40)

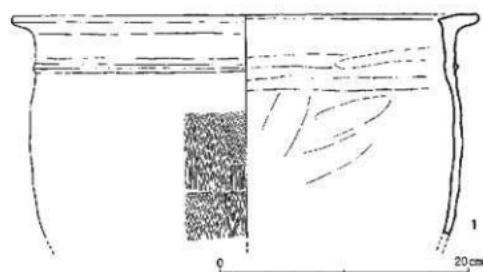


Fig.155 SK025の遺物 (縮尺1/4)

#### 第26号土壤 SK026

北東側の一部が水道管下に入り込み全形を確認していないが、梢円形の土壤であろう。深さは10cmと浅い。土壤は小さいが突尖文期の土器が出土したことから遺構名を付けた。1

は口径16.0cmの無頸壺。Fig.156 SK026実測図 (縮尺1/40)

壺。脇部上半から口縁部にかけての破片。外縁の調整は粗いハケ日の後に横ミガキ。色調は明茶色。脇部上半に凹形の黒斑がある。2は深みのある鉢で口径19.8cm。明赤褐色の色調で焼成良好。やや大きめの砂粒を含む。外面は剥離が激しい。3の内面はミガキで暗褐色の炭化物が付着している。鉢の底部か。

#### 第33号土壤 SK033

K29-30グリッドにある北西—南東方向の細長い土壤。長軸243cm、短軸53cm。北西側は深さ30cmだが南東側は2段掘りで65cmと深くなっている。出土した磨製石斧1点を図示した。1の石材は玄武岩。刃部が折れて失われている。前後の側縁がほぼ平行する形状。残存長13.2cm、最大幅で7.3cm。

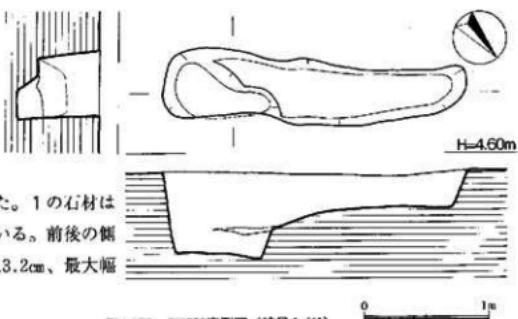


Fig.158 SK033実測図 (縮尺1/40)

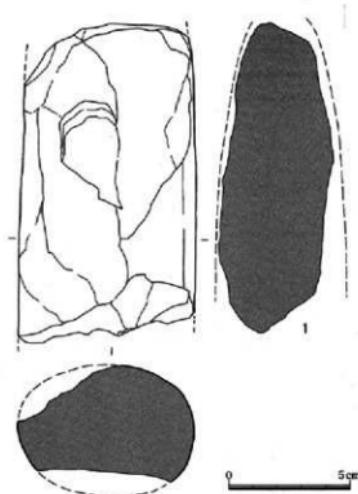


Fig.159 SK033の遺物 (縮尺1/4)

第49号土壤 SK043 J31グリッドの中央から南寄りに位置する。いくつかの土壤が重なっていると思われるが、個別に分離することができなかった。

1は突帯土器の壺。口径18.3cm、底径8.8cm、器高16.5cmでほぼ完形品に近い。胎土には2~5mmの大砂粒が多い。焼成は良好。色調は外面が灰褐色、内面は明茶色。外底部の中央は剥離欠落しているが外縁部の張り出しが弱く円盤状に近い。体部は外に大きく開かず整った砲弾状の器形となっている。体部の粘土接合痕が4か所で観察でき、その幅は約3cmである。口縁端部の断面は丸細くなっている。

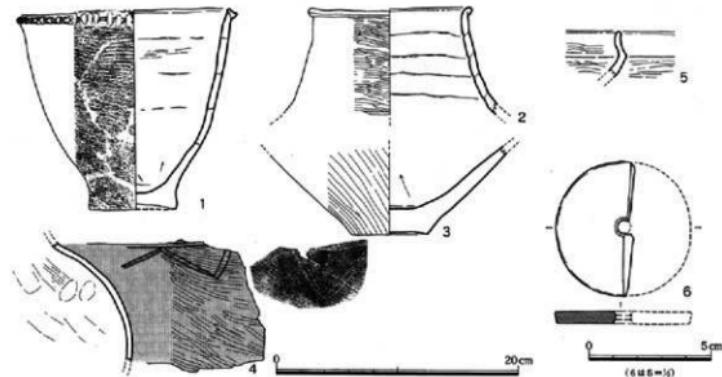


Fig.161 SK049の遺物 (縮尺1/4・1/2)



Fig.160 SK033の遺物

おり、突帯はわずかに下がって貼り付けている。外面の横条痕は体部下半はない。2～4は壺。2は口径13.5cm、内傾する長めの頸部は先端で小さく外溝して口縁部となる。器蓋に5段の繁ぎ目が見られ、ナメ消すなどの調整が不完全である。外面は丁寧で細かな横ミガキを加えている。3は壺の底部。底径6.3cm、厚みのある底部から胴部は大きく開いている。外面は左斜行のミガキ調整。4は胴部上半の文様。頸部との境に2条の沈線を入れ、その下に山形文を連続させるが、施文は稚拙で素朴。外面は丹塗り。5は鉢の口縁部。茶灰色を呈する。6は直径5.5cmの石製紡錘車。

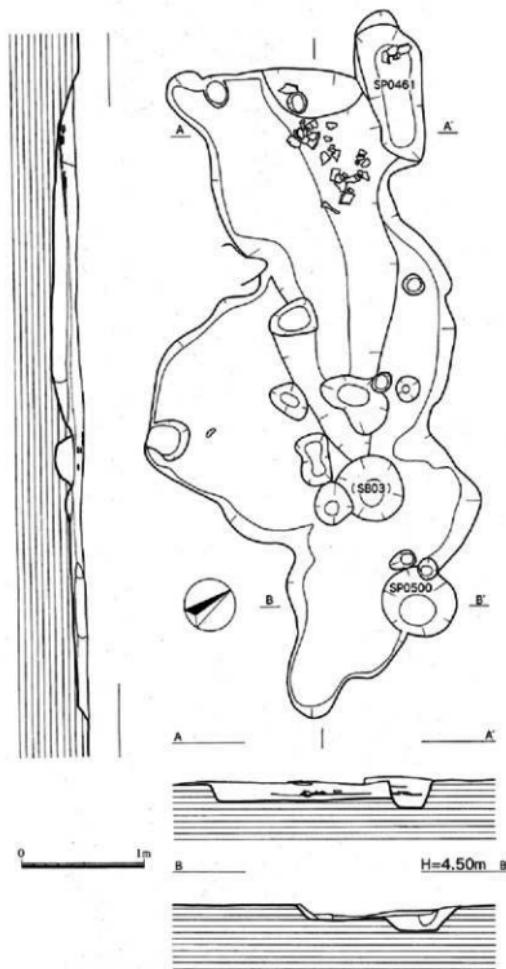


Fig.162 SK049実測図 (縮尺1/40)



Fig.163 SK049の遺物

## 第35号土壤 SK035

出土した石製品1点を図示した。1は磨製扁平片刃石斧。刃部の角度は70度。刃部幅は2.9cm。刃部だけではなく全面をよく研磨しており平滑となる。

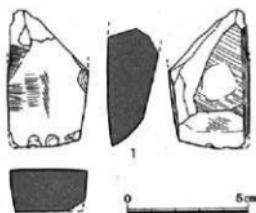


Fig.164 SK035の遺物 (縮尺1/2)

**第51号土壌 SK050** I・J30グリッドにあり、第4号掘立柱建物跡の柱穴などと切り合って輪郭が乱れているが、本来は南北方向の長方形プランであろう。長側辺154cm、短側辺123cm、深さは10cmもない。1、2は如意形の口縁を持つ壺。1は体部上半の張りが弱く、また底部の締まりがない。口径22.0cm、底径7.3cm、器高25.0cm。口縁部の刻み目は口縁下端だけで間隔も開いている。体部内面の底部より1/3に炭化物が付着。2は口径22.0cm、底径7.6cm、器高25.0cm。器形は1とよく似ているが、口縁部の湾曲が強い反面、延びが短いのが特徴。刻み目は上端まで届いている。器壁の断面、凹凸から7段程の粘土繋ぎ目が観察できる。底部中央に径1.5cmの穿孔があり、瓶として使用している。内面下半には炭化物が付着する。3は壺の底部か。外面はハケ目の後にナデを加えている。

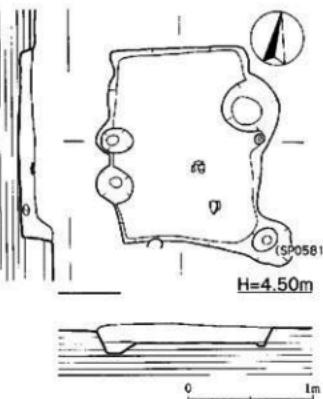


Fig.165 SK051実測図 (縮尺1/40)

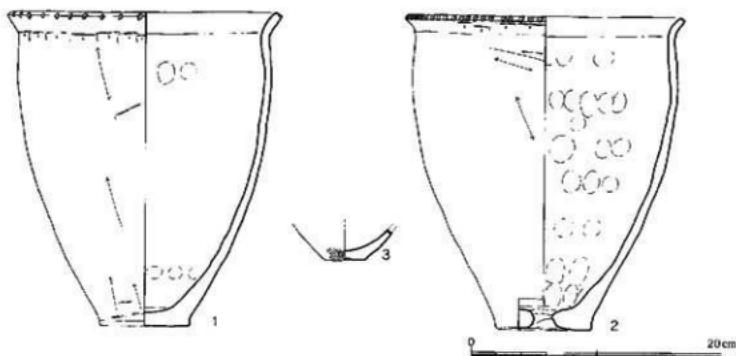


Fig.166 SK051の遺物 (縮尺1/4)

**第52号土壌 SK052 他** SK051の南東隅に長軸がずれているが方向をほぼ同じくして並んでいる。平面プラン、規模とも大きな違いはない。長側辺198cm、短側辺126cmの隅丸長方形。深さは14cm。底面はほぼ平坦。明らかに人工的に掘り込まれた土壌である。1は暗灰色をした石材で、現在長17.0cm、厚さ0.8cm、最大幅6.0cm。刃部は向面から押圧剥離しており、やや粗雑。湾曲している背は一部研磨が見られる。石錐の未製品としたが、刃部が直線的であり、さらに研

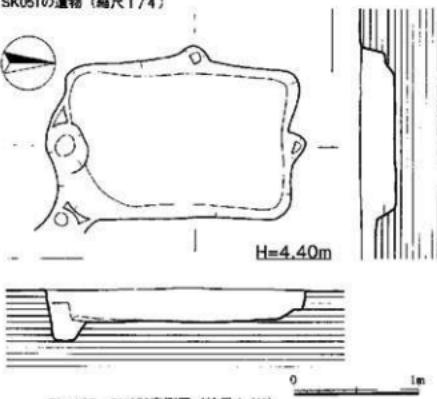
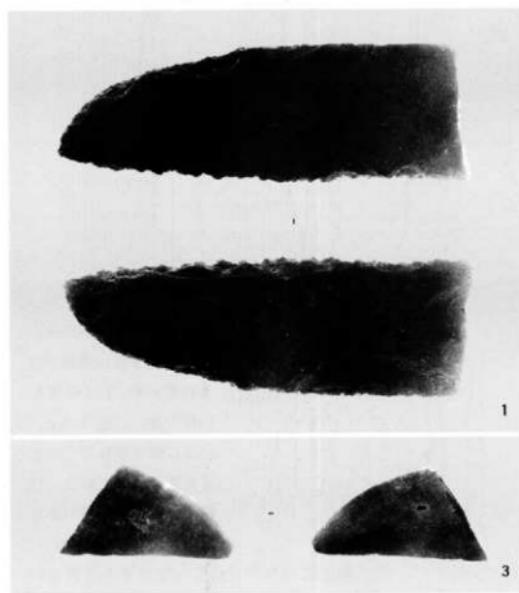
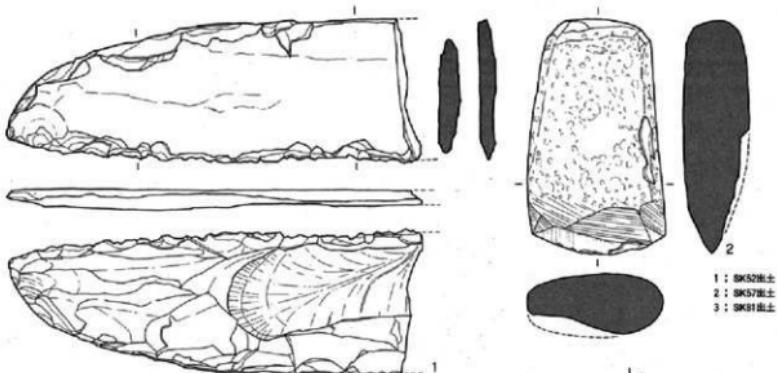


Fig.167 SK052実測図 (縮尺1/40)



磨を加えると薄くなるなど疑問点も多い。2はSK057出土の磨製石斧。長さ10.0cm、刃部幅5.5cm、最大厚2.6cm。身断面が扁平な小型の始刃石斧である。身は敲打痕が残り、刃部はよく研ぎ出されている。図裏の主面は欠損面にも研磨を加えていることから、剥離した後も研磨仕直して使い続けたのであろう。3はSK081出土の磨製石鎌の先端部。全面を研磨しているが、断面では刃部側が厚みがある。背には狭いながら平坦面を持っている。

第78、86～87号土壌 SK078、SK086～087 4基の土壌は2区K28グリッドでそれぞれ一部が重なっている。その切り合いを平面や土層帯で観察しながら掘り下がたが識別できなかった。この周辺は動物骨が集中して出土している。SK078は長軸194cm、短軸115cm前後の橢円形で深さは約30cm。2点の遺物を図示した。1は壺の胴部と頭部の文様部。ミガキ調整の後、境に3本の沈線を巡らせ、この下方に3重の円弧文を付けている。2は石製の紡錘車。直径5.5cm。SK086

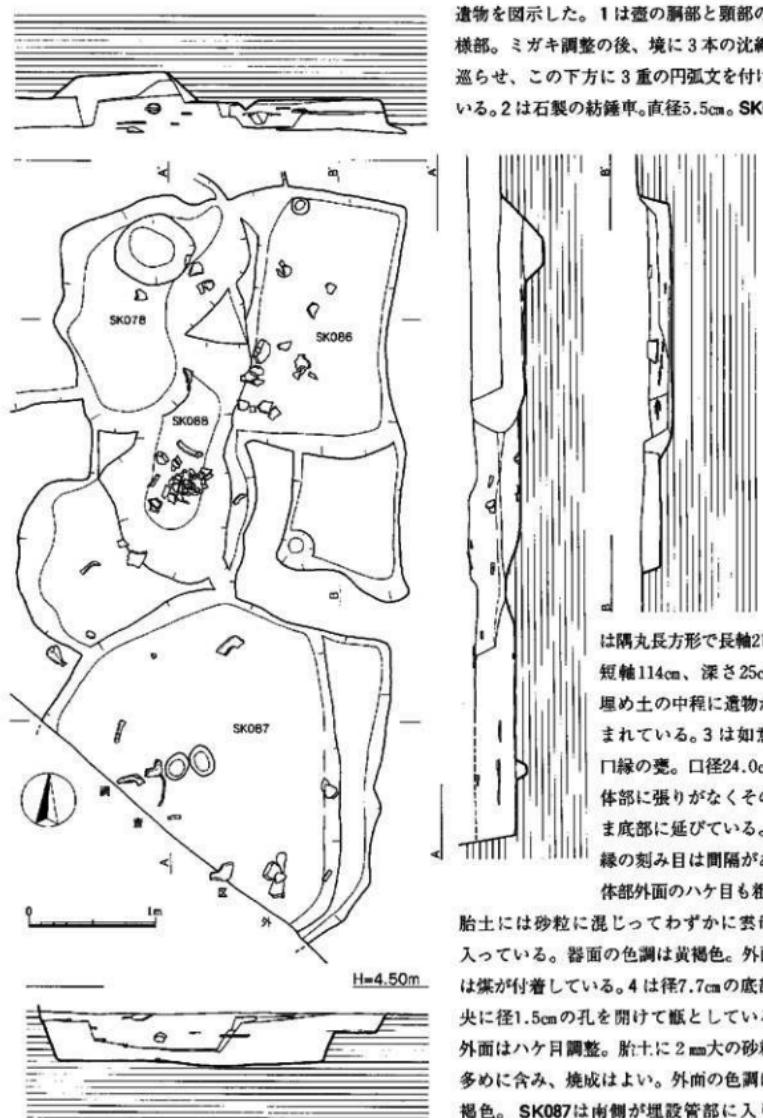


Fig.170 SK078・SK086～088実測図 (縮尺1/40)

は隅丸長方形で長軸210cm、短軸114cm、深さ25cm。埋め土の中程に遺物が含まれている。3は如意形口縁の壺。口径24.0cm、体部に張りがなくそのまま底部に延びている。口縁の刻み目は間隔があり体部外面のハケ目も粗い。胎土には砂粒に混じってわずかに雲母が入っている。器面の色調は黄褐色。外面には煤が付着している。4は径7.7cmの底部中央に径1.5cmの孔を開けて瓶としている。外面はハケ目調整。胎土に2mm大の砂粒を多めに含み、焼成はよい。外面の色調は灰褐色。SK087は南側が埋設管部に入り込

み確認できなかった。おそらく円形に近い大きめの楕円形だろう。残存長軸200cm、短軸290cm、深さ36cm前後。特に動物骨が多く、これらは底より離れて出土している。5は甕の口縁部。小さく湾曲した如意形で、刻み目は口縁上端まで達する。刻み目には工具の木目が付いている。外面は細かな横ハケ目調整。胎土に砂粒、黒色粒、雲母などを含んでいる。外面は黄褐色を呈する。6は甕の体部下半。径6.8cmの底部の外縁は張り出しが強い。外面は丁寧なナデ調整。

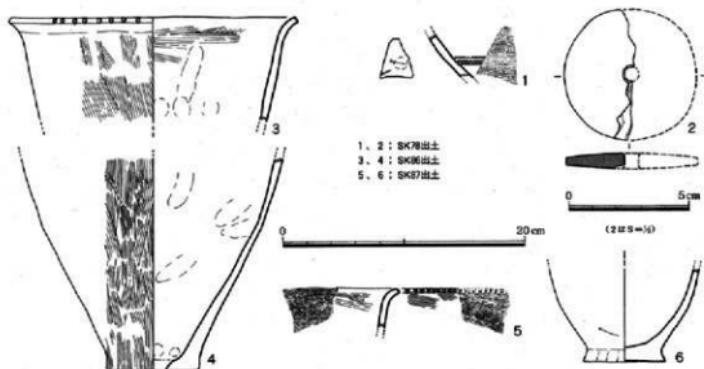


Fig.171 SK078・SK066-088の遺物 (縮尺1/4-1/2)



Fig.172 SK078・SK066-088

**第88号土壌 SK088** SK078とSK087の間に挟まって、その輪郭がはっきりしない。土器や動物骨など遺物は多く、6点を図示した。1は口径22.3cmの甕。如意形の口縁部は弱く短い。口縁端部は断面方形で刻み目は下端だけに密に入れている。体部の張りはほとんどなく、外面のハケ目は何度も調整を重ねている。湾曲部の内面も横ハケ目。2は如意形口縁部の小片。刻み目には工具の木目痕が残る。外面は煤付着。3は甕の底部。底径6.9cm。内面に黒斑がある。4は高坏口縁部の小片。5は高坏の脚据部。底径は26.0cm、ハ字形に開き、脚据部でさらに開いている。脚据部の上方4cmに1条の沈線を巡らせている。この沈線の下方は細かい横ミガキ、上方は継のミガキ。内面は横ハケ目、上方はナデ調整。指頭圧痕がかかるに残る。脚据部に黒斑が半月状に付く。色調は外面が暗褐色、内面は明黄褐色。6は直径4.5cmの土製紡錘車。側縁に沈線を巡らせ図表面に十字に入れている。

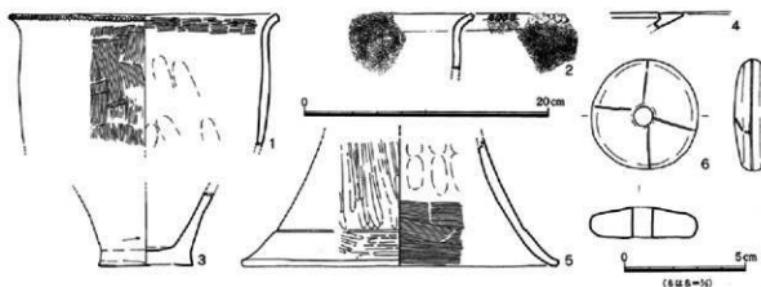


Fig.173 SK088の遺物 (縮尺1/4-1/2)



Fig.174 SK088

第93号土壌 SK093 H28グリッドの南寄りに位置する。長軸256cm、短軸67cmの南北に長い楕円形。深さは20cm前後で、遺物は底よりやや浮いて敷き詰めたような状況であった。1、2は突帯文土器。1の体部は大きく開き、径21.7cmのU縁部となる。突帯は口縁端に接して貼り付けている。断面は三角形で小さい。2は口径24.2cm、内面に粘土繋ぎ目が残る。断面三角形の突帯は背が高い。刻み目は粗雑。3は如意形口縁の甕。接合してほぼ完形となった。口径19.2cm、器高23.2cm、底径8.0cm。細長い体部の器形で、口縁部の湾曲は強いが短い。刻み目は上端まで及び、密に入れている。刻み目には工具の木目痕が残る。外面のハケ目は

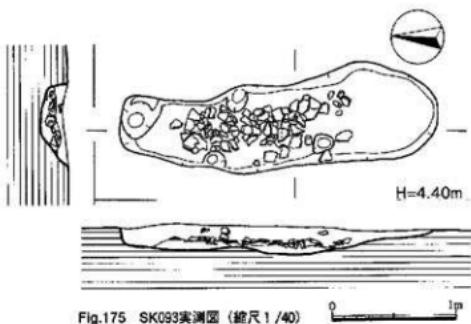


Fig.175 SK093実測図 (縮尺1/40)

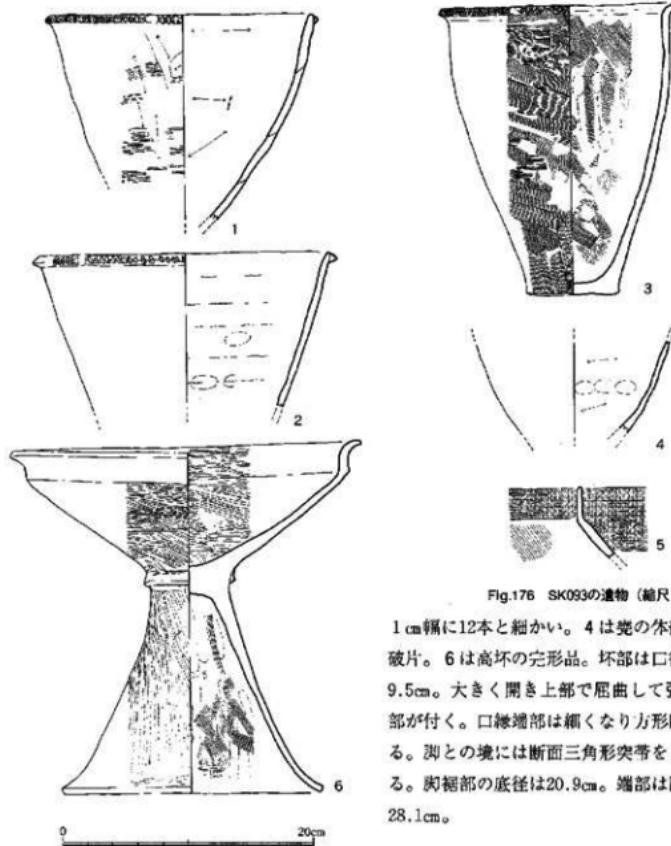


Fig.176 SK093の遺物 (縮尺1/4)

1 cm幅に12本と細かい。4は甕の体部。5は無頭壺の破片。6は高壺の完成品。壺部は口径27.9cm、深さは9.5cm。大きく開き上部で屈曲して強く外湾する口縁部が付く。口縁端部は細くなり方形断面でおさめている。脚との境には断面三角形突帯を1条貼り付けている。脚幅部の底径は20.9cm。端部は断面方形。器高は28.1cm。

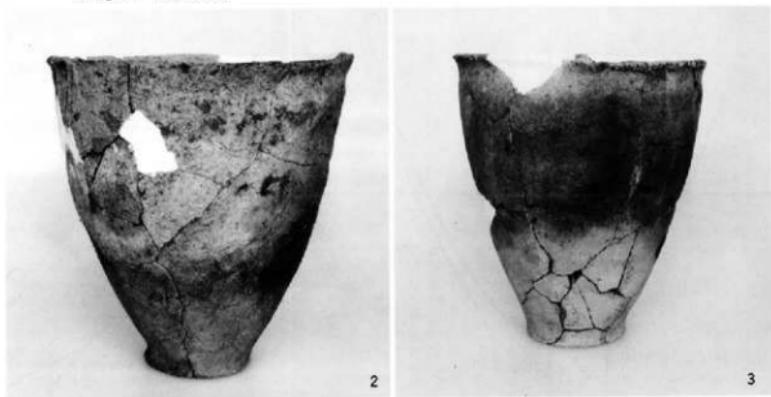
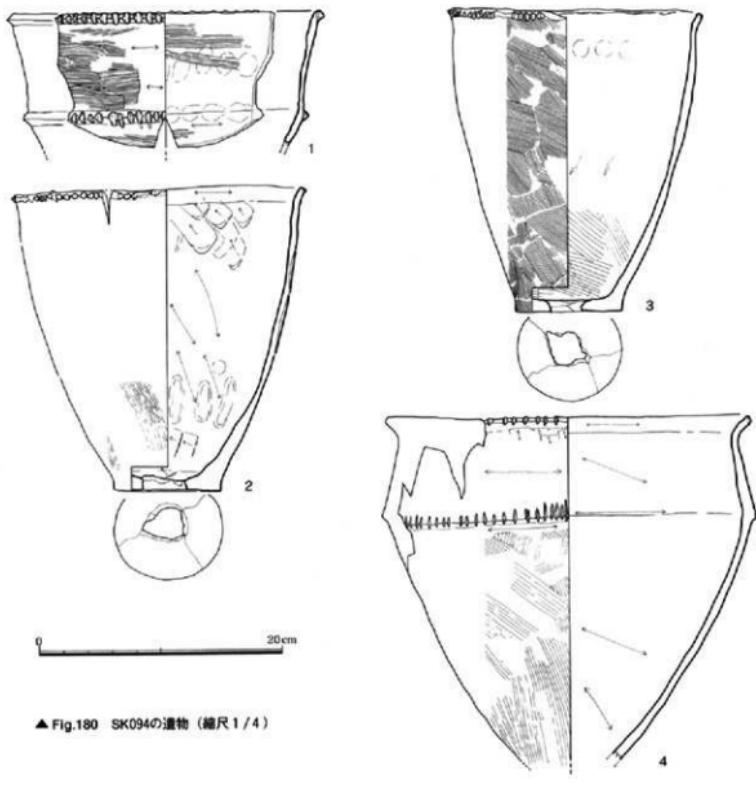


Fig.177 SK093の遺物



Fig.179 SK094

凹凸が目立ち均一な厚さではない。口縁部の突帯は断面三角形で覆い被さるように貼り付けている。2～4は如意形口縁の壺。2は口径40.0cm、口縁部はかすかに渦曲し、刻み目は細い棒状工具で口縁下端のみに入れる。平底の中央に穿孔し瓶としている。3の口縁も同じようにかすかな渦曲。外面は横ハケ目調整。口縁の刻み目は下端のみ。4は口径30.2cm、体部上半で器壁を肥厚、内傾させ、ここにも綾長の刻み目を加えている。



第96号土壌 SK096 I29グリッド、SK094の南東側に位置している。もとは長楕円形の2基の土壌と思われるが、遺物も両方でまたがって区別できないことから連結した土壌として図化している。東側が深く、西側が浅い。1は口径32.0cm。体部が大きく開いていることから器種は鉢か。口縁部は如意形であるが屈曲は強く、刻み目は口縁下端に細く密に入れている。胎土に大きめの砂粒を含み、わずかに雲母も入る。体部外面は横ハケ目、口縁部は横ナデ調整。内面に炭化物が点々と付着している。2は口径34.6cm、底径9.0cm、器高40.1cmの甕。長めの体部は上位にわずかながら張りがあり、ここに2条の断面三角形突帯を巡らせ、口縁端部と同じように刻み目を入れている。口縁部は断面三角形の粘土紐を貼り付け、やや垂れ気味となっている。外面の調整は板状工具のナデ、内底にはナデ調整の際の傷が付いている。黒斑は体部の相対する面に付いている。焼成は良好で、外面の色調は明茶褐色。3は甕の底部、底径8.1cm。

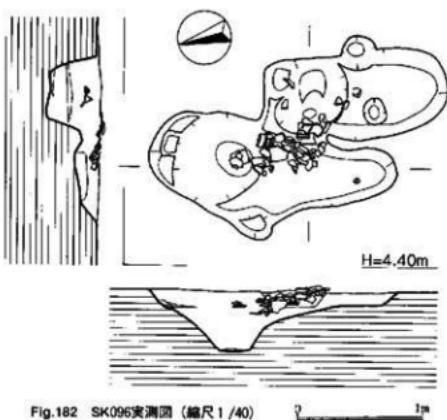


Fig.182 SK096実測図 (縮尺1/40)

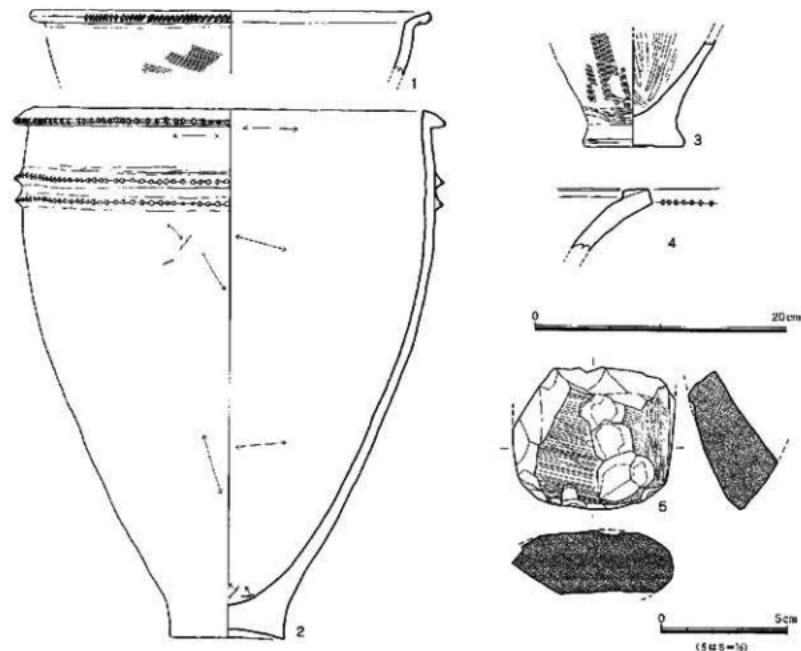


Fig.183 SK096の遺物 (縮尺1/4・1/2)



平坦で外縁へ張り出し、分厚い作りとなっている。4は広口壺の口縁部。内面に粘土を貼り付けて水平で幅広の口縁を作っている。口縁外端の下だけに刻み目。5は玄武岩の太形蛤刃石斧。身は折れ、刃部も潰れている。正面、側縁とも細かく研磨している。

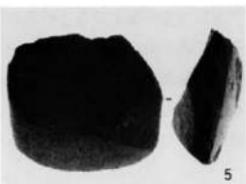


Fig.184 SK096の遺物

**第97号土壌 SK097** SK094の東側にあり、長軸は直交する位置関係。平面プランは隅丸長方形、長側辺は140cm、短側辺85cm、西辺がやや長い。周壁は斜めに掘り込み、底は中央部が最も深く60cmを超す。図示した遺物は埋め土の上部で出土した。1は壺の口頭部破片で口径は30.0cmを測る。厚い器壁の頭部は真上に延び、上端で強く外湾し、その上に粘土板を張り合わせ厚壁した口縁部とする。口縁部は横ナデを加え、外端部は中央をわずかに凹ませその上下端に継の刻み目を入れている。また内端側にも刻み目を入れているが部分的に終わっている。器面の調整は外面がナデ、内面は横ミガキだがあまり顕著ではない。色調は黄褐色を呈する。

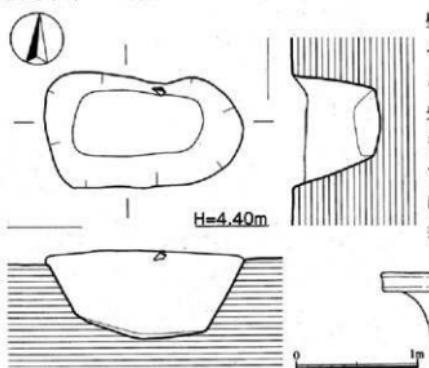


Fig.185 SK097実測図 (縮尺1/40)

Fig.186 SK097の遺物 (縮尺1/4)

第98号土壌 SK098 H29グリッドの東寄りにあり、すぐ西側にSK097が位置している。長軸252cm、短軸168cmの橢円形。壙底は中央に向かって傾斜し、中央では隅丸方形のピット状に2段掘りして76cmと深くなっている。遺物は埋め土の中程から上部にかけて出土し、平面的にはやや南東側に片寄っている。実測、図示したのは土器12点と石製品2点の計14点である。1、2は弥生時代前期後半の如意形口縁の壺。1は口径22.0cm、体部上半にやや張りがあるために口縁部への移行がなめらかな湾曲になっている。外面の調整は細かい継ハケ目。内面はナデで所々に指頭圧痕が残る。外面の色調は茶褐色で部分的に煤が付着している。2の壺は口縁部下方に沈線2条を巡らしている。口径28.0cm、如意形の口縁部は長く、端部はやや厚みを持たせて口唇状に近い

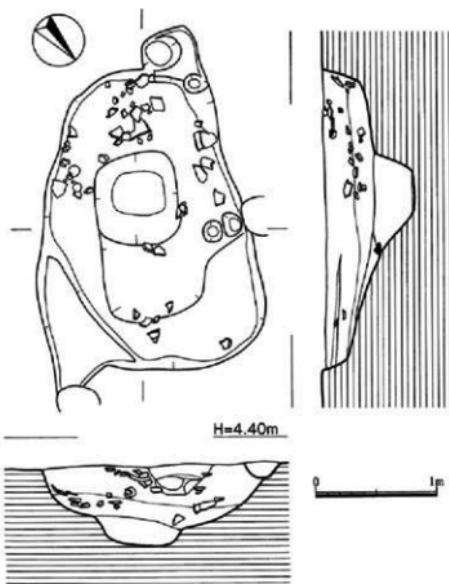


Fig.187 SK098実測図(縮尺1/40)



Fig.188 SK098

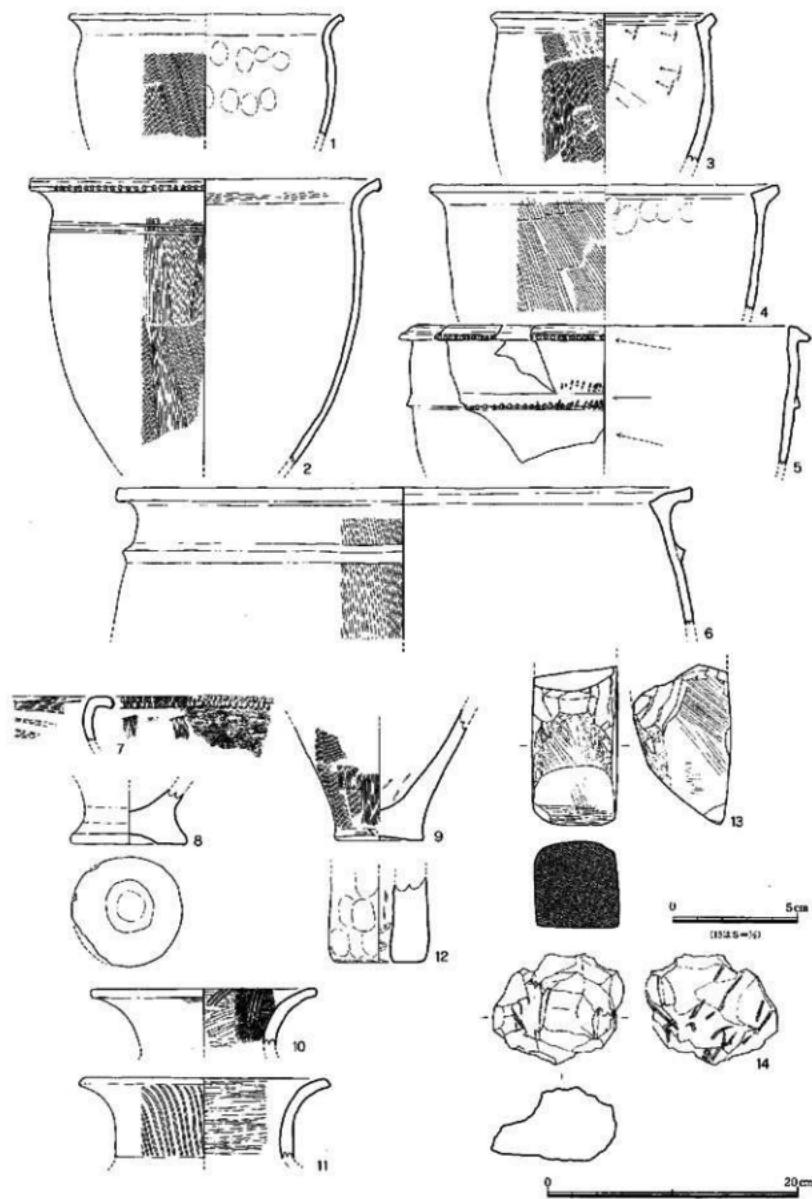


Fig.189 SK098の遺物 (縮尺1/4・1/2)

断面をしている。刻み目は口縁部下端のみで細い棒状工具を当てている。沈線は外面の縦ハケ目調整の後に巡らせている。内外面とも茶褐色で、体部外面に輪郭明瞭な大きめの黒斑がある。3は口径18.0cmのやや小型の甕。口縁部が特徴的で、短くく字形に屈曲している。屈曲部内面は三角形に尖り気味で鈍い稜が付く。器形が小型の割りには器壁が厚い作りである。外面の調整は縦ハケ目。内面は左斜行のナテ調整でその傷幅から3cm程の工具だったのだろう。色調は茶褐色。外面には煤が付き、火熱を受けて表面が彈けている。4も同じようにく字形に強く屈曲した口縁部をもつ甕。口径28.0cm、口縁部は厚みのある作りで、内端部は小さく突出している。この下方には口縁部成形時の指頭圧痕が残っている。5、6は口縁部下方に突帯を持つ甕。5は口径33.0cm、口縁部は断面台形の粘土紐を垂れ気味に貼り付けている。刻み目は口縁部外端と体部突帯に付け、体部突帯の刻み目は梢円形と細長い2種があるが、先に細長い刻み目を入れ、さらに梢円形の刻み目を入れ直している。細長い刻み目は体部にも痕跡がついており、この土器作りの弥生人には気にいらなかつたのだろう。6は口径46.0cmの大きめの甕。口縁部はく字形に強く屈曲する。10、11は壺口類部。10の口縁部内面には3本の沈線を縱に入れている。13は方柱状片刃石斧。14はスサを混入した土製品。断面図の左端のカーブは原形のまま直径6.5cmの中空になる。同じような土製品は第10次、12次、13次調査でコンテナ数箱分出土しており、家屋の土塹、土器焼成の窯業など想定したが結論を得られなかった。

**第101号土壙 SK101** 発掘区のほぼ中央 H30グリッドに位置する。長軸213cm、短軸117cmの長梢円形プラン。壺底は平坦でなく両端でピット状に深く掘り込んでいる。両端は43cm、北端は76cmと深い。遺物は中央より北寄りで埋め土の上部から出土した。

1、2は如意形口縁の甕で体部に1～2条の沈線を巡らせている。口縁部の刻み目はどちらも小さく浅い。  
1の口径は22.0cm。2条の沈線は縦ハケ目の後。3は蛤刃石斧の破片。

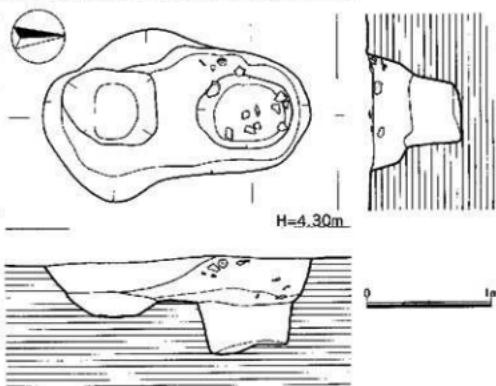


Fig. 190 SK101 実測図 (縮尺 1/40)

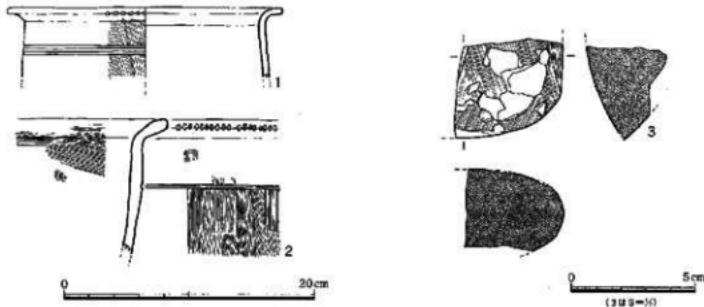


Fig. 191 SK101 の遺物 (縮尺 1/4・1/2)

## 第102号土壤 SK102 F32グリ

ッドの西寄りに位置する。北側で多くの小ピットと重なって輪郭がはっきりしないが、長軸298cm、短軸96cmの長楕円形とした。1は突帯文壺の底部で径は7.2cm、外面は1cm幅に8本の横条痕。2の口縁部は小さく湾曲する如意形、口径20.0cm、刻み目は口縁下端のみ。3は口径36.0cmの深鉢。体部反転部か

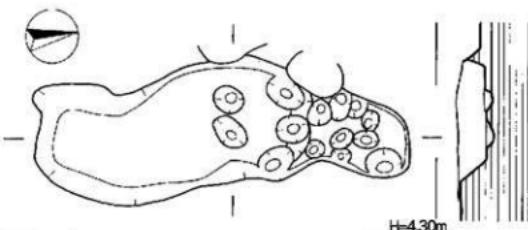


Fig.192 SK102実測図 (縮尺1/40)

0 1m

ら大きく外湾して口縁部を作る。反転部外面は鈍い稜となる。調整は内外面とも横ミガキ。色調は暗褐色。4は無頸壺。口径14.0cm、明茶褐色。強く内湾する胸部上半から小さく外湾して口縁部となる。外面は横ミガキ調整。5は壺。胸部と頸部との境に沈線を入れ、この下方に3本沈線で文様を描く。

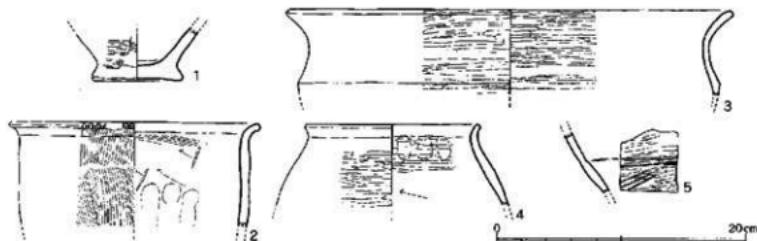


Fig.193 SK102の遺物 (縮尺1/4)

**第105号土壤 (SK105)** G28グリッドとH28グリッドにまたがる細長い土壤。微高地の周縁に近い場所にあり、SK109の南側に連なっている。平面プランは溝状の長楕円形で長軸324cm、短軸77cm、深さは中央で25cm。遺物は壺内の南寄りに集まり、埋め土の下部から上部まで包含されている。突帯文土器の壺と壺計4点を実測、図示した。1、2は突帯文壺の体部下半で器形、胎土など共通する特徴を持っている。1

の底径は8.0cm。

平底で外縁の張り

出しは弱い。外底

には段違いに2本

の圧痕がある。植

物の茎か。木葉底

と同じような土器

製作時の意図的な

ものか。胎土には

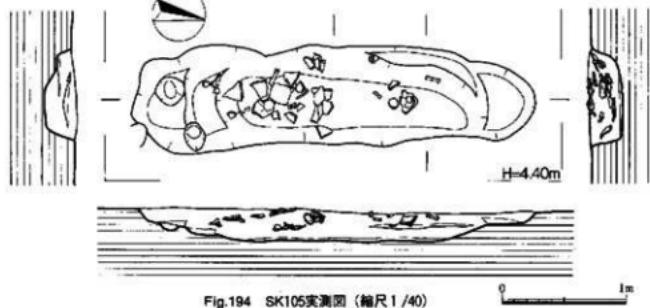


Fig.194 SK105実測図 (縮尺1/40)

0 1m

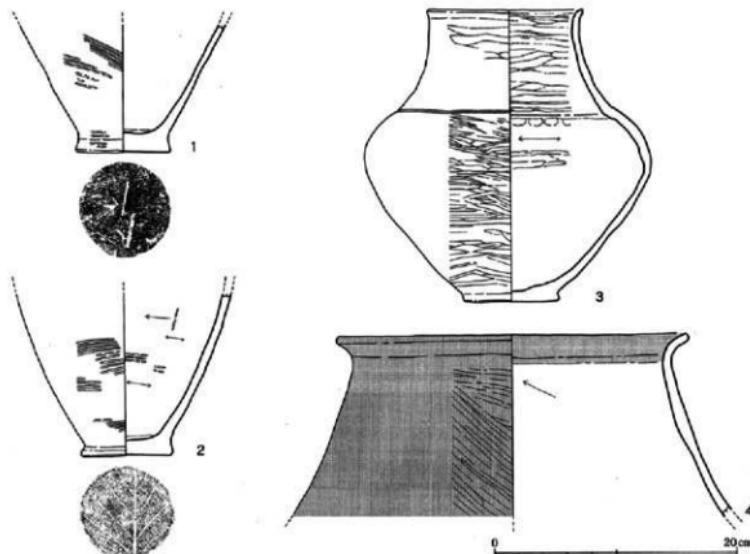


Fig.196 SK105の遺物 (縮尺1/4)



Fig.196 SK105の遺物

やや大きめの砂粒を含んでいる。外面の色調は赤みを帯びた明茶色、内面は明茶色。調整は外面が1cm幅に3~4本の横条痕。内面はヘラ状工具のナデ調整。2は底径7.7cm、平底には木葉痕がつく。底部外縁はナデで丸みを持たせている。体部は1に比べ開きが弱く、丸みのある器形となっている。外面の調整は横条痕、内面は横条痕の後にヘラ状工具のナデを加えている。胎土には石英、長石の砂粒と赤褐色粒を含んでいる。焼成はよく、色調は明茶褐色を呈する。3は壺。接合して完形品となった。口径12.9cm、底径7.8cm、器高24.0cm。底部はきれいに整った円盤状ではないが、厚みがある。頸部は上位に最大径がある。23.5cmの最大径は、口径よりも大きい。頸部は直線的に内傾し、

小さく外反して口縁部となる。頸部との境には沈線を巡らせているが、一気に一周するのではなく3か所に繋ぎ目がある。色調は灰茶色。調整は外面は横ミガキ、頸部は胴部に比べ幅広く、不明瞭である。4は中型の壺で口径29.0cm、内傾する頸部から口縁部へは段がなく大きく外湾する。外面は横ミガキの後に丹塗り、口縁部の内面まで及んでいる。内面は工具によるナデ調整。点々と丹塗りの滴がついている。

第109号土壤 SK109 G28グリッドの北寄り、SK105の北に長軸方向と同じようにして列をなしている。長梢円形で長軸168cm、短軸78cm、深さ28cm。壇底は南側でわずかに深くなっている。実測、図示した土器は、北端の上部で出土した。1は突帯文土器の壺。口径21.4cm、底径7.3cm、器高20.8cm。底部は平底で外縁の張り出しが強い。体部は外に開きそのまま口縁部となる。突帯は断面三角形、刻み目は粗雑。体部の調整は横条痕の後に継の擦刷痕。内面も同じ調整を施す。

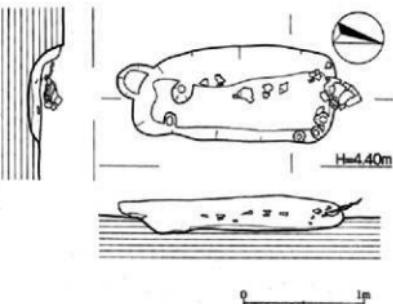


Fig.197 SK109実測図 (縮尺1/40)

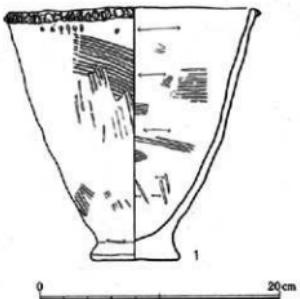


Fig.198 SK109の遺物 (縮尺1/4)

第111号土壤 SK111 G30グリッド北寄りに位置する。隅丸長方形の平面プランで長側辺162cm、短側辺98cmで、深さは66cm。埋め土は上下2層に別れ、遺物は主に上層に包含されている。1は口径44.0cmの中型壺。L字形の口縁部は厚みのある作りで、外端は断面方形、内端は先丸に突出する。上面は微妙な凹凸があり、わずかに内傾している。口縁下方の突帯は、小さな断面三角形。2は26.6cm、直角に屈曲する口縁部は肥厚し、内端は小さいが異様に突出している外面は継ハケ目調整。胎土は精良土



Fig.199 SK109の遺物

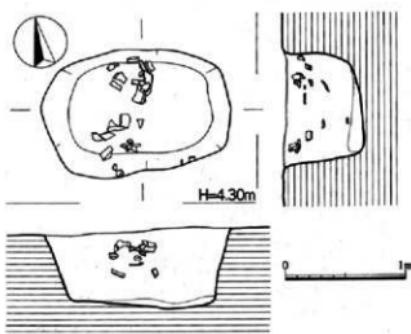


Fig.200 SK111実測図 (縮尺1/40)



Fig.201 SK111

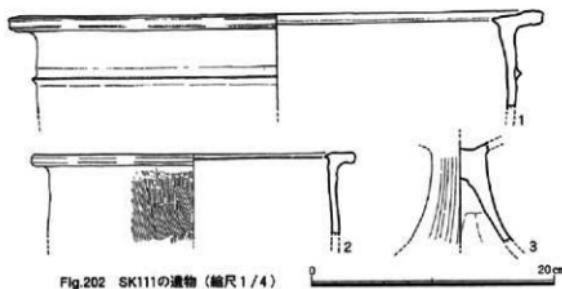


Fig.202 SK111の遺物 (縮尺1/4)

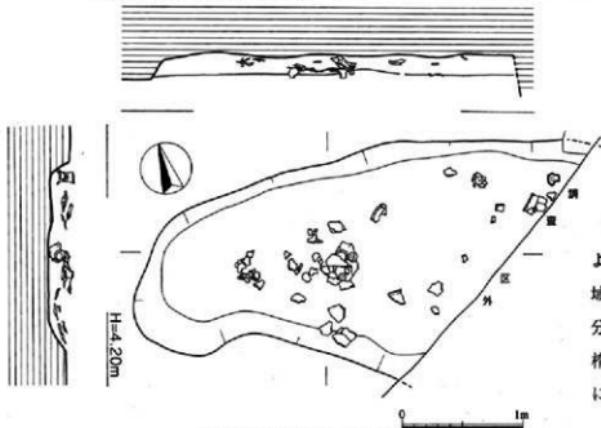


Fig.203 SK114実測図 (縮尺1/40)



Fig.204 SK114

に近く、きめ細かい。  
3は高坏脚部。胎土には3mm大の砂粒を含み、焼成はよい。色調は灰褐色。外面の調整はヘラ状工具の縦ナデ。坏部内面はナデ調整。

#### 第114号土壙 SK114

G26グリッドに位置している。古墳時代自然路SL01の下で検出した。先にも記したがSL01は微高地周縁部の流れであることから、生活空間の範囲を限るものと推測していたが、土壙の存在によって弥生時代にはその領域がさらに広かったことが分かる。平面プランは不整形円形で、南側が発掘区外に出ている。

1は蓋。口径30.0cm、器高10.7cm、摘み部径6.3cm。外面の調整はハケ目、1cm幅で6本を数える。摘み部は中央が凹んでいる。2は口径23.6cm、体部は丸みがあり、口縁部は強く屈曲し、内面は鈍い稜が付く。3は口径7.3cmの小壙。扁球状胴部はやや下方に最大径9.4cmがくる。4は壙の上半部。口径11.8cm、頸部外面は左斜行のハケ目の後に縦のミガキを加え、暗文風

の効果が出て  
いる。胸部は  
丁寧ではない  
がヘラミガキ。  
体部内面は板  
状工具のナデ  
調整。頸部と  
の境には小さ  
な断面三角形  
の突帯を貼り  
付けている。

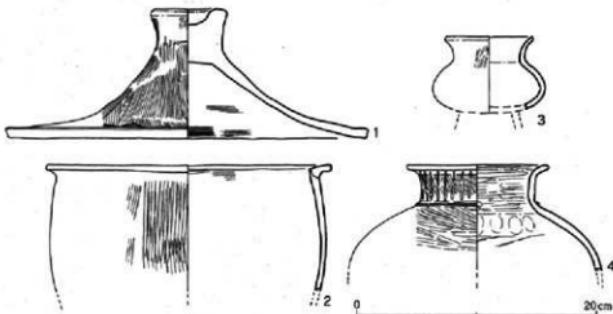


Fig.205 SK114の遺物 (縮尺1/4)

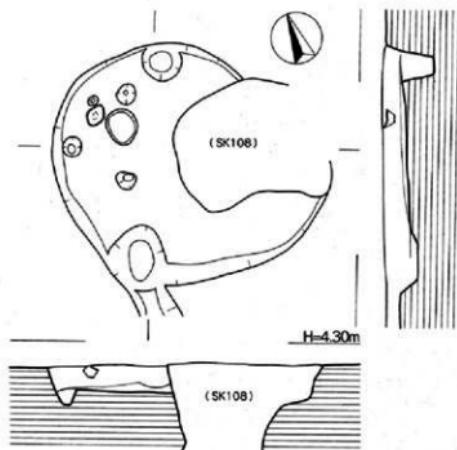


Fig.206 SK116実測図 (縮尺1/40)

第116号土壙 SK116 G30グリッドに位置する。232cm×202cmの円形土壙で、東寄りが古墳時代SK108に切られている。実測、図示は1点にとどまった。1は壺の底部。ややいびつで径は10.4cm×11.0cm。胴部は大きく開いている。胎土には大きめの砂粒の中に雲母、黒色粒が混じる。外面はあばた状に剥離している。内面はハケ目が部分的に残っている。焼成はよく、色調は茶褐色を呈する。

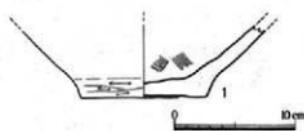


Fig.207 SK116の遺物 (縮尺1/4)

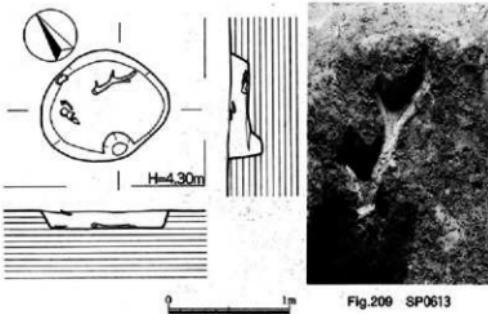


Fig.208 SP0613実測図 (縮尺1/40)

第613号ピット SP0613 H33グリッドに位置する。90cm×110cmの楕円形プランで壙底に鹿角と弥生時代前期後半の甕破片が出土した。鹿角は長さ39cm、角座が残り第3枝まで出ている。特別な加工痕はないが、先端は尖らせた可能性もある。

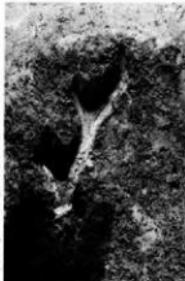


Fig.209 SP0613

## 第119号土壌 SK119 遺構図は略している。

1は口径32.0cm、L字形口縁の甕。上面は幅広く、わずかに内傾している。口縁下の断面三角形の突帯は器壁に対して小さい。2はいわゆる長台形扁平斧。刃部は左右対称ではない。刃部は使用によって潰れて丸くなっている。

第120号土壌 SK120 K30グリッドに位置する。数個の小ピットと重なり輪郭がはっきりしないが、隅丸方形、東側辺175cm、北側辺108cmの大きさとした。横底は東側が一段深くなっている。3、4の口縁部は小さく外湾する如意形。口縁下端に刻み目を入れる。3の色調は茶褐色、刻み目は細かく密。4も茶褐色、内外面ともハケ目調整。5は黒曜石製品で基部はわずかに凹む。

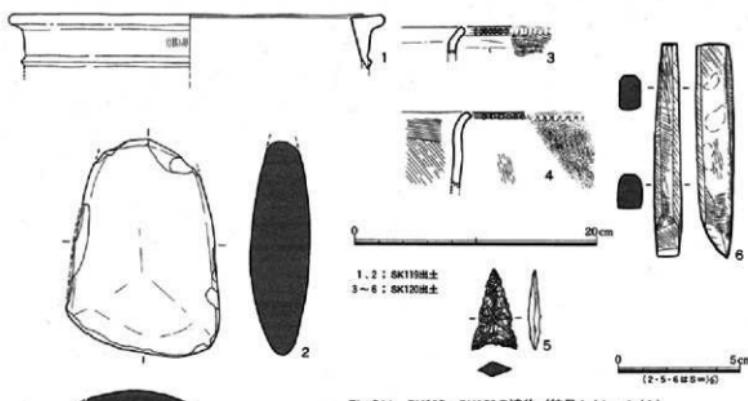
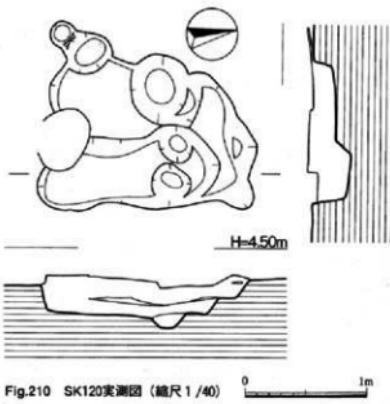
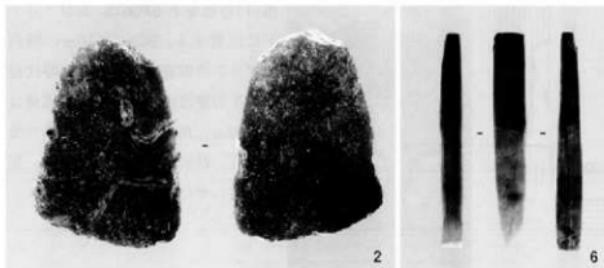


Fig.211 SK119・SK120の遺物 (縮尺1/4・1/2)



6は整状の柱状片刃  
石斧の完成品。全長  
8.81cm、幅1.11cm、  
刃部角は35度。全面  
が細かな研磨で平滑  
となる。

Fig.212 SK119・SK120の遺物

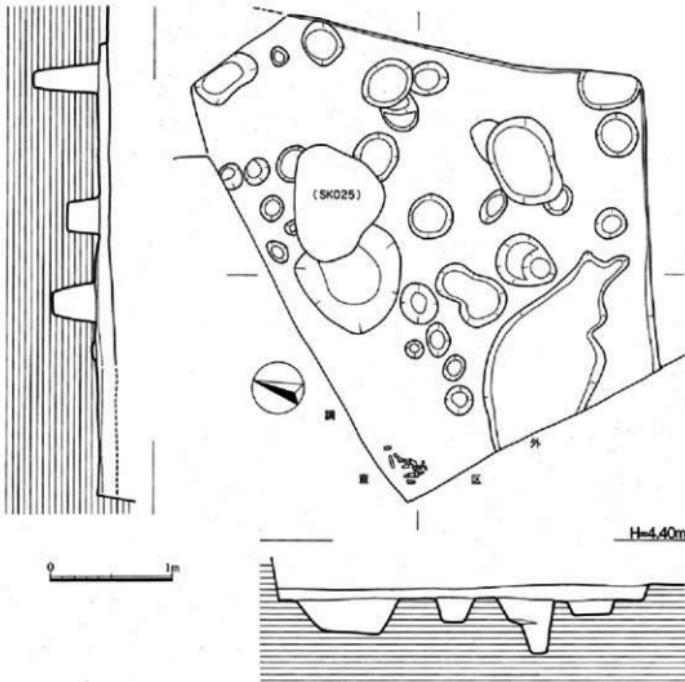


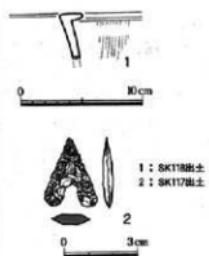
Fig.213 SK117実測図（縮尺1/40）



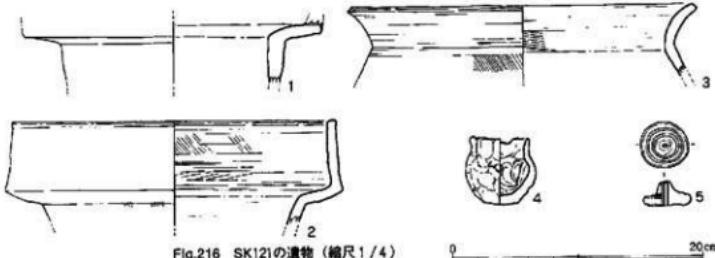
Fig.214 遺物取り上げ作業

## 第117号土壌 SK117

J33グリッドに位置する。検出当初は堅穴住居跡を想定して発掘作業を進めた。しかし北西側がコンクリート基礎や埋設管などで搅乱を受け、壁のコーナーも鈍角に開くことから、資料整理の段階で土壤とした。しかし、周辺に比べ塙内にピットが密集し、かつ床面のように平らであることから堅穴住居跡の可能性も残しておきたい。また東隅から発掘作業壁にかけて大きめの骨がまとまって出土し、同定の結果ヒトの大腿骨であった。墓壙のような埋葬施設の痕跡はなかった。1は小さなL字形口縁の甕。2は無茎凹基式の黒曜石製打製石錐。

Fig.215 SK117-SK118の遺物  
(縮尺1/4・1/2)

**第121号土壤 SK121** 発掘現場では、細長い落ち込みを溝状遺構（SD）としていたが、明らかに溝としての機能ではなく、また極端な長さでもないことからここでは土壌として記述する。SK121はSD01の遺構名をつけていたもので、遺構図は掲載していない。5点の遺物だけを図示したが、これらは弥生時代後期以降の遺物であり、第Ⅱ面遺構に入れるべきであるが、発掘作業で見逃したこともあるってここで取り上げる。1、2は二重口縁壺、2は口径26cm。3は口径28.0cm。4は手捏ねの小型壺。口径5.2cm、器高5.3cm。胴部外面に径4cmの黒斑がある。5は径3.8cmの土製紡錘車。団表面には2本の沈線を巡らせ、中央を盛り上げている。色調は茶褐色。1mm程の砂粒が露出している。



第122号土壤 SK122 H32グリッドに位置する。

黒色粘質土の上部で検出した遺構なので、遺構全体図には網点で示しています。幅66cm、長さ420cm、深さは33cmを測る。1は肥厚したL字形口縁の壺。口縁部の下まで煤が付着。2は壺の底部で径は7.5cm。外面は1cm幅6本の継ハケ目。



Fig.217 SK122の遺物 (縮尺1/4)

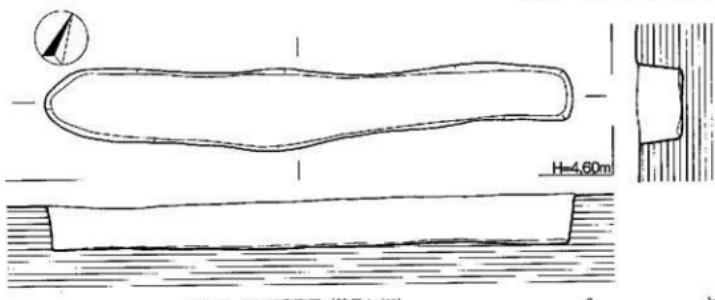


Fig.218 SK122実測図 (縮尺1/40)

**第123号土壤 SK123** 同じように黒色粘質土の上部で確認したもので、31グリッドのMラインに沿っている。幅71cm、長さ425cmと細長い。遺物の出土は少なく、実測可能な破片は1点にとどまった。

1はL字形口縁の壺。L字形口縁の上面は凹みわずかに内傾する。外端部断面は横ナデで丸くし、内縁は尖り気味にして鈍い稜となる。通常のように口縁部の横ナデの前に体部外面に継のハケ目を施している。内面は工具によるナデ調整。胎土に2mm大の砂粒を含み、焼成はよい。



Fig.219 SK123の遺物 (縮尺1/4)

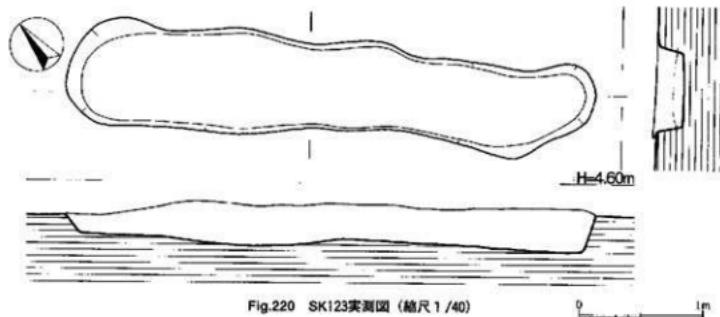


Fig.220 SK123実測図 (縮尺1/40)

第124号土壌 SK124 I28・29グリッドで検出した。幅130cm、残存長546cm、深さ20cmの細長い土壌。弥生時代中期前半を中心とした土器が出土した。3点の土器と石斧1点を図示する。1はL字形口縁の小片。口縁上面は平坦で、内端は断面三角形状に尖っている。2は壺の底部、底径は6.9cmを測る。外底中央は凹み、体部への移行部は強く括れている。外面は継ハケ目調整、内面も部分的にハケ目と工具の傷が残る。色調は茶褐色で一部に煤様のものが付着している。3は壺底部で径は5.2cm。4は

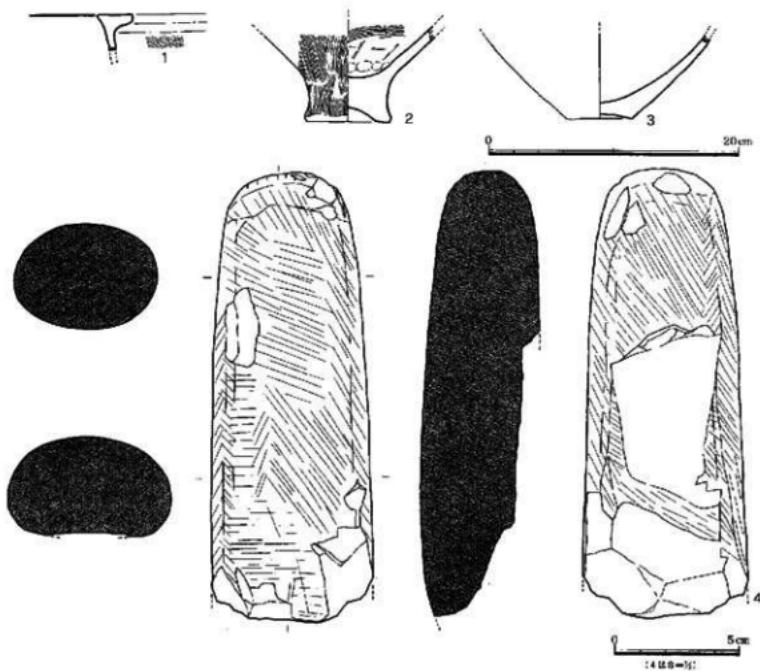


Fig.221 SK124の遺物 (縮尺1/4・1/2)

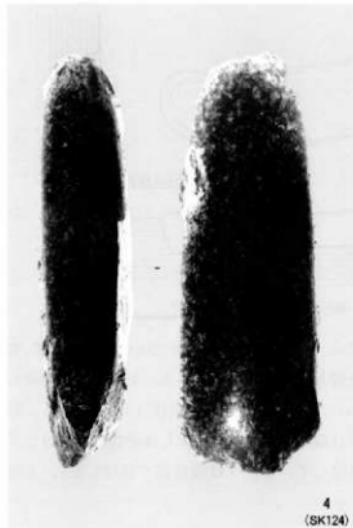


Fig.222 SK124・SK125の遺物

刃部を欠いているが長大な磨製石斧で、880gと重量感もある。現在長17.9cm、最大幅6.5cm。頭部は丸みがあり、両側縁がほぼ平行する形状で、いわゆる厚斧と呼ばれるように丸く厚みがある断面となっている。全体に丁寧な研磨が施され光沢がある。

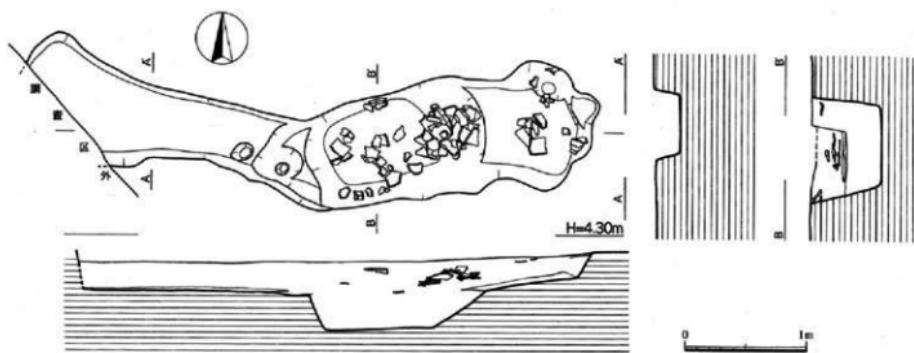


Fig.223 SK125実測図（縮尺1/40）

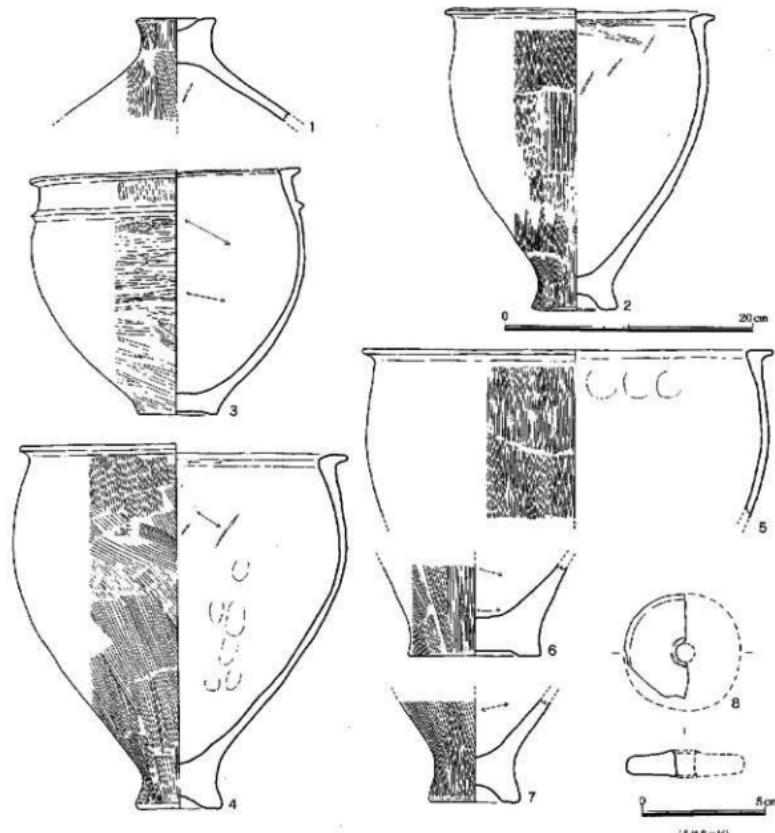


Fig.224 SK125の遺物 (縮尺1/4・1/2)

第125号土壌 SK125 I33グリッドの西寄りにある。埋設管で途切れているが、西から延びるSK121から連続する遺構であろう。ただ東寄りは一段深くなってしまっており、遺物が集中していることから、この部分だけが一つの土壌となっていた可能性がある。弥生時代中期前半の大きめの破片が多く、2個体が接合完形となった。

1は蓋、上部摘みの径は6.3cm。中央部が窪んでいるが円形ではなく方形に近い。外面は縦のハケ目調整。内面はナデ調整で炭化物が付着している。外面の色調は茶褐色。2は3とよく似た器形をしている。口径21.8cm、底径6.9cm、器高24.0cm。倒卵形の体部にく字形に屈曲する口縁部がつく。口縁部は厚みがあり、上面は丸みを持たせ内傾している。口縁内端は鈍い稜が付く。底部の括れは強く、底部の中央は窪んでいることから、断面はハ字形に外に開いている。内外面とも茶褐色だが内面中程は帶状に暗褐色となり、その下方は黒灰色に変色している。3は口径21.8cm、底径6.5cmで、体部は丸みがあり19.8cmと低い器高となっている。体部はハケ目の後に横ミガキを加えている。口縁部はL

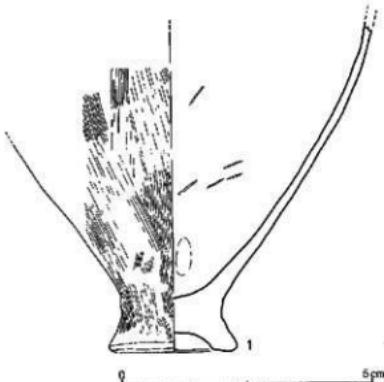


Fig.225 SK126の遺物 (縮尺1/4)

字形で内端は小さく突出している。体部下半に黒斑。4は口径26.2cm、底径7.0cm、器高29.1cmで、2より一回り大きい器形であるが、体部に張りがあり、底部の括れも一層強いことから丸みが強調されている。5は口径34.0cmと大きめの甕。6、7は甕の底部。6は外底の凹みはないが、周辺だけが平坦で蛇の目状となる。7の内底部には炭化物が付着している。8は土製紡錘車。復元直径4.6cm。胎土は通常の土器と変わることはない。

**第126号土壙 SK126** I27グリッドに位置する。1は弥生時代中期前半の甕下半部。底部の括れが強く、外底の凹みも深い。底径10.1cm、外面はハケ目調整。中位より上部に煤付着。内面は全面に炭化物が見られる。

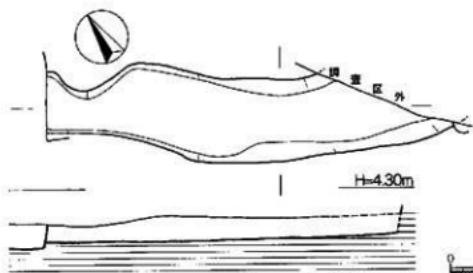


Fig.226 SK127実測図 (縮尺1/40)

**第127号土壙 SK127** I28グリッドにある。この中からシカの角の破片が見つかる。

### 小ピット(SP)の調査

土壙とピットとの区別は大きさや用途によって明確に区別しているわけではない。出土遺物が少なく、また規模が小さい遺構についてピットとして遺構名を付け、その遺物について記述する。なお出土ピットについては遺構配置図に位置を示している。

**土 器** 1は甕の胴部、最大径が中位にあり15cm。2は径7.4cmの底部中央を穿孔し瓶に転用している。3、4は投弾。4は長さ4.2cmで図下端部は黒斑がある。5、6はSP073で出土した。同一個体の可能性が強いが、ここでは二つの番号を与えている。L1径17.0cm、胴部は長めの倒卵形で頭部は内傾が強く、口縁部は小さく外湾して先丸におさまっている。外表面は細かな横ミガキを行い、さらに丹を塗布している。6は底径10.2cm、胴部との境は括れているが部分的に粘土を貼り

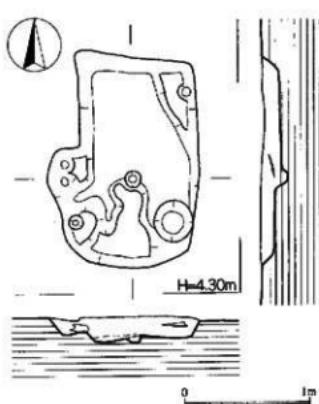


Fig.227 SP814ピット実測図 (縮尺1/40)

付けている。7は広口壺。頸部は朝顔状に大きく開き、幅広い水平な口縁部を乗せる。内端部は断面三角形に突出する。頸部には縦のミガキを加え暗文風の効果が出ている。8は半底の甕。底径7.8cm、内面には炭化物が帯状に付く。9の突帯は口縁よりわずかに下方に貼り付けている。外面は横条痕、内面は板状工具の擦刷痕。10、11は煮肩部の文様。10は2条の沈線が先。11は上下の沈線の間に羽状文を入れる。12は鉢。口径20.6cm、器高15.4cm、底径7.8cm。完形でないので推定であるが耳は3か所にあり、そのうちの一つには刻み目が施されていた。体部外表面は横条痕、内面は板状工具の横ナデ、

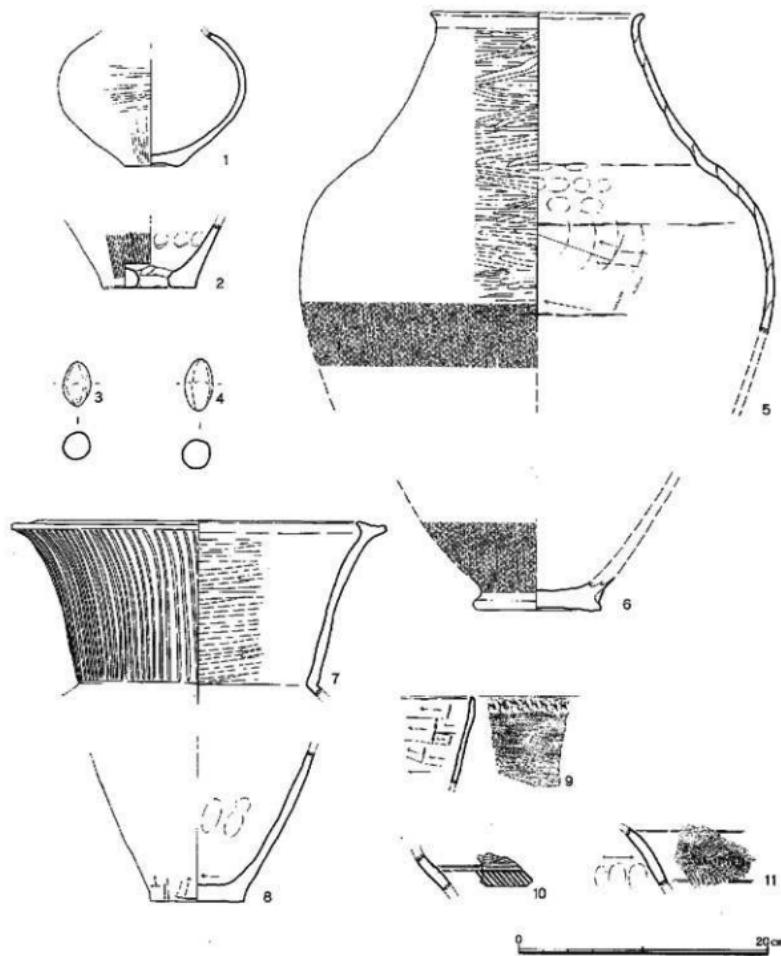


Fig.228 ピットの遺物 (縮尺1/4)

その傷が付いている。調整法、胎土、焼成など他の突帯文土器と共にしている。13は如意形口縁の細片。14は口径21.0cmの直口壺。内外面とも丹塗り。15は小型の甕。成形は雑だが如意形の口縁、外部の調整など特徴は備えている。外面の煤は側面だけで反対側ではない。16は復元径5.0cmの土製紡錘車。17の突帯は口縁端より離れて貼り付けている。外面は横条痕。18は口径28.0cmの高壺。壺内面は横ミ

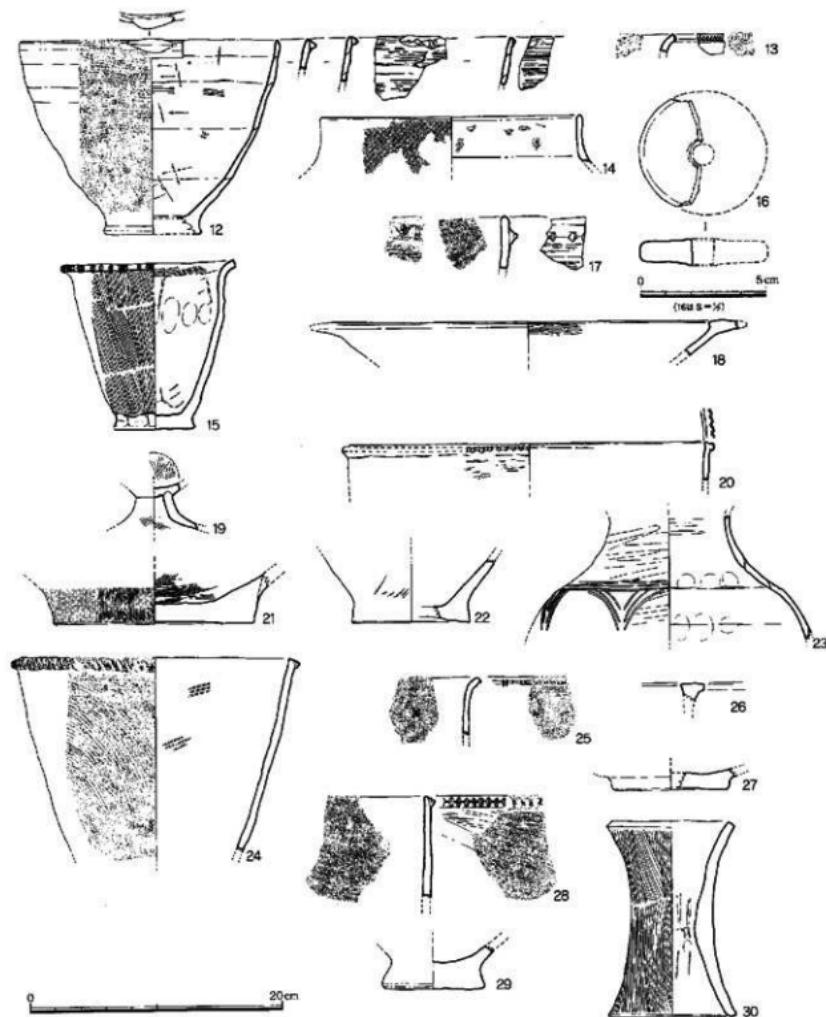


Fig.229 ピットの遺物 (縮尺1/4・1/2)

ガキ、口縁上面はわずかに盛り上がる。19は土師器の脚。第Ⅱ面造構の掘り残し。20は口径28.4cmの壺。口縁端部が小さく内側に傾き、その外側に断面台形の突帯を貼り付けている。貼り付け方が特徴的である。21は壺の底部。底径16.0cm、外面は丹塗り。22は底径9.4cm。23は壺の胴上半と頸部。外面はミガキの後に施文する。3本の沈線はきれいな平行線ではない。また一周してれている。文様は3重の連弧文だが簡略化している。24は口径23.0cmの突帯文の壺。内面に炭化物附着。外面の条痕は左斜行。25は如意形口縁。刻み目は下端に細かい刻み目を入れている。26は肥厚した短いL字形口縁。27は壺底部、底径9.2cm。28は直立する口縁部に断面三角形の突帯を貼り付ける。29は壺底部。径8.2cmで外縁へ張り出す。30は器台、底径10.1cm、器高15.7cm。整った器形となっている。

石製品 31は扁平な磨製石鎌。両端を欠いており現在長は4.07cm、最大幅1.73cm。身の形状は丸みがあり銳利な加工となっている。32は細い棒状で全面が摩耗しているが、用途不明。33は無茎凹基式の磨製石鎌。石材不明。研磨が完全ではない。現在長4.56cm。34は細身の打製石鎌で長さ4.41cm。35は磨製石鎌、断面は薄い菱形で鎌が通り、一方の刃部は面取りしている。関がわずかに残っていること

から茎があったのだろう。

36は岡上端が断面方形で下端は円形に加工している。

37は緑色凝灰岩か、縱長の破片。長さ7.67cm。38は丸い自然石を使った凹石。39は先端を欠く。両縁は銳利に研ぎ出されている。三角形の石鎌か。40は外湾刃の石包丁。小孔が2個あるが、復元した原形からすると一方にずれ、かつ接近しきであることから、研ぎ減らしによって小さくなり、新たに穿孔したものと推測した。

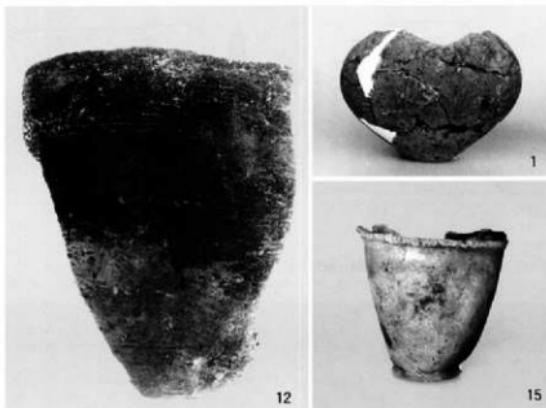


Fig. 230 ピットの遺物

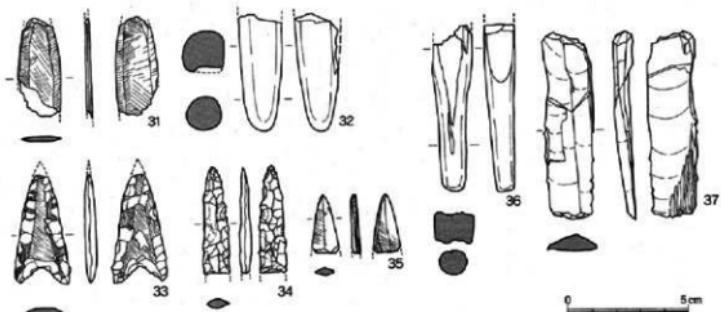


Fig. 231 ピットの遺物 (縮尺1/2)

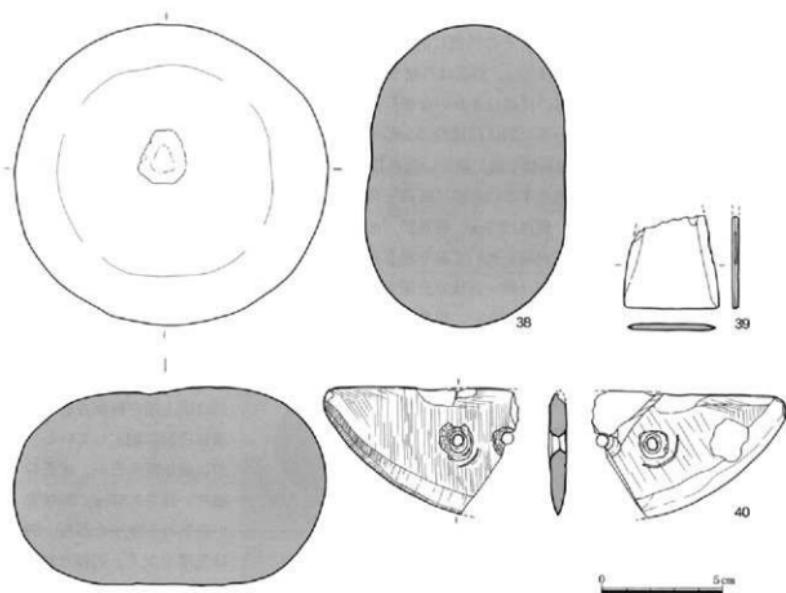


Fig.232 ピットの遺物（縮尺1/2）



Fig.233 実測作業

## 第6節 第IV面（弥生早期～前期）の調査

### 1. 円形溝

第10次調査で第IV面とした青灰色粘質土は、第13次調査区では顯著ではないが、31グリッドより北西側に薄く堆積していることから、第III面の調査完了後に掘り下げる遺構の検出作業を行った。この結果、径10cmに満たない小さなピットが無数に現れ、これらの中には、円形や方形に辿ることができるものがある。おそらく円形溝が削平され、溝中の小ピットだけが残ったものと考えられる。ここでは溝を検出し、明らかに円形となる4基について記述する。



Fig.234 圓形溝の検出作業



Fig.235 圓形溝の分布図 (縮尺1/300)

第1号円形溝 SS01 西端の発掘区、L32グリッドで検出した。平面プランは円形で南側に開いている。この部分で「つ」字状の別の溝を切っている。溝の幅は19cm、深さ8cm。溝底は極端な凹凸ではなく、また小ビットもない。大きさは長軸258cm、短軸236cm。内側には大小7個のビットがあるが出土遺物から同時期とする

ことはできない。

一方の切られてい  
る溝は、幅17cm、  
深さ5cmとよく類  
似し、大胆に推定  
すると第10次調査  
の第4号円形溝  
(SS04) のような  
隅丸方形プランと  
も考えられるが、  
両端が途切れてい  
ることから遺構名  
を付けていない。  
溝から遺物は出土  
しなかった。

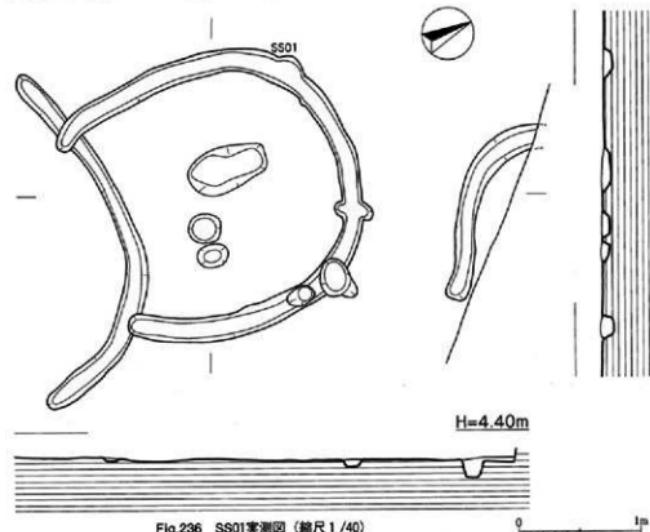


Fig.236 SS01実測図 (縮尺1/40)



Fig.237 SS01

第2号円形溝 SS02 J33グリッドの南寄りに位置する。この周辺には第IV面の精査で検出した小ピットが密集している。SS02も溝は一部だけ、径10cm前後的小ピットが連続し、これらを繋ぐと円形になることから円形溝とした。東側を

SK026と重なっているが、平面プランは165cm×188cmの不整円形。内側にはピットはない。また時期を判断できる遺物は発見できなかった。SK026との先後関係を確かめようと慎重に掘り下げたが、SK026の埋め土上に円形溝の小ピットはなかった。おそらくSK026が円形溝を切っていると判断した。

ところで第10次調査以来、円形溝の検出に努め22基以上を確認した。円形溝には①溝だけのもの、②溝底に小ピットが並ぶもの、③溝がなく小ピットで囲んだものの3様がある。③は②の溝部分が削平され、塘底の小ピットだけが残ったものとし、あえて円形溝の遺構名を与えた。①についても発掘作業で底に打ち込んだ丸太杭の跡と思

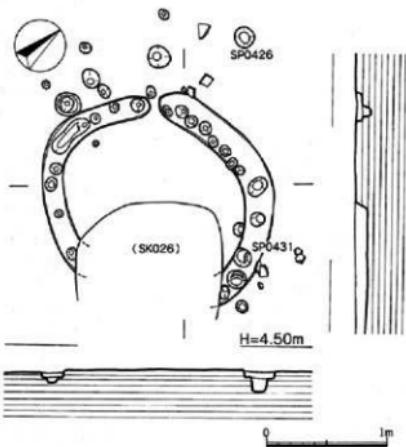


Fig.238 SS02実測図 (縮尺1/40)



Fig.239 SS02

わず小ピットを見逃したり掘りすぎたもので、本来は丸太杭が打ち込まれていたものと考えた。しかし、家畜小屋などの囲いであれば、溝を掘る必要はなく丸太杭を打ち込むだけで目的は十分に達成できただけである。なぜ溝が必要だったのだろうか。確かに円形溝も他の遺構と同じように50cm以上は削平されていることからすれば、先端を尖らせていない丸太材や板材でも深い溝に差し込むだけで、ある程度の強度は確保でき便利だったと思われる。丸太杭加工の手間と溝掘削にかける労力のどちらを優先するか、あるいは①、②と③は別目的の遺構なのか、まだまだ不明な事が多い。

**第3号円形溝 SS03** 微高地の周縁部に近いH27グリッドとH28グリッドに跨っている。大小のピットと重なっているが、細い溝が円形に辿れることから円形溝とした。SS02からは東に22m離れている。平面プランはいびつな円形で、269cm×228cmを測る。溝幅は14cm、深さは12cmである。時期を直接示すような遺物は出土していない。

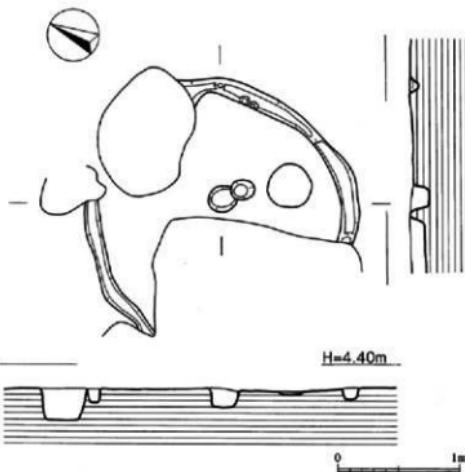


Fig.240 SS03実測図（縮尺1/40）



Fig.241 SS03



Fig.242 SS04

第4号円形溝 SS04 G29グリッドに位置し、SS03より北に10m離れている。平面プランは円形に近い梢円形、南側は溝が途切れて開いている。長軸267cm、短軸232cm、深さ8cm。SS04も出土遺物がなく、時期を決定することができない。

先にも記したが同じような小ビットは発掘区の中央部は希薄であるがJ32グリッドを中心にして集中しており、ここには細い溝も見られ、これらは円形、あるいは長方形に繋がり同じような遺構になる可能性が強い。円形溝の目的を確定はできないが、生活空間の中で占める場所が限定されていた遺構であることは間違いない。

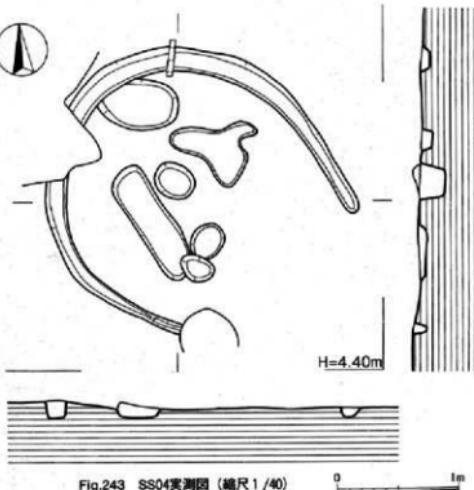


Fig.243 SS04実測図 (縮尺1/40)

## 第3章 おわりに

### 1. 小 結

ここでは再度円形溝の問題点について触れておく。円形溝は雀居遺跡の地山である青灰色粘質土の第IV面に掘り込まれており、その内の一つが弥生時代前期中頃の堅穴住居跡SC07（第10次調査）に切られ、また溝から出土する遺物から弥生時代前期～早期の時期を推定した。管見では類例は福岡市博多区板付遺跡、鹿児島県国分市上野原遺跡を知るのみである。板付遺跡では環溝から北西に約100m離れた第16次調査G・H-5区で2基が確認されている。直径2.3m前後で雀居遺跡例とよく類似している。刻み目突帶文土器が出土しており、調査報告書では倉庫的な性格が推測されている。近くには円形堅穴住居跡1棟、掘立柱建物4棟、貯蔵穴群、墓地があり、板付遺跡では最初の集落と考えられている。上野原遺跡は縄文時代早期の集落遺跡として有名だが、近世に至る複合遺跡である。発掘調査既報によると第IIIエリアの発掘区で「円形横状遺構」が44基発見されている。直径は4m前後で雀居遺跡の円形溝よりも一回り大きく、同じように杭を打ち込んだと思われる小ピットが円形に並んでいる。弥生時代中期と推定され、機能については特に記されていない。

なお北部九州では早くから片岡宏二氏が弥生時代遺跡で発見される円形・方形・隅丸形プランの「周溝状遺構」について注目し、その集成と検討作業を進めている。しかし100か所を超す遺跡の多くは、弥生時代後期に中心があり、また規模も大きく、溝中に杭列がないなど雀居遺跡の円形溝とは異質の遺構であろう。

ところで円形溝という名称は、すべてが円形プランとは限らず、また溝がなく杭列だけのものがあることから適切でないことは先述した通りである。また機能についても確定しているわけではない。発見当時は福岡県工業技術センター専門研究員鳥丸直恵氏（現 大阪芸術大学教授）よりいたいた中国貴州省撮影の写真、中国陝西省半坡遺跡や群馬県子持村西組遺跡の家畜小屋などの資料からブタ小屋ではないかと推定したが、その経緯については「雀居遺跡週刊ニュース第65号」（1998年3月23日発行）にまとめている。この小冊子は発掘作業員の皆さんに興味を持って発掘作業に取り組んでいただこうと出土遺物や疑問などを取り上げて毎週発行していたもので、決して学術的な内容というわけではない。その欠を補うために、出土した720点の動物遺体を国立歴民俗博物館の西本豊弘教授に、円形溝から採取した土壤を愛知県立明和高校の森勇一先生に分析、研究をお願いした。動物遺体ではイノシシ類がシカの6倍と圧倒的に多く、イノシシ類は野生よりも家畜のブタが多く可能性が指摘されている。一方土壤中からは食糞性昆虫が多数見出され、円形溝の周辺に糞糞があったと推定されている。これから直ちに円形溝をブタなどの家畜小屋と断定することは出来ず、今後の類例増加に期待したい。ところで鳥丸氏が同時に撮影された写真には興味深い風景が映し出されている。先のブタ小屋よりもやや間隔を開けて丸太杭を打ち込み小枝か蔓（？）を編み込んで円形の囲いを作っている。中には燃料とする炭屑があり、壁に立てかけている堅竹で碎くとのことで完全に閉じずに一方が開いているのは出し入れのためであろう。円形溝にも同じようなプランがあり機能を考えるヒントとなろう。検出当時は動物遺体が数多く出土していたことからブタ小屋と短絡的に想定したが、当時の集落にはさまざまな「囲い」が存在しては必ずある。少なくとも堅穴住居や掘立柱建物、貯蔵穴や墓地などだけが集落を構成する遺構ではない。小さなピットの中には洗濯物や染色した織物を乾燥させる物干しや織物の整経台、あるいは犬を繋いだ杭、土地を区画したり、通路を表示した杭列もあったであろう。

雀居遺跡の発掘調査では、私の認識、知識不足から見落としや判断ミスがあったかも知れない。土器をはじめとして編年的検討、類似資料の集成などその後の整理作業も十分でなく、どうにか報告書の体裁を整えたに過ぎない。雀居遺跡の調査成果を生かした歴史叙述が出来なかつた責を大いに痛感している。



Fig.244 中国貴州省のブタ小屋（鳥丸直恵氏撮影）



Fig.245 旗臈の囲い（鳥丸直恵氏撮影）